七ヶ浜町文化財調査報告書第4集

大 木 囲 貝 塚

一昭和52年度環境整備調查報告一

宮城県宮城郡七ヶ浜町教育委員会

大木囲貝塚は昭和43年3月18日国の史跡として指定告示され、直ちに昭和43年より同46年2月までの間に187,163.40㎡の用地を買収した。

この貝塚は面積の広大なことにおいても又出土品の豊富で土器編年の基準になっている点においても、日本有数の貝塚であることは考古学関係者のひとしく認めるところである。これら貴重な埋蔵文化財を保護し、その活用をはかるため史跡公園として環境整備を行うことになり昭和43年より実施しているが、52年度においては試掘調査、囲柵、植栽工事、標識設置、広場造成等を行った。予算その他の不自由な中にあって特に試掘調査においては数千年にわたる大貝層を発見し、注目すべき成果をあげた。これら貝層は既に調査済の住居跡等とともに覆屋等により保護し、復元家屋などと併せて将来一般に開放したい希望をもっているが種々制約があり遅々としているのは誠に残念である。

取急ぎ52年度の成果をまとめて報告書作成に至ったが、この編集にあたっては 調査員八巻正文氏の努力に負うところが大である。なお本報告書作成並びに環境 整備事業推進のため懇切にご指導下さった東北大学名誉教授伊東信雄氏並びに環 境整備指導委員会の委員の方々に深甚なる感謝を捧げます。

本報告書によって大木囲貝塚の価値を多くの人々に理解して頂き,更に研究者 の参考になれば幸甚と存じます。

七ヶ浜町教育委員会教育長 三 浦 作兵衛

大木囲貝塚環境整備指導委員

伊	東	信	雄	東北大学名誉教授	考古学
氏	家	和	典	宮城県多賀城跡調査研究所所長	考古学
加	藤		孝	東北学院大学教授	考古学
興	野	義	_	医 師	考古学
佐々	木	嘉	彦	東北大学教授	建築学
芹	沢	長	介	東北大学教授	考古学
丸	田	頼		千葉大学助教授	造園学

目 次

I. 試掘調査概略 ·······八巻 正文······	1
II. 山内清男博士の発掘地点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 5
Ⅲ. 層序	. 7
Ⅳ. 大木 3 4 5 6 式土器	14
V. C-14年代測定······	36
VI. 植物 ·······	- 38
A. 花粉分析	38
B. 種子 ···································	• 38
Ⅷ. 動物	• 39
A. 節足動物 ······	• 39
B. ウ= ·······	• 40
C. 貝·······	• 40
D. 魚······	• 51
E. 鳥 ······	• 54
F. 糞石 ········	• 62
G. 哺乳類 ·······小林 和彦·····	• 110
Ⅷ . 貝器 ··················	• 116
IX. 骨角器 ······	• 131
X. 土製品 ······	· 136
XI 石器•石製品	· 139

I 調 査 概 略

A. 大木囲貝塚の位置 (図版 I)

北緯38°17′58″から18′15″の間,東経141°2′36″から3′3″の間。地籍は宮城県宮城郡七ヶ浜町大字東宮浜字東大木,西大木,北下方,南下方の四つの小字にまたがる。25,000分の1地形図「しおがま」

B. 調査の目的-覆屋建設計画について

大木式上器が層位的に出土する貝層を発掘し、その地点に覆屋し、貝層を保存し展示するのが目的である。

大木囲貝塚は、昭和47年度以後環境整備を行ってきたが、貝塚に見学に来てもいわゆる目玉商品、見るに価するもの、見て感動するものがなく、単なる草原と大差がない。そとで大木囲貝塚では覆屋建設、標識設置、縄文時代人の生活とかかわりの深い植物の植栽、大木囲貝塚出土の遺物の集成、大木囲貝塚関係文献の収集を環境整備事業で行う予定である。

日本ではこれまでいくつかの遺跡で地層や貝層の展示を行ってきたが、いずれも保存技術が未熟なため見学者に良い印象を与えていない。千葉市加曽利貝塚の貝層断面保存施設の例では貝層断面にアクリルエマルジョンを注入し、鉄筋コンクリート造りの保存施設で覆屋した。覆屋の大きさは224.24㎡である。加曽利貝塚博物館の御教示によれば、貝層断面の保存はなかなかむずかしく、断面が褐色に変色し、貝層の下部では白いかたまりができる。このような変色をおこさないよう現在実験中であり、保存科学の専門の職員を必要としており、維持費が年間数百万円かかっている。それに化学薬品で固めてしまうとあとでその断面から資料を採取したいと思ってもできない。また小規模のコンクリートの建物を貝層断面に覆屋するとなるとその基礎のところを発掘し事前調査をせねばならない。また管理がたいへんで、ガラスが割られたり、貝層が掘られたり、いたずら書きが絶えない。したがって団体客や特別の見学者の場合にのみ見せるようにして、普段は一般の見学者には見せないようにするならいいだろうが、一般の見学者がいつでも見れるようにするには、管理人が必要である。

以上のようにこれまでの貝層保存にはいくつもの欠点があるので、大木囲貝塚では、昭和48 年度に指導委員会の諸先生の御指導をいただき、次のような大規模な計画を立てた。

貝塚を大きな建物で覆い,その中で少しづつ発掘をして,その発掘しているところを学生,一般の人々,研究者に見ていただく。博物館のガラスケースの中にある遺物を見るのにくらべ大きな感銘を受けるとともに,遺跡と遺構と遺物のありかたを有機的にとらえることができる。また最近の貝塚発掘は精密になり発掘に日数がかかるので,調査中風化及び盗難を受けないだ

けの設備が必要である。このような展示方法の例としては、アメリカ合衆国ユタ州とコロラド 州の州境付近の有名なDINOSAUR NATIONAL MONUMENTがある。

この「恐竜国立公園」では、恐竜の化石の出土する丘の斜面を体育館のような大きな建物でおおい、化石を発掘し、研究をつづけている。見学者は年間50万人にものぼる。玄関は丘の裾にあり、入ると事務室があって、パンフレットが置いてある。化石を収蔵する部屋、研究室があり、一般の見学者は、化石が露出している丘の斜面に張出したテラスに出て化石を発掘しているのを見ることができる。発掘は毎日しているわけではなく、研究のためどうしても必要な時にのみ行っている。テラスにはタバコの灰皿、椅子、テーブルがおいてあって、説明文を書いた標識があちこちにある。建物の壁はガラス張りで照明はそれで間に合っている。以上DINO SAUR NATIONAL MONUMENTについては尾崎 博博士に御教示いただいた。

しかしてのような大規模な覆屋建設には予算が非常にかかり、実現不可能ではないかという 意見が昭和51年度の指導委員会の席上出された。それにかわり、大木式土器が層位的に出土す る2,3の地点に小規模な覆屋を建設するしかあるまいということになり、今年度の試掘調査 が行われることとなった。昭和52年度は特に縄文時代前期の大木式土器が層位的に出土する地 点を試掘によって見つけだすよう目標をしばった。

なお、大木囲貝塚では昭和50年度から、東北大学工学部有機工業化学の山口 格教授の協力 により貝層保存実験を行っている。

C. 調查関係者

調查責任者 伊東信雄 (東北大学名誉教授)

調 査 員 八巻正文

参加学生 東北大学大学院一大内 定,宮城豊彦,今泉俊文,梶原 洋,平野信一,松本 秀明。東北大学大学院研究生一佐久間 豊。東北大学研究生一小林和彦。東北 大学3年一板垣直俊,菅沼 健,中神恭治,八木浩司。宮城学院女子大学一有 路裕子,遠藤裕子,岡部博美,加賀やす子,宮澤真弓,川村えり子,中鉢惠子 宮城学院女子短期大学一上野一恵,庄子弘子。東北福祉大学一船山政志。

作 業 員 佐藤鋼治,高橋 鉄,阿部はるえ,斉藤いずみ,佐藤千秋,佐藤とみ子,佐藤 則子,佐藤真利子,佐藤みちの,佐藤ミノル,鈴木うん,鈴木けさの,鈴木と め,我妻エイ子,我妻佳子

協 力 東北大学文学部考古学研究室、東北大学理学部地理学教室、岩渕康治。

指 導 東北大学理学部—西村嘉助,小元久仁夫,中田 高。

D. 地区設定(図版 II)

史跡全域を方眼に地区割した。海に向って舌状につき出ている丘の背に縦軸を設け、この縦

軸を 3 m単位でくぎり、南から北にアルファベットA~Tの記号を付ける。これだけでは60mにしかならない。そこでさらにその上の単位として60mでとにA,B,C…の記号を付ける。縦軸に直交する横軸も 3 m単位で区切り、記号として数字を東から西に 1 ~99を 3 m でとに付ける。しかしこれだけでは史跡全域をおおうことができない。そこで東部地域には最初にEを冠し、西部地域にはWを冠することとする。例えば西部地域の地点,区はWAOOのように表わす。基準の石標はCA70地点及びFA70地点の 2 ヶ所に設けてある。

E. 調査方法及び結果(図版 II)

CF43, CS77, FF60, FF61の4地区の試掘を行った。発掘に当っては1つの発掘区を2分し、a区b区とし、一方の区を考古学専攻の八巻が担当した。この区では遺物のみならず、土をもすべて採取し、後でその土を篩にかけて、どんな遺物をも見逃がさないようにした。他方の区は地理学教室の学生の方々に担当していただき、この区では遺物だけをとり上げ土は収納しなかった。考古学専攻の者と地理学専攻の者とでは、層の区分のしかたで時々意見のくい違いがおこった。そこでC-14年代測定の資料は、貝層断面から採取した。しかし土層断面に線を引いて層を区分していく場合も、区分のしかたに考古学の者と地理学専攻の者が行った。CS77地区の土層断面の区分は考古学専攻の者が行った。それぞれの断面から、地理学教室の教官及び学生がC-14年代測定のための資料を各土層断面の層の区分にしたがって採取した。

発掘終了後、土層断面により層序を再度検当し、発掘時における層の区分とのちがいを確め、 出土資料の層位を整理した(表 2, p.11)。土をも捨てずに採取し篩に通し遺物を収集したので 資料整理に非常に手間がかかった。そのためこの報告書ではCS77地区の結果についてのみ詳 述した。ただし篩を通して収集した遺物は、非常に細く、遺物を分類整理する余裕がなかった。 試掘を行った4地区の結果は次の通り。

CF43地区は層位的に良いものではなかった。主として大木1,2,3式土器が出土したが,上層から下層に至るまでこれらの各型式の土器が混在していた。貝層も斜面の下端のせいであろう,スガイ,クボガイ,コシダカガンガラなどの転りやすいものが主として堆積しており,しかも破砕貝層であった。発掘区の大きさは 1×1 m,深さ約1 m。

CS77地区は未完掘でボーリング調査によればなお150cm下まで貝層が確認されており,表土からの深さは4 mに及ぶ。大木6,5,4,3 式土器が順次層位的に出土しており,さらに未発掘の下層に大木2,1 式が続いていると考えられ,この1 地区で縄文時代前期の大木式土器が層位的に出土するのを見ることができそうである。土層断面が冬期の凍結により崩れるのを防ぐため,土層断面に毛布を被せ,発掘区をビニールシートで被い,白いタキロンの覆屋を建て,さらに風除けの垣をつくった(図版 III)。発掘区の大きさは 2×1 m,深さ約2.5m。

FF60,FF61地区では大木1,2式が層位的に出土した。深さは150cmで貝の保存は非常に良く,貝の色や模様も少々残っているほどである。この地区は大木囲貝塚でも標高が一番高いところにあって,眼前には松島湾があり景観秀れ,是非保存展示したい貝層である。発掘区の大きさは150cm 15cm 1

II. 山内清男博士の発掘地点

山内博士は大木囲貝塚の5地点,すなわちA、B、C、D、E地点を層位的に発掘し,大木1、2式をはじめ,繊維土器以降いわゆる厚手式の終末までに10余型式の土器が大木囲貝塚で出土することを昭和4年5月に発表した(山内清男1929a)。間もなく昭和4年7月の山内博士の論文(山内清男1929b)で初めて,大木1、2、3、4、5、6、7、8、9、10式なる一連の大木式土器の名称が発表される。これらの大木1~10式土器がさらにa,bに細別されたのは,昭和11年に発表された「日本考古学の秩序」の付表である「縄紋土器型式の年代的組織」(山内清男1936)においてであった。このa,bの細別が大木囲貝塚の層位的発掘の成果によるか否かは不明である。あるいは他の地域の編年に照らし合わせ,他の地域のある型式と並行関係を持つと思われる土器を抽出した結果,a,bの細別がなされたのかもしれない。ともかく山内博士の昭和4年5月の論文を見るかぎり,大木1、2式については出土地点・層位・土器について述べられているが,大木3~10式土器については、その後も山内博士自身によって大木式土器と層位について詳しく公表されることなく今日に至っている。頗うらくは山内博士が発掘されたA、B、C、D、E地点がどこだったのか明らかとなり,環境整備中に公表できれば幸いである。

伊東信雄博士によれば、山内博士は昭和 2 年から 4 年にかけて大木囲貝塚で 7 地点を発掘したという(図版 $\mathbb{N}-1$)。山内博士が発掘したこれらの地点のうちその位置がほぼ明らかなのは A. B. Cの 3 地点である(図版 \mathbb{H})。

A地点は,旧地主である佐藤千秋さんによれば,昔山内先生という方が東北大学から来られ,佐藤さん宅に宿し大木囲貝塚を発掘した。その時人骨が出土したのでその畑を人掘り畑と呼ぶようになり,この時出土した人骨の霊を供養し,クロマツを植え祠を置き,大木の神様として毎年お祭をして来たそうである(図版V-2)。伊東信雄博士の御教示によれば,この「人掘り畑」がA地点に間違いないという。山内博士によればA地点では,土器はほとんど全部繊維を含むものであって大木1式土器である(山内清男1929 a)。図版Vの写真は佐藤千秋さん宅に保存されている大木囲貝塚の写真で,撮影者は山内博士。図版V-1の写真は,ちようどA地点のあたりに立って北方を向いて撮っており,入江が下方地区のずっと南にまで入っているのが見え,入江をはさんで隣の丘陵の左道貝塚も写っている。

B地点は、伊東信雄博士によれば、昔塩釜から来て舟を降り大木囲貝塚に上るが、その道を登り切って台地に出るちようどその左のところだったそうである(図版 $\mathbb{N}-3$)。山内清男1929ap.124によれば、この B地点の発掘によって D地点第1層、第2層の土器は、いわゆる厚手

式土器 (「加曽利E」に並行)の下層に出土することが判明したという。伊東信雄 1973 p.16によれば,この B地点の発掘は昭和 2 年秋に行われ,大木 8 , 9 ,10式土器が層位的に出土したという。これら山内・伊東両博士の記述を合わせてみると,この B地点で縄文時代中期の大木式土器が層位的に出土する状態を見ることができそうである。

C地点は、伊東信雄博士の御教示によれば、大木囲貝塚の台地から要害部落に下りていく道に向って左の台地の平なところであったが、この道からどのくらい離れていたか不明であるという。旧地主の佐藤寅松氏に現地で教えていただいた話では、大学で昔発掘した場所は大きな杉の木(この杉の木は最近まであったらしい)から10mくらい離れたところであったという。山内清男1929a p.124によれば、このC地点では下層から大木1式土器が、上層からはいわゆる厚手式より古い1型式が出土している。 (八巻正文)

Ⅲ. 層 序

断面や平面を観察して層をいかに区分するか、ということはむずかしい問題であるが、そのように観察によって区分した上層下層を混乱なく一層一層はぐということは技術的に非常にむずかしい。今年度は考古学専攻者と地理学専攻者とが共同で発掘したが、層の区分のしかたにちがいがあり何度も議論した。そこで発掘区を2分しa区b区と名づけ一方を考古学、他方を地理学専攻の者がそれぞれ担当した。

1. 層の区分

参考文献としては主として以下のものを用いた。

菅野一郎編 1975 (昭和50年) 日本の土壌型 第10刷 農山漁村文化協会 東京庄司力偉 1976 (昭和51年) 堆積学 5 版 朝倉書店 東京

ところで層を区分する一つのめやすとして次のような意見が出された。「貝をとってくる場合にカキならカキだけをとってくるので,貝の種類をみて層を区分すべきである。」確かに,一種類の貝だけが厚く堆積している例が他の貝塚では見られるけれども,大木囲貝塚ではそうした例がない。大木囲貝塚の付近の海岸に貝をとりに行っても,砂泥地も岩礁のところも隣合っており,各種の貝がとれる。また作業員の話では,一種類の貝だけ煮るのでなく何種類の貝も混ぜて煮ることが多いという。たとえそれぞれの貝を別々に料理しても,投げ捨てる時種類別に投げるであろうか。さらに,投げすてたあとで貝殻がそのままいつまでも動かないわけでなく,ころがりやすいつぶ類が下の方にころがっていって堆積しているのが普通である。また同じ貝からなる層が2層以上あって近接しており,それらの層に上下がある例も多いので注意を要する。

2. 発掘方法

層の区分ができてもそのとおり掘る技術がなければ、せっかく分けた層の遺物が混じってしまう。そこで、以下のようないくつかの注意をしながら発掘していった。

- a. 断面・平面をつねにきれいにし、層がわかりやすいように上の層から一枚一枚はいでいく。
 - b. 層の区分のはっきりしているところから掘る。
 - c. 一つの層でも層の厚そうなところから掘る。
 - d. 掘った土をためずに, どんどんあげる。
- e. 移植でてはきっさきの方向に進みながら土をけずるようにし、ほろけた土があとに残らないようにする。

- f. 層位的に良く発掘した資料に、発掘に失敗した資料を混ぜない。
- g. 層の境に線を引きながら掘り進め、さらに各層には名札をつける。
- 3. 層の記録

発掘に夢中になったり或は急いだり、準備ができなかったりして記録をとらなかったため、 資料整理に支障をきたすことがよくあるので、

a. 発掘しながら記録していくこと。

断面には見られない層があったり、断面でみるよりも平面でみたほうが層をとらえや すい場合もあるので平面にも注意して発掘し記録する。

発掘している人だけがわかっているのでなく、他の人もどのように掘っているのかわかりやすいように、きれいに発掘し、記録しながら発掘する。

経過の記録も重要である。

- b. 平面的広がりも記録する。
- c. レベルの記録

断面に特定の垂直線を設け,層の境界のレベルを測定する。

d. 断面図の作成

少くとも2面とる。

断面の位置がわかるようにしておく。

水糸レベルを記録する。

- e. 記録はできるだけ共通の基準を使用する。
 - 1) 各層の推移状態はつぎのように区分する。

明瞭:1つの層から他の層に移るときの幅がく2cm 実線——で図示する。

判然:1 つの層から他の層に移るときの幅が $2 \sim 5$ cm 鎖線 $- \cdot - \cdot -$ で図示する。

| 漸変:1つの層から他の層に移るときの幅が>5cm 破線----で図示する。

2) 土色は次の文献を参考にした。

小山正忠・竹原秀雄 1973 (昭和48年) 新版標準土色帖 4版 日本色研事業株式会 社 東京

3) 土性

調査法は、手のひらの上でしめした土壌をころがして棒状にのばす方法が基本的で、その ほかに、ぬれた土壌や乾いた土壌を手のひらの上でこすってみる方法がある。

小量の土壌を手のひらにとって、水でわずかにしめらせ、指で均質なかたいペースト状になるまでこね、それをできるだけ細いひも状にのばす(遠藤健治郎1960)。

粘土質の可塑性土壌(埴土)では、長い細いひも状になり(太さ2mm以下)。それをまげる

と,こわれることなく輪になる。重土壌もまた細いひもになるが,それを径 $2 \sim 3$ cmの輪にすると折れる。中壌土はもっとふといひも(3 mm)までで,これをさらにのばすか曲げるとこわれる。軽壌土はひきのばすと短い柔軟でないシリンダー(腸づめ状)になってしまう。砂壌土はひも状にひっぱることはできず,小さな球になるか,指で圧した場合は扁豆状になる。砂土はころがしてかためることが全然できない。

礫つまり岩石の破片は3mm以上(日本では2mm以上)のものをいうが、これは目でよくわかる。礫が土塊中に分散している場合、細土について土性を示し、同時に礫の性質を示す(たとえば角礫質の軽壌土)。野外調査のときには、礫のだいたいの量、その形(中角礫・中円礫・小円礫)、岩石組成、全面的な礫土の層の深さを示す。

土壌の機械的組成の野外研究法とその基本的な特色を模式的に示すと表のようになる。

表1 土壌の機械的組成の区分とその特色

土性	乾燥した自然状態の 外観およびそれを手 のひらでこすったと きの外観	ナイフによる切断面の表面	自然状態で	こねてころがす試験		
			乾燥	湿潤		
埴	土.	粘質で均質,密な塊 (粉末)	なめらかで光沢がある	固く連結した塊,固 い団塊あるいは固い 構造単位	粘着性,可塑性のあ る塊	ころがしてひもにな る (太さ 2 mm以下) 曲げれば輪になる
壌	土	粘土分の多い不均質 な塊	平らであるが光沢が ない	構造をつくるが固くない	可塑性の弱い塊	もっと太いひもにし かならず,まげると こわれる
砂填	養土.	砂分が多く粘土分は わずかにまざっている	表面にでている砂で ざらざらしている	かたまりは非常に固くない	非常に可塑性の弱い塊	ころがしてもひもに ならず,ただざらざ らした表面の小球に 固まる
砂	土	全く砂からなる	同 上	細粒質で、連結して いない	可塑性を示さない	ころがすことができ ず,かたまらない
礫	土	細土とまざった礫か らなる	礫をとりされば、残	りの部分は上記のいずね	れかの性質を示す	

以上は宮沢数雄1975pp.363-365(菅野一郎編 1975)を引用した。

シルト (ねばりけのない粘土) にとむときはシルト質壌土 (Silt loam) とする。このほか必要におおじて礫質・腐植質・泥炭質などの形容詞をつける。以上は井尻正二・新堀友行1972p.42を参考にした。

4)緊密性

緊密性は土壌のいろいろな条件によって違う (機械的・化学的組織,構造,しめつけ,生物の作用,そのほか)。また表層では農耕状態に影響される (休閑地・古い耕地・牧野など)。

緊密性を精確に表わすにはいろいろな計器を使うが、野外調査では肉眼観察でつぎのよう に区別する。

非常に緊密 土壌はシャベルで掘ることができず、ノミやツルハシを必要とする。乾燥状態では非常に緊密な塊になる。ナイフのさきで線をひくと、細いつやのある線がひける。ナイフのさきはおしても土中に入らない。このような固さは、機械的成分がコロイドゲル(たとえだ酸化鉄、珪酸など)でセメントされたためである。

緊密 細土質の無構造な、孔隙の少ない土壌に特徴的。シャベルで掘るのが困難である。 ナイフでひいた線は前者よりも深くはいり、かつ、にぶい色をしている。ナイフのさきはやっと $1\sim 2$ cm入る。

やや密 小さな構造がよく発達した土塊,または相互に弱くむすびついた機械的成分からなる土塊に存在する。シャベルはらくに入り,土塊をほうり出すとばらばらになる。ナイフでひいた線は深く,まっすぐあるいはややでこぼこで,つやがない。ナイフはらくに数cmも入る。

疎 土粒間の結びつきが最も弱い。土塊はシャベルでらくにとりだすことができ、乾燥状態では非常にとびやすい。ナイフは自由に入る(疎鬆な砂)。

軟 十分膨軟な土塊にみられる。ナイフの跡は深くつく。しめった土塊を手でにぎると団塊になる。シャベルでも、板でも、靴のさきでも土をかき出すことができる。耕作直後の熟畑にみられる。

以上にのべたスケールは乾燥ないしわずかにしめった状態の土塊にしか適用できず,すべてを表わせないので,ことばで補足する(膠着質・粘質など)。

以上は宮沢数雄1975p. 368(菅野一郎編 1975)を引用した。

発掘終了後,貝層断面を見て層を検当した。発掘中にL6に入る層としてとらえた層が,掘り上がった断面をみて層を大別してみると,L4に入れた方が良い場合があるし,掘りまちがえて何層にもわたって掘ってしまい,L5出土とした一袋の遺物はいくつかの層のものであったりする。そこで,遺物に記入する層名は発掘中に記録した層名でなく,発掘終了後十分検当した層名を使った。層の大別は算用数字,細別はアルファベットの小文字を使ったが,遺物の

出土した層が一層に限定できず何層にもわたってしまった場合には、遺物にそれらの層名をすべて記入するのがたいへんなので、L4c、f、gをまとめてL47として記入することとした。 (八巻正文)

表2 CS77地区層あわせ

発掘中に記	録した層序	修正原	勇 序 名		
a 🗵	b 🗵	a 🗵	b 🗵		
L	1	L	1		
L	2	L 2			
L	3	L 3	3 а		
a L 3 . E		L 3 b			
a L 3 中	b L 3 中	a L 3 c	b L 3 с		
a L 3 F		a L 4 c			
	b L 4		L4ab		
	b L 5		bL4c		
a L 5		L4c, f, g=L41			
	b L 6		L4d, e, f, h = L4 p		
a L 6		L4h			
a L 6 上		L5b			
a L 6 イ		L5c			
a L 6 □		L5d			
a L 6 🗥		L5e			
a L 6 =		L5gh			
a L 6 ホ		L5fi			
a L 7		L5j			
	b L 7		L5a, c, d, i 6 a, b=L5ハ		
a L 7 イ	bL7イ	a L 5 k i	bL5k1		
aL7□	L 6 a				
aL7ハ	L 6 b				
a L 8	L 7				
	b L 8		L8bc		
	bL81		L 8 b		

発掘中に記	録した層序	修正原	事 序 名
a l≚	b 🗵	a ⊠	b 区
	b L 9		b L 8 d
a L a		L8a	
a L 9 イ		a L 8 d上	
a L 9 c		a L 8 d.Ł	
a L 9 d		a L 8 d 中	
a L 9 e		a L 8 d下	
a L 10	b L 10	a L 8 d下	bL8d
a L10 b	b L10イ	a L 9 a	b L 9 a
	b L10□		bL9b′
	b L10ハ		b L 9 b′
a L10 c		L111:	
a L10 d		L9b	
	b L 11		L9a, b, c =L9=
a L11 a		a L 9 b	
a L11 b		L10 a	
	b L11 b		L9d,11
aLlle, d		L11下	
	b L 12		L10b
a L12 a		a L13 b	
a L 13		a L10 b	
	b L 13		L10c, 12a, b c, d, 13a=L10本
	b L13イ		bL13b上
	b L13 b		L13 c
	b L 14		b L13b下
	b L14 b		L14 a
	b L14 c		L14 c
	b L 15		L14 c
	b L15イ		L14 b
	b L 15 b		L14 d

表-3 СS77地区層序

層序	色名番号	.t (4	緊密性	上惟	含有物	貝の種類	貝層の種類	備 考
L 1	2.5Y ½	暗灰黄色	やや密		凝灰岩砂			表 上
L 2	2.5Y ¾	黒褐色 (黒味強い)	"		擬灰岩細粒多し 骨片,貝片含む	不 明		
L3a	10 YR 1/4	褐 色 (L2よりも赤味強い)	"		凝灰岩細粒, 骨, 貝 片多し	不 明		縄文明での暦
L3 b	7.5Y R¾	暗褐色 (3 a より黒っぽい)	軟		凝灰岩粒,炭,骨片			一部落ち込みあり、 al×のみに分布
L3 c	5 Y 1/3	暗オリーブ (3 a よりやや黄色)	やや密		機灰岩粒多し 骨片含む			
L 4 a	10 Y R 3⁄2	黒褐色 (黒味強い)	,		骨,炭 凝灰岩粒			bl×のみ
L4b	2.5Y %	貨糧色	,		暴灰岩粒			bl×のみ,レンズ状
L4c	10 Y R∈ ¾	黒褐色 (4 a に類似)	錬		炭, 骨多し 凝灰岩粒, 貝微量	不 明		
L4d	10YR ¾	暗褐色 (4 cに類似するもやや明るい)	軟		凝灰岩,砂,骨,炭			凝灰岩砂がレンズ状に入っている
L4 e	2.5Y R%	オリーブ褐色	"		凝灰岩多し			凝灰岩砂がレンズ状に入っている
L4f	10 Y R' 3/3	黒褐色	"		骨,炭,凝灰岩 上面に魚骨層あり			
L4g	10 Y R 1/4	褐色	"		凝灰岩粒微量			al区分析
L4h	5 Y ¾	オリーブ	"		凝灰岩粒			
L5a	7.5YR%	明褐色	やや密					主としても区に
L 5 b	10YR 1/2	灰黄褐色	軟		炭,貝徽量			a 区のみ
L 5 c	10YR ¾	にぶい黄褐色	"		貝部分的に密	スガイ, イガイなど	混月上層	貝の分布は a 区のみ
L5b	5 Y 1/4	暗オリーブ	,		凝灰岩粒,貝微量	不 明		
L5e	5Y 1/4	暗オリーブ (5 dに類似)	"		凝灰岩粒, 鳥骨多し 貝, 獣骨, 魚骨	カキ, スガイ, アサリ, マテガイなど	混上具層	5 dに類似するが貝、擬灰岩粒、骨などを多く含む
L5f	10YR %	にぶい黄褐色	練		炭,灰,貝	イボニシ,イシダタミ,ハマ グリ,ツメタガイ,オキシジ ミなど	混上貝帽 (5 cよりは貝少し)	a XOA
L 5 g	10 Y R 3/3	にない黄褐色	軟		炭,貝徵量	オキシジミ,スガイなど		a XOA
L5h	2.5Y ¾	黃褐色	"		具,臂,凝灰岩粒	不 明	展員上國	層の上下面に無骨層あり。a区のみ。
L5 i	7.5YR%	にぶい褐色 (5 hより赤黒い)	"		炭,貝,魚骨	ハマグリ,アサリなど	混貝上層 (部分的に貝の密度多し)	·
L5 j	7.5YR%	明褐色	"		貝, 炭微量	カキなど	部分的に貝がある	a区にレンズ状にある。
L 5 k	7.5Y 1/3	暗オリーブ 黄 緑	"		岩,凝灰岩砂, 貝微量	不 明		al×.o.a
L 5 I	5 Y 1/4	暗オリーブ (やや明るい)	"		凝灰岩砂,炭, 貝徽量	不 明		L 5 kより炭少ない
L 6 a	7.5YR1⁄3	褐色	"		炭	アサリ, スガイ, ハマグリ, オキシジミ, カキなど	純貝層	EとしてalXiC。層はうすい

層序	色名番号	上 色	緊密性	上性	含 有 物	貝の種類	貝層の種類	備考
L6b	7.5YR%	明褐色 (赤っぱい)	軟		炭,貝微量	不 明		主としてalX
L 7	7.5Y ¾	灰オリーブ (やや緑)	"		貝	ハマグリなど	混貝上層	主としてalX
L8a	5YR %	明赤褐色	"		炭,魚骨 貝微量	不 明		部分的
L 8 b	5 Y 1/3	暗オリーブ	"		炭,貝	スガイなど	部分的に貝がある	主として b区
L 8 c	2.5Y ¾	黄褐色	"		炭,貝微量	不 明		bXOA
L 8 d	2.5Y ½	暗灰黄	"		炭, 貝	スガイ, クボガイ, ハマグリ など	純貝層に近い	
L9a	7.5Y ½	灰オリーブ	, ,		凝灰岩粒,貝 炭	カキ、スガイ	混具土層	
L9b	5 Y %	オリーブ (上より黄味強し)	"		凝灰岩粒,貝	スガイ	一部に貝がある	下面に魚骨層
L9b	5 Y 1/3	暗オリーブ	"		貝,凝灰岩砂	カキ、アカニシ	混具上層	
L9 с	5 Y ¾	オリーブ (9bより褐色度強)	"		炭,凝灰岩砂 貝	不 明		b区のみ
L9d	5Y %	オリーブ (9cより黄味強し)	"		凝灰岩砂,炭 貝	不明		b区のみ
L10a	10YR ¾	にぶい黄褐色	疎		貝	マテガイ多し スガイ多し .	純貝層	a Xのみ
L10b	10YR 1/6	褐色	軟		凝灰岩砂 貝微量	不明		
L10 c	10YR 1/4	褐 色 (上よりやや黒い)	"		炭,貝 凝灰岩砂	スガイが主	混上貝層または混貝上層	b区のみ、上より炭多し
L 11	7.5Y ½	灰オリーブ	"		貝微量 擬灰岩砂	不明		
L12a	10YR ¾	暗褐色	"		A			bixのみ
L12b	7.5Y ¾	灰オリーブ	"		旦, 炭	スガイ, クボガイ, イシダタミ	混上貝層	b区のみ、L12aとの間に凝灰岩砂層 がある
L12c	5Y 1/6	黄 色	"		凝灰岩砂			り区のみ
L12d	5 Y 5/4	オリーブ (上よりやや黒い)	"		擬灰粒,炭 貝	スガイ		も区のみ
L13a	10 Y R 3⁄3	にぶい黄褐色	"					ごぐ部分的 ブロック状
L13 b	10Y R½	灰黄褐色 (上より赤い)	"		貝,魚情(上部) 炭	スガイ,クボガイ,マテガイ カリガネエガイ, イシダタミ	純貝層	
L13 c	5Y %	オリーブ貨	やや密		具, 炭	ツメタガイなど	混具上層	Eとしても区にみられるが、alXにも のびる
L14a	7.5Y ½	灰オリーブ	軟		炭,貝,魚竹	ハイガイ, ツメタガイ, スガイ, ハマグリ	純貝層または混上貝層	alxにものびる
Ll4b	7.5Y ½	灰オリーブ	"		貝小量, 骨	スガイ, クボガイ	混具上層	
L14 c	7.5Y ½	灰オリーブ	4		貝, 炭	スガイなど	混貝上層	
L14d	10 Y R 3⁄3	にぶい黄褐色 (上より赤い)	,		Į.	イガイ, クボガイなど	純貝層または泥上貝層	

N. 大木3·4·5·6式土器

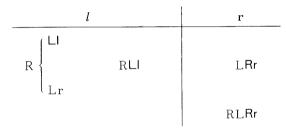
A. 縄文の復元 (図版VII~XI)

今回出土した土器の主たるものは大木3式土器であった。この時期には特殊な縄文がつかわれているが、適当な解説書がない。そこで各層出土の土器の説明に入る前に、大木3式土器の縄文について説明しておいた方がわかりやすい。

大木 3 式土器には, 2 つの特徴的な縄文がある。 1 つは 2 段にわたって撚りの方向が同じ縄文,もう 1 つは付加条縄文である。以下この 2 種類の縄文について述べるが,縄文に関する記号 (l.r.L.R.S.Z.O.I.II段) は芹沢長介1957pp. $40\sim45$ を参考にしている。

1,2段にわたって撚りの方向が同じ縄文については次の通りである。(図版Ⅲ, Ⅶ-7)

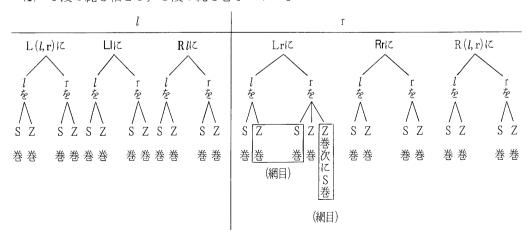
O. I 段の撚りが同じもの



I.II段の撚りが同じもの



- 2. 付加条縄文については次の通りである。(図版 $VIII-9\sim14$, IX, X, XI)
- (1) I段の縄を軸とし、O段の縄を巻きつけたもの



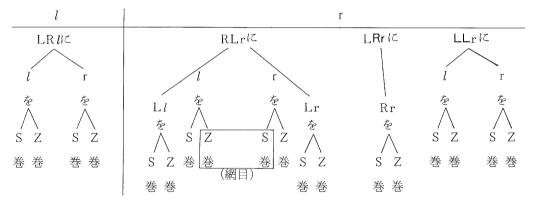
図版IX-18. 19はO. I 段の燃りが同じである。図版IX-16. 17は網目状である。これはLの縄にl或はrの縄をZ巻にし、次にS巻にすれば網目状になる。Rの縄の場合はl或はrの縄をS巻にし、次にZ巻にすればよい。

図版IX-15は, rを軸である縄に巻いていく時,途中で軸に直交に巻いたものである。

図版 \mathbf{w} -13は, \mathbf{R} l e 軸としl e \mathbf{Z} 巻にしたものであるが,写真にみるように条があく。このように条のあく縄文は大木 3 式土器に割合多く見られる。これは三本燃でもあるが, 3 本のうちの 2 本を軸とし他の 1 本を巻きつけているため付加条となり,器面にころがされると,三本燃とはっきりちがってくる。

図版IX-19は、このように I 段の縄を軸としO段の縄を巻きつけたものを、II段に燃ったものである。

(2) II段の縄を軸とし、これに縄を巻きつけたもの



巻きつける縄が〇段のもの(図版X-20, 21, 22, 23, 24, 図版XI-28)と, I 段のもの(図版X-25, 26, XI-27) とがみられる。

図版X-24は網目状。O段の縄をまずZ巻にし、次にS巻にすれば網目状になる。

軸になる縄,巻きつける縄,どちらの縄にもO.I段の撚りが同じ方向のものが認められる。また,図版XI-28の軸になっている縄は,I.II段の撚りの方向が同じである。

図版X-26はLrが3本つかわれているので三本燃縄文に類似している。RLの燃りがゆるいと三本燃になるが、RLの燃りをきつくするとRLの縄に巻きつけるLrの縄はRLの縄より外になり、付加条となる。

(3) 細い縄と太い縄

図版▼ - 9,10のように細い縄と太い縄を撚ったものも一種の付加条縄文となる。No.9のように太い縄に細い縄を巻きつけたI段の縄をさらにII段にした縄文もみられる。

(4) 付加条縄文の類例

付加条縄文は上述のほか、硬い方の縄に柔かい縄を巻いてもできる。また同じ撚りの縄が2

本あった場合、それらの縄が同じ太さ・かたさでも、一方の縄を軸とし、他方の縄を軸にからませれば付加条縄文となる。

(5) 復元のむずかしい場合

付加条縄文は、軸とする縄とこの軸に巻きつける縄とから成っている。縄を器面にころがしたとき、軸とした縄が器面に押されず、軸に巻きつけた縄の方だけが器面に押されれば、軸とした縄の種類を知ることができない。しかも軸が縄でなく、竹・木・草などを軸として縄を巻いた撚糸文とも区別ができないこととなる。

[考察]

付加条縄文は、軸に縄を巻くという点で撚糸文と原体の作り方が同じである。大木2式土器の縄文は撚糸文が盛行しているので、付加条縄文の起りは大木2式土器の撚糸文に求めることができよう。

興野義一1968 a p. 8 によれば、「大木2b式でいったんすっかり姿を消した縄文が、ここで再びあらわれ、それと共に繊維混入の手法がばったりと絶えてしやう。層位的観察によっても大木2b式の地文と大木3式の縄文回復による両者の画然たる相違には、変化が余りに突発的で、土器変遷の連続性が信じがたいほどである。これはいかなる規制によるものであろうか。私は諸磯文化の急激な進入によって、自己衷失にみえる程の"文化革命"を蒙った姿をそこにみるのである。」とまで述べている。しかし大木3式土器の縄文を復元してみると、前述したように、付加条縄文は撚糸文とその原体のつくり方において共通している。大木3式の付加条縄文は大木2式に盛行した撚糸文の原体の軸が縄になり、それにともない巻きつけ方が変ったものもあるが、撚糸文と区別のできないものさえある。けっして大木2式と大木3式土器の地文に画然たる相違、突発的変化があったわけではない。

なお大木3式土器には、2段にわたって撚りの方向が同じ縄文がある。このような縄の撚り 方は付加条縄文にも含まれていることは前述した通りである。この縄文がどのような系統を持 つものか、今回の調査では解明できなかった。

B. 土器概説

今回の調査は大木3~6式土器を層位的にとらえることができた。しかし発掘面積がわずか2㎡なので資料が少いのはいかんともしがたい。幸い興野義一氏は数多くの資料及び発掘経験をもとに、大木式土器について論文を書かれており、手に入りやすい文献なので、あわせて読まれることをすすめる。

興野義一 1968a(昭和43年3月) 大木式土器理解のために (Ⅲ) 考古学ジャーナル18 ニュー・サイエンス社 東京 1968b (昭和43年 9 月) 大木式土器理解のために(Ⅳ) 考古学ジャーナル24 ニュー・サイエンス社 東京 1969 (昭和44年 5 月) 大木式土器理解のために(Ⅴ) 考古学ジャーナル32 ニュー・サイエンス社 東京 1970 (昭和45年 4 月) 大木5b式土器の提唱 古代文化22(4) 古代学協会 京都

1970 (昭和45年 9月) 大木式土器理解のために (VI) 考古学ジャーナル48 ニュー・サイエンス社 東京

さて、今回の調査で出土した土器について述べるが、下層の古い土器から上層の新しい土器 えと層位順に述べる。

14 d層(図版XII)

大木 3 式土器が出土。

付加条縄文土器 (図版XII-1, 2)は4片出土している。写真には、結びの回転文もみられる。この結びは縄文原体の端を縄がほどけないようにとめたものと考えられる。胎土にはわずかであるが繊維を含むものがある。

縄文の粒が長方形で〇段の撚りの方向が、I段の粒の長軸にほぼ平行のものが2片ある。これは2段にわたって撚りが同じ方向の縄文であろうか。このような縄文及び前述の付加条縄文は大木3式土器に特徴的にみられる縄文である。

種別のよくわからない縄文が7片ある。これについてある人から「では別の時期の土器片が 含まれているとも考えられる」という意見が出されたけれども、これは土器の保存状態が悪い ため縄文の種別ができないものであり、胎土に繊維を含まないので、恐らく大木3式だろう。

沈線文が1片ある。この沈線文は半截竹管による平行線文ではない。体部下半に沈線が引かれており、体部の裾は張出し、底はよくみがかれていて文様はない。

底部はほかに3片出土しているが、文様あるいは圧痕はみられない。

14 c層 (図版XII)

大木 3 式土器が大部分であるが、大木 1、 2 式らしい土器が 4 片出土している。丘の斜面なので高い方が浸蝕され、古い土器が下方に流され混ったものと考えられる。

付加条縄文 (P1. XII, 3, 5, 7)は16片で,このうち 3片に繊維が含まれている。縄文の 粒が細長く 2 段にわたって撚りの方向の同じ縄文が 4 片ある。また縄の端の結びによる, S あ るいは逆 S の連続で成っている連続波文 (綾絡文) がある。このほか単節, 無節の縄文を持つ 土器が13片,種別不明縄文1片がある。

大木 3式かどうか疑わしいものとしては、繊維を含む羽状縄文土器が 3 片で、このうち結束の見られないものが 2 片(大木 1 式、または大木 2 式であろうか),掛けの留めの結びとみられるもの 1 片(大木 2 式であろうか)。繊維を含んだ撚糸文 L I を Z 巻にしたもの(大木 2 式)が 1 片出土している。

粘土紐貼付文 (P1. XII, 4, 8) にはいずれもその上に粘土紐に直交した刻目がある。P1. XII, 4の刻目は竹管の軸をややたおし,竹管の先端を粘土紐に押していったものである。P1. XII, 8の刻目は指先で押したように見える。この土器の縄文はRLRlで粘土紐貼付文の付近の縄文はすり消されている。これは粘土紐を器面につけようとして粘土紐のまわりをこすったためであろう。

半截竹管による沈線文の土器が 3 片出土している。P1.XII, 6 は地文 1 R 1 で縄の結びによる連続波文がみられ、口縁に 3 段の山形文がある。

無文の土器片は21片出土している。

14 b 層 (図版XII)

大木 3 式土器が出土。

付加条縄文の土器が1片,単節の縄文土器1片,無文の土器が1片出土している。

14 a 層(図版XIII)

大木 3 式土器が出土。

O段と I 段の撚りの方向が同じ縄文の土器 (P1. XIII, 11) が 1 片, 単節の縄文のもの 2 片, 種別不明の縄文 3 片が出土している。

半截竹管による沈線文の土器(P1. XIII, 10)が2片,無文の土器片が3片出土している。

13c層(図版XIII)

大木 3 式土器が出土している。

付加条縄文の土器が1片,単節の縄文土器が1片,種別不明の縄文が1片出土している。半 截竹管による沈線文を持つ上器が1片,無文の土器が1片出土している。

b区13b下層

大木 3 式土器が出土。

種別不明の縄文を持つ土器3片。半截竹管による平行沈線間を爪形文でみたしたもの1片,

無文の土器 4 片が出土している。

b区13b層(図版XIII)

大木 3 式十器が出土。

付加条縄文土器が1片,太い縄に細い縄を巻いたもの(Pl.XIII,15)1片,2段にわたって撚りの方向が同じ縄文土器3片,単節の縄文土器4片,種別不明の土器2片が出土している。

粘土紐貼付文の上にへら先で刻目を粘土紐に直交してつけている土器 (Pt. XIII,14)が1片。 無文の土器としては口縁部2片,胴部6片が出土している。底部が1片出土しており,底は 無文である。

a 区13 b 層 (図版 X Ⅳ)

大木3式土器が出土。

2段にわたって撚りの方向が同じ縄文を持つ土器1片,単節の縄文土器8片,種別不明の縄文の土器6片が出土している。

Pl.~X~V,f8にみられる粘土紐貼付文上の刻目は,右傾し,器面に届くほど棒を押して刻目をつけており,粘土紐を器面にしっかりとつける役割を果しているように見える。地文はL~R~l~vある。

半截竹管による平行沈線文のある土器片が1片出土している。

無文の土器としては口縁部 3 片, 胴部 1 片。底部が 2 片出土しており, 底は無文である。

11下層 (図版 🗙 Ⅳ)

大木 3 式土器が出土。

付加条縄文の土器 1 片、繊維を含まない羽状縄文の土器 1 片、単節縄文の土器 3 片、種別不明の縄文の土器 4 片が出土している。

Pl. XIV, 20は地文がLR l で、粘土紐貼付文には右傾した深い刻目が施されている。 無文の土器としては口縁部が 2 片、胴部が 1 片出土している。

11上層

大木 3 式土器が出土。

粘土紐貼付文に刻目があるもの1片,無文の土器片1片が出土している。

10[□] (10 c, 12 a, b, c, d, 13 a) 層 (図版 X IV)

大木 3 式土器が出土。

P1. XIV, 22は半截竹管の軸をやや下げて刺突したもので、この刺突文の下部には縄文がみられるが上半分には縄文がみられない。

単節の縄文を持つ土器は3片、縄文の種別の不明な土器5片が出土している。

b区10b層 (図版 XⅣ. XV)

大木3式土器が大部分であるが、大木2式らしい土器が1片出土している。

付加条縄文2片,太い縄と細い縄による縄文が1片(Pl.XIV,24),縄文の粒が長くO段の撚りの方向が粒の長軸に平行しているものが1片,単節の縄文を持つ土器が5片,無節の縄文の土器が2片,縄文の種別が不明な土器14片が出土している。以上は、大木3式土器と考えられる。

羽状縄文土器が2片出土しており、1片は掛けの留めによる結びのある羽状縄文で繊維を含み大木2式と考えられる。もう1片には繊維が含まれていない。

粘土紐貼付文に刻目のある土器片は 3 片出土している。P*l*. XV, 26の刻目は半截竹管の軸をやや下げて粘土紐に直交させている。P*l*. XV, 27の例では,器体に水平の貼付文の刻目は右傾しているがその下の細い貼付文の刻目は,貼付文に直交あるいはやや斜めになっている。

粘土紐貼付文と、半截竹管による平行沈線文のある土器が 3 片出土している。Pl.~XV, 30の土器は地文が網目状の付加条縄文または燃糸文で、粘土紐貼付文の付近は器面に貼付文のしっかりつけようとしたためであろう、こすられ、網目文様は消えている。貼付文にほどこされた刻目はへらで軽くおさえたようで、右傾、左傾、あるいは粘土紐に直交しており一様でない。Pl.~XV, 28の粘土紐にほどこされた刻目は半截竹管によるもので粘土紐に直交している。Pl.~XV, 29の粘土紐の刻目は右傾しており、縄文はこの粘土紐より下の体部につけられている。

沈線文としては、半截竹管によらないものが1片出土している。

P1. XIV, 23は台付土器で無文,大木3式期の器形と考えられる。ほかに無文の土器としては口縁部が5片,胴部が4片出土している。

底部は2片出土しており、底は無文である。

a区10b層(図版XV)

大木3式土器が大部分であるが、大木2式土器が1片出土している。

付加条縄文土器が2片,単節縄文土器が5片,縄文の種別の不明なものが5片出土している。 以上は大木3式土器と考えられる。

繊維を含んだ撚糸文土器が1片出土している。これは大木2式土器であろう。

粘土紐貼付文に刻目のほどこされた土器が1片出土している。

半截竹管による沈線文土器は 4 片出土している。Pl.~XV, 33には棒先による刺突文がみられる。Pl.~XV, 31は繊維を含んでいる。

無文の土器は3片出土している。

a 区10 a 層 (図版XVI)

大木 3 式土器が出土。

半截竹管による沈線土器が1片,単節の縄文土器が1片出土している。

b区9b′層(図版XVI)

大木3式土器が大部分あるが、大木2式土器が1片出土している。

付加条縄文土器が2片,単節縄文土器が8片,縄文の種別の不明なものが1片出土している。 Pl. XVI,38の胎土には繊維が含まれており,地文はLrの縄を軸にMarline hitch (藤原覚一,1974,pp.90-91)のしかたで結んだ撚糸文であり,大木2式土器であろう。

半截竹管による沈線文土器は 3 片出土している。Pl. XVI, 36の土器は半截竹管による平行沈線間に,半截竹管による刺突文がみられる。Pl. XVI, 37の地文はLR l 0縄文である。

無文の土器としては口縁部が1片, 胴部が4片出土している。

a 区 9 b′層 (図版XVI)

大木 3 式土器が出土。

付加条縄文の土器が1片,2段にわたって撚りの方向が同じ縄文の土器が1片,単節縄文土器が2片出土している。

半截竹管による沈線文のある土器が1片出土している。

底部が1片出土しており、底は無文である。

9 b層

単節の縄文土器が1片出土している。

b区9 a層 (図版XVI, XVII)

大木 3 式土器が出土。

付加条縄文土器 4 片, 2 段にわたって撚りが同じ方向の縄文を持つ土器が 3 片出土している。 ほかに無節の縄文土器 1 片, 単節の縄文土器 9 片。無文の土器 5 片。

a区 9 a層 (図版XVII)

大木 3 式土器が出土。

付加条縄文土器が2片,単節の縄文土器が9片,縄文の種別不明の土器3片が出土している。 粘土紐貼付文の上に,半截竹管を間隔をおいて刺突していった文様の土器が1片出土している。地文はLR1で刺突文は粘土紐に直交したものである。

半截竹管沈線文の土器 (Pl. XVII, 45) が1片出土している。

無文の土器は口縁部が1片, 胴部が4片。

底部が2片出土しているが、いずれも底は無文である。

a区8d下層

大木3式土器が大部分であるが、大木1または2式土器が1片出土した。

付加条縄文土器が1片,単節縄文の土器が5片,縄文の種別不明の土器が2片出土している。 1片だけ大木1式あるいは2式と考えられる土器が出土した。これはLの縄を軸にZ巻にし 次にS巻にした網文の土器で繊維を含んでいる。

沈線文土器は3片。竹管刺突による爪形文土器が1片,棒の先による刺突文土器が1片。 無文の土器としては口縁部が1片,胴部が1片出土している。

a区8d中層(図版XVII)

大木 3 式土器が出土。

付加条縄文土器 3 片、O段と I 段の撚りの方向が同じ縄文土器 3 片、単節の縄文土器が 6 片、縄文の種別不明の土器が 8 片出土している。

粘土紐貼付文に刻目のある土器は2片出土している。Pl. XVII,49は口縁部に半截竹管による 沈線文があり体部には単節の縄文がほどこされ,口縁部と体部の境に粘土紐貼付文がある。貼 付文につけられた刻目は棒で粘土紐をしっかりと器面におしつけているようである。

沈線文の土器は3片出土しており、そのうち2片の沈線は半截竹管によるものである。もう1片は地文をRLrとし、半截竹管をつかわない沈線である。

無文の土器は口縁部が7片,胴部が16片出土している。

b区8d層(図版XVII)

この層には大木3式と4式土器が含まれる。

付加条縄文土器は2片,無節の縄文を持つ土器が2片,単節の縄文を持つ土器が27片,縄文の種別の不明なもの17片が出土している。

燃糸文土器が4片出土している。

粘土紐貼付文は4片出土しているが、刻目はない。Pl. XVIII. 55の口唇部と口縁部には粘土 紐による細い山道文(高橋詠而 1977 p.55)がみられる。これらは大木4式である。

Pl. XVII,52の沈線文は半截竹管によるもので大木3式としてよいだろう。半截竹管による沈線文の土器は他に3片出土している。

Pl. XVIII, 54,56の沈線文は半截竹管をつかっていない。沈線の断面は凹形で,沈線の底部には棒の維管束のあとと思われる細いすじがみられる。地文の縄文は山形文を境にしてそれより下にみられる。Pl. XVIII,57は地文がLRlで沈線は断面凹形である。このような沈線文はほかに1 片出土している。これら54,56,57の沈線文土器は大木4 式であろう。

Pl. XVII, 53は半截竹管による平行沈線文の間に、半截竹管により刺突文をつけた土器である。 Pl. XVII, 50の口唇部には棒先によって刺突文がつけられる。 Pl. XVII, 51の土器は、上部に半截竹管によると思われる平行線文があり、その下に半截竹管による刺突文がみられる。 口唇部 に刺突文のある土器はもう 1 片出土している。

無文の土器としては口縁部が4片、胴部が29片出土している。

底部は2片出土している。いずれも無文である。

a区8d上層(図版XVIII, XIX)

大木4式土器が出土。

2段にわたって撚りの方向が同じ縄文を持つ土器が5片,無節の縄文の土器が6片,単節の 縄文の土器が15片,縄文の種別の不明な土器が7片出土している。

燃糸文が1片出土している。

粘土紐貼付文は8片出土している。このうち1片だけに粘土紐上に棒先によるまるい刺突文がある。Pl. XIX,63の口唇部につけられた突起にはまるいくぼみがある。Pl. XVIII,60及びXIX,64の土器には,胴部にも口唇部にも粘土紐による山道文がある。No.60の地文は付加条縄文らしく条と条との間が空いている。Pl. XIX,62の土器は二重になっている円状の貼付文の一部が剝落している。Pl. XVIII,61は細い山道文が裏面につけられたものである。

沈線文土器は 3 片出土している。P*l.* **XVIII**, 59の沈線は断面凹形で山形文は不揃いである。山形文から 2 本の沈線が下がっているのは(P*l.* **XIII**, 12),(P*l.* **XVI**, 39),(P*l.* **XVII**, 49) などの大木 3 式土器の文様から来たものであろう。

無文の土器としては口縁部が1片,胴部が23片出土している。底部は3片出土しているが, 底は無文である。

この層は大木4式期と考えられるが、付加条縄文、2段にわたって撚りの方向が同じ縄文が

あるように、大木3式の特徴がかなり残っている。

8 bc層(図版XIX)

大木4式十器が出土。

単節の縄文土器が4片、縄文の種別不明の土器が6片、粘土紐貼付文が2片出土している。

Pl. XIX, 67の土器は突起を持つもので、口縁部には、まん中をくぼませた円形の貼付文がある。この裏面には串先による刺突文がたくさんつけられている。

無文のものは胴部が2片、底部は3片出土しているが、いずれも底は無文である。

8 b層

大木4式土器が出土。

P1. XIX,65及び66のように、口縁上端に山道文の粘土紐が貼付されている土器が1片、口唇に細い山道文の粘土紐が貼付されている土器が1片、粘土紐貼付文の上に棒の先で刺突した文様のある土器が1片出土している。

またP1. XIX、67と同一個体であろうか、同じような突起が1点出土している。

単節の縄文を持つ土器は7片、縄文の種別不明のものは5片出土している。

無文の土器は胴部が6片出土している。底部が1片出土しているが底は無文である。

8 a 層 (図版 XIX)

大木4式土器が出土。

Pl. **XIX**, 68は完形品ではないが、底部近くまである。地文は LR l の縄文で、口縁部には一本の粘土紐が器体に水平につけられており、口唇部には粘土紐貼付による細い山道文がある。

単節の縄文を持つ土器が12片、縄文の種別不明のものは5片出土している。

無文の土器としては鋭頭形の口縁部が1片,胴部が7片出土している。

底部は2片出土しており、底は無文である。

7層 (図版XX)

大木4式土器が出土。

P1. XX, 69, 70は地文がLRlの縄文で、口縁部に粘土紐を貼付している。69の口唇部には粘土紐貼付による細い山道文がある。粘土紐貼付文はほかに2片出土している。

この層では付加条縄文を持つ土器が1片出土している。単節の縄文を持つ土器は20片,縄文の種別が不明な土器は6片出土している。

無文の土器は口縁部が1片,胴部が7片出土している。

6 b層(図版XX)

大木4式十器が出土。

Pl. XX, 71は口部上端に粘土紐をはりつけた土器で、胴部には縄文LR l が施文されている。地文にLR l の縄文を施文し、貼付文を持つ土器はほかに 3 片出土しており、無文の器面に貼付文のあるものは 1 片出土している。

単節の縄文が施文されている土器は3片,縄文の種別不明の土器は3片,無文の土器は胴部が1片出土している。

6 a層(図版XX)

大木4式土器が出土。

Pl. XX,72の突起はPl. XIX.67に類似している。Pl. XX,73 は半截竹管による爪形文と沈線文及び棒を器面に押していって施文したと考えられる櫛歯文から成る。この73の文様はPl. XVIII,51に由来するものであろう。単節の縄文のある土器は2 片出土している。

5ハ (5 a, c, d, i, 6 a, b) 層 (図版XX)

大木4式土器が出土。

縄文LRl上に粘土紐を貼付したものが8片,無文の器面に粘土紐を貼付したものが1片出土している。

縄文はLRlが36片出土している。6b層以来縄文はLRlのみである。Pl. XX,74は口縁部片。

無文の土器としては口縁部が2片,胴部が5片出土している。

底部は5片出土しており底は無文である。

b区 5 kl層 (図版 **XXI**)

大木4式土器が出土。

Pl. XXI, 78, 79とも地文は縄文LRl で、粘土紐貼付文を持つ土器である。

Pl. XXI, 79の土器は縄文が胴部にのみ見られ、胴部の貼付文は菱形を連続したようにみえるが、粘土紐を観察すると 2 段の山形文をつけたものであることがわかる。

無節の縄文が1片,単節の縄文が1片出土している。無文の土器は1片出土している。

a区5 kl層(図版XXI, XXII)

大木4式土器が出土している。

太い粘土紐を口縁部に貼付したもの (Pl. XXII, 83, 84),細い粘土紐を口縁部に貼付したもの (Pl. XXII, 86),口縁部の突起 (Pl. XXII, 85) などが出土している。

Pl. XXI, 80の文様は、Pl. XX, 73に類するもので細い棒で1つ1つつけていったようである。

Pl. XXI, 82は半截竹管を使った平行沈線文である。

無節の縄文が2片,単節の縄文が21片,縄文の種別不明の土器が8片出土している。

Pl. XXI, 81は撚糸文が胴部に施文されている。この撚糸文はRlo縄を軸に Marline hitch (藤原覚一 1974 pp.90-91) のしかたで結んだものである。

無文の土器は口縁部が3片、胴部が3片。

底部は3片出土しているが、底は無文である。

5 j 層 (図版 XXII)

大木4式土器のほか,わずかに大木1あるいは2式土器が出土している。

- Pl. XXII, 87は地文がLR lの縄文,口縁部には粘土紐貼付による山道文,直線文がみられる。
- Pl. XXII,88は半截竹管により沈線及び爪形文を施文している。
- Pl. XXII, 89は口縁部の突起で、まんなかにまるいくぼみがある。

単節の縄文を持つ土器が10片、縄文の種別不明の土器が10片出土している。

単節縄文の土器で繊維を含むものが3片出土しておりそのうちの1片は羽状縄文であり、大木1または2式と考えられる。

無文の土器は胴部が3片出土している。

5 i 層 (図版 XXI)

大木4式土器が出土。

この梯子状文を持った土器は、5ハ層の土器といっしょになっていたが、断面にこの土器を掘り出したあとが残っていたため層位が明らかになった。地文はLR1の縄文である。

5 fi層(図版XXII)

大木4式土器が出土。

粘土紐を貼付した土器はPl. **XXII**, 90, 91の 2 片である。90の口唇部につけられた粘土紐は渦巻文及び山道文である。この山道文は 2 列ありそれがくっついてPl. **XXI**, 79の胴部の文様のよ

うに菱形文にも見える。山形をした口縁部が2片出土している。

単節の縄文を持つ土器が6片、縄文の種別不明の土器が1片出土している。

Pl. **XXII**, 92は底部片で網代の圧痕がある。どのような編みかたなのかはっきりしない。大木 囲貝塚出土の網代については,荒木ョシ 1971 pp. 40-41によって,縄文時代前期のものとして 紹介されている例がある。

無文の土器は口縁部が2片,胴部が3片出土している。

5 gh層 (図版XXIII)

Pl. XXIII, 93は底部で、カゴのあとがついたものであろう。

単節の縄文を持つ土器が3片、縄文の種別不明の土器が3片出土している。

5 e 層 (図版XXIII)

大木4式土器が出土。

地文がLR l の縄文で、それに粘土紐貼付文のある土器が 2 片出土している。

単節の縄文を持つ土器が15片、縄文の種別不明の土器が7片出土している。 無文の土器は口縁部が1片出土している。

5 d 層

単節の縄文を持つ土器が6片,縄文の種別が不明の土器が4片出土している。

無文の土器は口縁部が5片出土している。このうちの1片は輪積み痕を残したままで、地文 もない。胴部は5片出土している。

底部は3片出土しているがいづれも無文である。

5 c 層

大木4式土器が出土。

粘土紐貼付文のある土器が1片,単節の縄文を持つ土器が2片,縄文の種別不明の土器が2 片出土している。

5 b 層 (図版 XXIII)

大木5a式土器が出土。

この層になってはじめて細い粘土紐をちぎったものがみられる (P1. XXIII, 95)。 興野義一 1969. p. 8 ではこれを大木 5 式前半のものとしている。

単節の縄文を持つ土器が2片,縄文の種別が不明な土器が2片出土している。 無文の土器は胴部が2片出土している。底部が1片出土しているが底は無文である。

4 h 層 (図版**XXIII**)

大木5a式土器出土。

Pl. **XXIII**, 96は地文がLR l の縄文で、粘土紐は文様が曲がるところで必ずちぎって重ねている。粘土紐貼付文は、ほかに1片出土している。

単節の縄文を持つ土器が19片、縄文の種類がはっきりしていないもの9片。 無文の土器は胴部が8片。底部は2片出土しているが、底は無文である。

4 p (4 d, e, f, h)層(図版XXIII, XXIV)

大木4,5a式土器が出土。

P1. XXIII,97はP1. XXIII,96に類似したもので、大木5a式土器である。山形口縁の下には太い粘土紐が縦にはりつけられ、その太い粘土紐の上に細い山道文が貼付されている。この山道文は一部切れているところがある。この縦位の文様の左には、梯子文がある。地文は撚糸文である。

Pl. XXIII, 98は口縁部にはりつけた渦巻文,101は口唇部に粘土紐貼付による山道文を持つ。 どちらも大木4式土器の特徴である。

Pl. **XXIII**, 99は口縁部上端につけた円文で竹管による刺突文がみられる。大木 5 式土器である。

Pl. XXIII, 100はLR l の縄文で粘土紐をはりつけ、その粘土紐に沈線を引いたものであり、文様の形は興野義一 1968b p.18にみられるように大木 4 式のものである。

単節の縄文を持つ土器は38片、縄文の種別不明の土器は8片出土している。

無文の土器としては口縁部が6片,胴部が11片出土している。

底部は無文のもの4片、網代痕のあるものが1片出土している。

4 イ (4 c, f, g)層 (図版XXIV)

大木 4, 5a式土器が出土。

Pl. XXIV, 103は地文がLR l の縄文で口縁部には粘土紐貼付による太い山道文がある。口唇部に粘土紐により渦巻文をつけたものも出土している。これらは大木 4 式土器である。

Pl. XXIV, 104は縄文LR l の上に粘土紐貼付文のある土器で、粘土紐をちぎって折重ねており、大木 5 式の特徴が出ている。

縄文のみの土器としては単節の縄文を持つ土器が11片,無節の縄文を持つ土器が1片,種別 不明のものが8片出土している。

無文の土器としては口縁部が1片、胴部が3片。底部は4片出土しており、底に文様や網代、 木の葉等の形跡はみられない。

b区4c層(図版XXIV, XXV)

大木 4. 5a 式土器が出土している。

大木 4 式の特徴を持つ粘土紐貼付文が出土している。Pl. **XXIV**, 106 は山道文が口唇部と体部 につけられている。Pl. **XXIV**, 107 は口唇部に渦巻文をつけたものである。Pl. **XXIV**, 105 は口縁 部に太い山道文と直線文が貼付されている。

Pl. XXV, 111はPl. XXIII, 97と同一個体で,No.111は97の右に接合する。突起の形ははっきりしない。大木5式土器である。

Pl. XXIV, 112,113は粘土紐を一つ一つちぎってつけていったもので大木5式土器である。

Pl. XXV, 110は地文が撚糸文で沈線はふぞろいな山形文である。大木5式土器である。

Pl. XXV, 114のような文様は大木 4 式期に出土している (Pl. XX, 73, Pl. XXI, 80)。いちばん上には棒あるいはへうによってつけられたとみられる櫛歯文, その下に竹管あるいは半截竹管によるとみられる刺突文, その下には半截竹管による爪形の形跡のある沈線文, その下にはまた刺突文があり, その下には半截竹管による沈線文と刺突文がある。

付加条縄文を持つ土器が1片,単節の縄文を持つ土器が69片,縄文の種別不明のものが30片 出土している。

撚糸文が2片出土している (Pl. XXV, 109)。

無文の土器は口縁部が2片、胴部が16片出土している。

底部は文様や網代,木の葉等の形跡のないものが7片,網代の圧痕のあるものが4片出土している。Pl. XXIV,108は2本超え,2本潜り,1本送りの網代圧痕である。

a 区 4 c 層(図版 XXV, XXVI)

大木5a式土器が出土している。

Pl. XXV, 116,117は細い粘土紐をちぎって折重ねた文様の土器である。

Pl. XXV, 115は口唇部を棒で外から内に向かっておすことによって口唇 に変化 をつけている。地文はL R l の縄文である。

縄文のみの土器としては、単節縄文の土器が 4 片、種別不明のものが 8 片出土している。 無文のものとしては胴部が 1 片出土している。底部はPl. **XXVI**、 118の 1 個で底に網代の圧 痕がみられる。この土器の網代の編み方は1種類ではないようである。

4 ab層

縄文LR 1の土器が1片出土している。

b区3c層(図版XXVI, XXVII)

大木5a, 5b式土器が出土。

細い粘土紐貼付文には、Pl. XXVI、120、122のように屈折部で一つ一つちぎってつけているものと、Pl. XXVI、119のように孤状のひもをつなげていったため必ずしもちぎれていないものとがある。

P1. XXVII, 126は口縁部で先端が欠けている。刺突文は竹管を使用している。以上は大木5a式土器である。

Pl. XXVII,123は口唇部に半截竹管により刺突文をつけたものである。これは大木5b式土器である。

Pl. XXVII, 125は隆線の上に半截竹管による刺突文のある土器で、この層から隆線に刻みの入った土器が現れる。隆線の下部には半截竹管により沈線が引かれている。大木5b式土器である。

沈線文にはPl. XXVII,127のように半截竹管によるものと,Pl. XXVII,124のように棒で一本一本引いていったものとがある。Pl. XXVII,128の沈線文は,弧状のものが半截竹管をつかった沈線で,その下の沈線は一本一本引いたものである。大木5b式土器である。

縄文のみの土器では単節縄文を持つ土器が31片,種別不明のものが25片出土している。 燃糸文が2片出土している。

無文の土器としては、口縁部が1片、胴部が10片出土している。

底部としては網代圧痕のあるものが1片,無文のものが8片出土している。

a 区 3 c 層(図版XXVIII)

大木5b式土器が出土。

粘土紐貼付文としては刻目の入ったものと、刻目の入っていないものとがある。Pl. XXVII、129は地文がLR l、粘土紐を貼付し、その粘土紐上にヘラで刻目を入れている。

Pl. XXVII, 130は口縁部の肥厚した部分にヘラによる刻目をつけ、その下の頚部には半截竹管をつかった直線、あるいは弧状の沈線文が引かれている。口唇部は棒で押すことによって刻目を入れているらしい。

無節の縄文を持つ土器が2片,単節の縄文を持つ上器が16片,種別不明のものが24片出土している。

無文の土器としては胴部が7片出土している。

底部は2片出土しているが、底は無文である。

3b層(図版XXVIII, XXIX)

大木5b式土器が出土している。1片だけ大木3式と考えられる土器が出土した。

粘土紐貼付文には、刻目のないものと、刻目の入っているものとがみられる。Pl. XXIX,134は地文をLR l の縄文とし、細い 3 本の粘土紐を平行に貼付し、その間に山形文をつけている。口縁部には厚さ 6 mm幅27mmの粘土板をつけ、上下に刻目を入れる。Pl. XXIX,133の口縁部の装飾は134に似ているが、頚部に粘土紐をつけてその上に刺突文を施したものである。Pl. XXIX,135は口唇に刻目のあるもの、Pl. XXIX,137は口縁部に幅の広い粘土紐をつけているが刻目のないものである。

Pl. XXVIII, 131は水平な沈線文と連弧文とからなる。口縁も 5 cmほどの粘土紐を弧状につけることによってつくっている。Pl. XXVIII, 132は、半截竹管により水平及び垂直の沈線を引き、田のうねのような文様を描いている。この沈線文の左右には半截竹管による爪形文がみられる。

Pl. XXIX, 138は半截竹管を刺突した文様であるが、刺突する前に半截竹管によって区画線が引かれている。

縄文のみの上器としては付加条縄文が1片, これは大木3式土器であろうか。単節の縄文を持つ土器が4片,種別不明のもの18片が出土している。

3 a 層 (図版XXIX, XXX, XXXI)

この層は大木 5 式及び大木 6 式土器が主であるが,大木 2 、 7 、 8 、 9 、 10式土器もわずかに出上している。

口縁部を肥厚させたものとしてはPl. XXX, 141,143,144,146がある。このうち肥厚部の上下に刻目のあるものは141, 146である。141は大木5b式。146は山形の口縁部に粘土紐がつけられその上にまるいくぼみがあり、これは大木6式土器である。143, 144は肥厚部の下端にのみ刻目のあるもの、Pl. XXIX, 139は肥厚部に刻目のないものである。139, 143, 144は大木5b式土器である。

口縁部と胴部との間が肥厚しているものとしては、Pl. XXX, 142,145, Pl. XXXI, 151がある。 このうち,142,145には口唇部と肥厚部に刻目がある。142は大木5b式,145は大木 6 式,151は縄文 時代中期の土器であろう。 沈線文には、半截竹管による平行沈線文のもの(Pl. XXX、148、149)と、棒により一本一本線を引くもの(Pl. XXX、147)とがある。148の地文は撚糸文である。147、148、149は大木5b式土器である。

Pl. XXIX,140は半截竹管により沈線文を描き、次にその沈線にそって半截竹管による刺突文を施したものである。これは大木5b式土器である。

Pl. XXXI, 152は大木 6 式土器である。口縁部の作り方(富士山形の口縁部を作る場合,その 頂部の平な部分は粘土紐を短く切った塊を並べている)は大木5b式にすでにみられるものであ るが、指でなでて引いたような太い沈線と器形は大木 6 式のものである。

2層 (図版**XXXI**)

この層からは大木 $6 \sim 10$ 式土器,縄文時代後期の土器,陶器片が出土している。Pl. XXXI,153は大木 9式のキャリパー形土器の口縁部である。

1層(図版XXXI)

この層からは大木 8 ~10式土器が出土している。Pl. XXXI, 154は大木10式土器の口縁部である。

考 察

1. 繊維土器

大木 3 式土器には繊維が全く含まれていないというのが定説であるけれども、大木囲貝塚出土の大木 3 式土器には繊維を含むものがある。今回発掘したCS 77区の例でも、14d、14c 層から繊維を含む大木 3 式土器が出土している。

2. 羽状縄文

大木 3 式土器には羽状縄文がある。興野義一 1968 p. 9 にも大木 3 式土器の羽状縄文についての記述がある。

CS77区の大木3式土器を出土する各層の羽状縄文の出土状況をまとめてみると次のようである。

14c 層 繊維を含むもの 3 片、このうち結束のある羽状縄文が 1 片。

11下層 繊維を含まないもの1片。

b 区10b 層 繊維を含むもの1片,これは結束のある羽状縄文である。

繊維を含まないもの1片。

これらの羽状縄文を持つ土器のうち、繊維を含むものは大木1式か大木2式、繊維を含み結

束のある羽状縄文は大木2式としても、繊維を含まない羽状縄文があり、これはあるいは大木3式の羽状縄文かもしれない。

3. 大木3式期末の土器

大木3式期末の土器はあまり知られていない。CS77地区でも良い資料は出土しなかった。 この時期の土器としては、八巻正文 1978 pp.32-33の土器がある。これは沈線文土器であるが、また刻目のない粘土紐貼付文も出現する。

4. 編物圧痕

CS77地区ではfi層(大木4式)ではじめて網代圧痕が出現した。その後網代圧痕は次第に数を増す。

5 gh層(大木 4 式)出土の P l. XXIII,93の 圧痕は,四つ目挿し竹のカゴあるいは敷物の 圧痕であろうか,もじり編みではない。なお 興野義一氏の御教示によれば網代圧痕は大木 $1\sim3$ 式 十器にもすでにみられるという。

5. 大木5a式土器

興野義一氏が提唱した大木5b式土器は、確かに大木5式のうちでも上層(3c, 3b, 3a層)から出土した。そこで大木5b式より下層出土の大木5式土器を大木5a式とした。大木5a式土器は5b層, 4h層, 4ロ層, 4イ層, b区4c層, a区4c層, b区3c層から出土しているが、4ロ, 4イ, b区4c層では大木4式土器と混在する。大木4式と大木5a式が混在する理由としては、斜面なので浸蝕により古い大木4式土器が混ったのか、発掘技術によるのか、ともかく大木5a式土器は層位的に大木4式と5b式土器との中間にあることは確かである。ただし今回の発掘では資料が少く、大木5a式の内容を把握できるまでに至っていない。

結 語

各層から出土した土器の型式は次のとおり。

14d 層 大木 3 式

14c層 大木3式 大木2式及び1式若干

14b層 大木 3式

14a 層 大木 3 式

13c 層 大木 3 式

b区13b下層 大木3式

b区 13b層 大木3式

a区 13b 層 大木3式

11下層 大木 3 式

- 11上層 大木 3 式
- 10 ホ層 大木 3 式
- b区 10b層 大木3式 大木2式若干
- a 区 10b 層 大木 3 式 大木 2 式 (1片)
- a区 10a層 大木3式
- b区 9b′層 大木3式 大木2式 (1片)
- a区 9b'層 大木3式
- b区 9a層 大木3式
- a区 9a層 大木3式
- a区8d下層 大木3式 大木1または2式(1片)
- a 区 8 d 中層 大木 3 式
- b区 8d層 大木3式,4式
- a区8d上層 大木4式
 - 8 b c 層 大木 4 式
 - 8 b 層 大木 4 式
 - 8 a 層 大木 4 式
 - 7 層 大木4式
 - 6 b 層 大木 4 式
 - 6a層 大木4式
 - 5 ハ層 大木 4 式
- b区5k l層 大木4式
- a区5k l層 大木4式
 - 5 j層 大木4式 大木1または2式若干
 - 5 i 層 大木 4 式
 - 5fi層 大木4式
 - 5 e 層 大木 4 式
 - 5 c 層 大木 4 式
 - 5b層 大木5a式
 - 4 h 層 大木 5 a 式
 - 4 口層 大木 4 式, 5 a 式
 - 4 4層 大木 4 式, 5 a 式
- b区 4c層 大木4式, 5a式

- a区 4 c層 大木5 a式
- b区 3 c層 大木5 a式, 5 b式
- a区 3 c層 大木5 b式
 - 3 b層 大木 5 b式
 - 3 a層 大木5b式 6式 ほかに2式,5a式,7式,8式,9式,10式が若干出土。
 - 2層 大木6~10式 後期若干 陶器(1片)
 - 1層 大木8~10式

V. C-14年代測定

大木式土器は縄文時代前期及び中期の編年の基準となっており、大木各型式のC-14年代を 測定する必要がある。

そこで東北大学理学部の小元久仁夫先生の指導協力により、大木囲貝塚では昭和50年度から C-14年代測定を行ってきた。

本年度は幸い層位的に良好な地点を試掘により発見することができたので、小元先生自身に 貝層から貝殻を採取していただいた。また発掘の祭、各層の土を捨てずに収納しておいたので、 この土の中から炭を選び出し、測定にまわした。測定の結果は表の通りである。

この表をみるかぎり木炭のほうが貝よりも少し年代が新しく出ている。今回は木炭と貝では 年代がちがうことを前提とし、他の遺跡と比較する場合に木炭しか出ていない例や、逆に貝殻 の年代しか測っていない例と比較ができるようにした。なお浜田達二氏は「同一遺跡から採取 された木炭または土器炭素と鹹水貝の示す年代を比較してある。多くの場合、それらの一致は きわめて良い。」と述べておられるので参考にしていただきたい。

浜田達二 1970 (昭和45年) C-14年代測定における試料の問題 考古学と自然科学 3 pp. 1-10。

今回の測定の結果では必ずしも上層になるにしたがい新しい年代がでているわけではない。 木炭の試料では、TH-305bの測定値がやや古く出た。これは古い木が燃されたためであろうか。

貝の試料では、TH-263、TH265の測定値が占く出ている。特にTH-263は今回測定した中で最も古い。CS77地区が斜面になっているため古い貝が上から流されて来たためであろうか。

それらの理由はともかく、今回の結果から、1層の1試料を測定しただけでC-14年代を求めるべきでないことは明らかである。今後さらに、土器が層位的に良好に出土するところでできるだけ多くの層から数種の試料を採取し測定すること、1型式の土器しか出土しないところで数種の試料を測定すること、できれば土器そのもので年代を測定する必要がある。

なお、今のところ、ある土器形式のC-14年代を言う場合、幅をもって言ったほうが良いだろう。

表4 CS77地区C-14年代

層	序	土器型式	測定番号	試料	決定年代
14	b	大 木 3	TH-260	カキ, コシダカガンガラ クボガイ	4,910±120
14	a	大 木 3	TH-298	木 炭	4,710±130
12	b	大 木 3	TH-261	コシダカガンガラ, カキ	4,830±120
10	b	大 木 3 2 式若干	TH-300	木 炭	4,430±120
9	a	大 木 3	TH-262	カキ,クボガイ	4,750±120
bL	8 d	大木 3 , 4	TH-302c	木 炭	4,350±120
6	a	大 木 4	TH-263	アサリ, カキ	4,990±120
5	g	大 木 4	TH-264	アサリ, クボガイ	4,730±120
5	b	大木 5 a	TH-265	カキ,オキシジミガイ	4,880±120
4	h	大木 5 a	TH-305b	木 炭	4,440±120
bL	4 c	大木 4,5 a	TH-304b	木 炭	4,030±130

Ⅵ. 植 物

A. 花粉分析

大木囲貝塚では環境整備の一環として、縄文時代人の生活とかかわりの深い植物をうえる計画である。そこで昭和48、49年、東北大学理学部地理学教室の安田喜憲氏に花粉分析について御指導をいただいた。その後、北海道大学理学部地質学鉱物学教室の五十嵐八枝子先生の御協力をいただきCF42地区の花粉分析を行ったが、花粉は検出されなかった。

昭和52年度は東北大学理学部地理学教室の協力を得、大内 定氏がCF43、CS77、FF61地区 の土層断面から資料を採取し花粉分析を行ったが、花粉を検出することができなかった。やは り貝塚では花粉を検出するのは難しいようである。史跡の東北部にある旧水田地域であれば花粉を検出できるので、昭和53年度再度花粉分析を実施する予定である。

B. 種子

発掘で採取した土は室内でまず目につく遺物をとり出し、次に篩を使い水でこし小さな遺物をも集めた。しかし種子はあまり得ることができなかった。

図版XXXII-2はクルミ内皮破片。表面のしわは、それほど深くない。

史跡内に現生している一本のオニグルミ(種の同定は中条 幸先生)の木から得たクルミの核の表面をみると,写真(XXXII-3)のように表面のしわが深いものとわりあい浅くなめらかなものとがある。京都大学名誉教授北村四郎博士の御教授によれば,「以前『園芸大辞典』に書いた時にはトガリオニグルミ,カラフトグルミ,コシボソオニグルミ,ナガグルミ,マメグルミ,マルオニグルミ等に細分したけれども,これらのオニグルミの変種が地理的に分布に違いがあるというものではないし,変異間の系統がたどれるものでもないので,余り細分する必要はないだろう。しかし,ヒメグルミ(図版 XXXII-4)はオニグルミとは区別した方が良い。ヒメグルミはオニグルミと核の形を異にする。核の形は小く圧扁された球形で,亜心臓形を呈し,頂部尖鋭核の表面は滑沢で皺襞がない。ただ原生品と認むべきものが見当らない。ヒメグルミとオニグルミの雑種と認められるものがある。」とのことである。なお参考文献としては次のものがある。

石井勇義編 1950 (昭和25年) 園芸大辞典 第2巻 誠文堂新光社 東京

上原敬二 1971 (昭和46年) 樹木大図説 I 第4刷 有明書房 東京

出土したクルミの破片は、表面があまりでこぼこしておらず、ヒメグルミとオニグルミとの 中間くらいに見えるが、これはオニグルミの深い皺襞が、長い間に風化したためであろうか。

WI. 動 物

A. 節足動物

オオアカフジツボ Megabalanus volcano Pilsbry 図版 XXXII-48 CS77bL12で1点出土。 種の同定は東北大学理学部研究生 本田 裕。分布は太平洋側では相模湾以南,日本海側は 新潟県以南,九州まで。波の荒い岩礁の低潮線付近に群生。

カニ (図版 XXXII, XXXIII)

カニの鋏脚が出土。出土点数は下表の通り。()内の数はノコギリガザミの可動指の数。

表 5 CS77地区出土のカニ

層	位	カニの	鋏脚の点数
aL	8d上	8	(5)
aL	8d中	1	
aL	8d下	1	(1)
aI	.9a	1	(1)
bL	.9b'	4	(3)
I	J9=	1	
L	10b	11	(4)
bL1	3b下	1	
13	Зс	1	
1	4d	1	(1)

図版 XXXII - 5 ノコギリガザミの可動指

種の査定は国立科学博物館の武田正倫博士。鋏の基部に $7 \sim 8 \text{ mm}$ 大の疣状のものがあり,鋏の中央部には4 mm大の疣状のものがある。この基部の大きな疣と中央部の疣との間には $2 \sim 3 \text{ mm}$ 大の小さな疣が3 つある。鋏の長さは4 lmm,鋏を上からみると強く曲っている。疣は尖っておらず鈍頭である。

図版 XXXII - 6 ノコギリガザミの不動指

種の査定は国立科学博物館の武田正倫博士。臼歯状の白い疣が並ぶ。鋏の現存する長さ25mm,幅10mm,臼歯の大きさ奥のものから 6.5×4 mm, 6.4×5.6 mm, 3.8×2.4 mm, 4.2×4.6 mm,

$2.4 \times 1.8 \text{mm}_{\circ}$

ノコギリガザミはインド洋,太平洋に分布する。日本では現在相模湾より南に生息し、浜名湖にはすみついているらしい。奄美諸島、沖縄では、湾や河口に上げ潮のとき入ってきたものをとり、食用とする。台湾やインドシナではよく食べる。湾奥、河口の泥濘地帯に生息し、川にもかなり上る。大きなカニで肉量豊富。周年を通じ食用とされる。日中は穴(長さは1mくらい)にひそみ夜行動する。つかまえるには潮が引いた時穴を掘ってつかまえるか、夜網にエサをつけ、カニが入った時網を引き上げてつかまえる。化石では利根川河口から出土しているのが北限であり、大木囲貝塚でノコギリガザミが確認されたことによって北限はさらに北に上ばりそうである。なお武田博士の御協示によれば、甲が出土すればさらに詳しく知ることができるので破片でもよいからとっておいてほしいとのことである。発掘の時に十分注意する必要がある。

さて、現生のノコギリガザミでは、可動指の基部にみられる大疣は必ずしも非常に大きいわけではない。個体によっては、右或は左の可動指の大疣があまり大きくない例もある。しかも

老成すると、この大疣はすっかりすりへって、他の小さい疣はなくなってしまう。ガザミ、タイワンガザミの可動指の基部にも大疣がみられるが、ノコギリガザミほどは発達しない。また基部の大疣の次にノコギリガザミでは小疣があり、次に中位の大きさの疣があるが、ガザミでは大疣の次に小疣が2つ(この2つの小疣のうち基部に近い疣の方がやや大きい)あり、次に中位の大きさの疣がある。タイワンガザミの可動指では、基部の大疣の次に中位の大きさの疣があり、次に小疣があり、次にまた中位の大きさの疣がある。

ノコギリガザミの可動指の全体の形は、ガザミ、タイワンガザミにくらべ基部が太く、湾曲 が著しい。但し湾曲が余り著しくないものもわずかであるが見られる。

なお、ノコギリガザミの標本については、沖縄県水産試験場の伊野波盛仁氏に御協力をいた だいた。 (八巻正文)

B. ウニ 図版 XXXVII

ウニの殻や棘が少数出土している。出土層位は5e, 6a, 6b, 8a, aL8b上, bL8d, aL10b, 14c。 ムラサキウニ

種の査定は国立科学博物館の武田正倫博士。

図版 XXXVII-49左の棘は長さ31mm,太さ2mm。棘には縦に細い線が沢山入っているが,平滑である。色は全体が極暗赤褐色である。aL10b出土。

図版 XXXVII - 49右の殻には無孔部及び有孔部が見られ,無孔部には大疣がある。L14e出土。 バフンウニ 図版 XXXVII - 51

種の査定は国立科学博物館の武田正倫博士。バフンウニはムラサキウニに比べ味がずっと良いが、小さい。出土したウニのうちムラサキウニは2片のみで、他はすべてバフンウニの殻であった。 (八巻正文)

C. 貝 図版 XXXIV ~ XXXVII

鑑定は東北大学理学部研究生の本田 裕氏にお願いした。なお貝の分布,深度,底質についても調べていただいた。分布,深度,底質については次の文献を参考としている。

肥後俊一編 1973(昭和48年) 日本列島周辺海産貝類目録 395pp. 長崎県生物学会 西村三郎・鈴木克美 1971(昭和46年)標準原色図鑑全集16 海岸動物 196pp. 64pls. 保育社 黒田徳米 1963(昭和38年) 日本非海産貝類目録 71pp. 日本貝類学会

出土した貝の学名、和名、その他の分布、深度、底質は次の通り。ただし貝の分類は先ず私が行い、分類した各種の貝の標本を本田氏のもとに持ち込んだので、或いはもっと貝の種類はふえるかもしれない。例えば、私が同じ種と思って本田氏に見ていただいたところ、別種だったものに、ウミニナとホソウミニナ、イチョウシラトリとヒメシラトリガイがある。したがってできれば、発掘した貝をすべて貝の鑑定のできる専門家に分類整理していただくのが良いで

あろう。

Nordotis discus (Reeve) クロアワビ 北海道 (南部),東北,本州,四国,九州,朝鮮 (南部)。潮間帯~20m。岩礁。

Collisella dorsuosa (Gould) カモガイ 北海道 (南部),本州,四国,九州,奄美,沖縄,台湾,朝鮮。潮間帯,高潮帯。岩礁。

 Cellana grata (G_{OULD})
 ベッコウザラ (別名
 ベッコウガサガイ)
 北海道 (南部),東

 北,本州,四国,九州,台湾。潮間帯。岩礁。

Acmaea (Niveotectura) pallida (Gould) ユキノカサガイ 本州東北以北,北朝鮮。潮間帯。岩礁。

Monodonta (Monodonta) labio (Linné) イシダタミガイ 北海道 (南部以南),本州,四国,九州,朝鮮,潮間帯。岩礫底。。

Omphalius rusticus (G_{MELIN}) コシダカガンガラ サハリン,北海道,本州,四国,九州,台湾,朝鮮,中国。潮間帯~20m。岩礫。

Chlorostoma argyrostoma lischkei (Tapparone—Canefri) クボガイ 北海道(南西部以南),本州,四国,九州,朝鮮。潮間帯~20m。岩礫。

Umbonium (*Suchium*) *costatum* (K_{IENER}) キサゴ サハリン,北海道,本州,四国,九州,朝鮮,中国,台湾。潮間帯~20m。砂底。

Lunella coronata coreensis (Récluz) スガイ 北海道,本州,四国,九州,朝鮮。潮間帯。岩礁礫。

Littorina brevicula(P_{HILIPPI}) タマキビガイ サハリン,シベリア,北海道,本州,四国,九州,朝鮮,中国。潮間帯。岩礁。

Serpulorbis (Cladopoma) imbricatus (D_{UNKER}) オオヘビガイ 北海道 (南部),本州, 四国,九州,奄美,沖縄,台湾,朝鮮,中国。潮間帯~10m。岩礁礫に付着。

Batillaria multiformis (L_{ISCHKE}) ウミニナ 本州,四国,九州,奄美。潮間帯下部。 泥底。

Batillaria cumingii (C_{ROSSE}) ホソウミニナ 沿海州,北海道,朝鮮,本州,四国,九州。潮間帯。砂底。

Clypeomorus humilis (D_{UNKER}) カヤノミカニモリガイ 本州 (房総以南),四国,九州, 奄美,沖縄,台湾。潮間帯~20m。岩礫。

Neverita (Glaussaulax) didyma (Röding) ツメタガイ 北海道 (南部),本州,四国, 九州,朝鮮,中国,東南アジア。潮間帯~50m。細砂底。

Phalium (Bezoardicella) Strigatum (Gmelin) カズラガイ 本州 (房総以南),四国,九

州,朝鮮,台湾。10~50m。砂底。

Reishia clauigera (Küster) イボニシ 北海道 (南部),本州,四国,九州,奄美,沖縄,朝鮮,台湾,中国沿岸。潮間帯~20m。岩礁。

Reishia bronni (Dunker) レイシガイ 北海道 (南部),本州,四国,九州,朝鮮,中国 北部,台湾。潮間帯~20m。岩礁。

Rapana venosa (Valenciennes) アカニシ 北海道 (南部),本州,四国,九州,朝鮮,中国北部。潮間帯~20m。砂泥底。

Barbatia (Savignyarca) virescens (Reeve) カリガネエガイ 北海道 (南部),本州,四国,九州,西太平洋。潮間帯~20m。岩礁。

Anadara (Scapharca) subcrenata (Lischke) サルボウガイ 北海道 (南部),本州,四国,九州,朝鮮,台湾,中国沿岸。潮間帯~10m。砂泥底。

Tegillarca granosa (Linné) ハイガイ (凾館),三河湾,伊勢湾,瀬戸内海,浦戸湾,有明海など,インド,西太平洋。潮間帯~10m。泥底。

Glycymeris (Glycymeris) yessoensis (Sowerby) エゾタマキガイ サハリン,北海道,東北,本州 (駿河湾)。5~30m。細砂底。

Mytilus corscus Gould イガイ 北海道(南部),本州,四国,九州。潮間帯~20m。 岩礁。

Solamen spectabilis (A. Adams) キサガイモドキ 本州 (岩手県),四国,九州。30~300m。細砂底。

Chlamys (Azumapecten) farreri nipponensis Kuroda アカザラガイ 千島,北海道,本州,四国,九州,朝鮮,北中国。潮間帯~60m。岩礫。

Mizuhopecten yessoensis (Jav) ホタテガイ サハリン,沿海州,千島,北海道,東北,日本海,北朝鮮。10~50m。砂,小石底。

Qstrea denselamellosa Lischke イタボガキ 本州 (房総以南),四国,九州,東シナ海, 内海,内湾,潮間帯~20m。岩礫。

Crassostrea gigas (Thunberg) マガキ サハリン,北海道,本州,四国,九州,朝鮮,中国沿岸〜東南アジア。塩分,深度の小さい内湾,潮間帯。岩礁。

Cardita leana Dunker トマヤガイ 本州 (陸奥湾以南),四国,九州,奄美,沖縄,台湾,朝鮮。潮間帯~20m。岩礫底に付着。

Trapedium (Neotrapedium) Sublaevigatum (Lamarck) タガソデガイモドキ 本州 (紀伊以南),四国,九州,奄美,沖縄,インド,西太平洋。潮間帯。岩礁。

Meretrix lusoria (Röding) ハマグリ 北海道 (南西部),本州,四国,九州,台湾,朝

鮮,中国,比国,東南アジア。内海の潮間帯~20m。砂泥底。

Meretrix lamarckii Deshayes チョウセンハマグリ 本州 (房総以南),四国,九州,沖′縄,台湾,朝鮮,中国。潮間帯~20m。砂底。

Cyclina sinensis (GMELIN) オキシジミガイ 本州,四国,九州,朝鮮,中国,台湾,東南アジア。潮間帯~20m。泥底。

Phacosoma japonicum (Reeve)カガミガイ北海道 (南西部),本州,四国,九州,朝鮮,中国。潮間帯~50m。細砂底。

Ruditapes philippinarum (Adams and Reeve) アサリ 北海道,本州,四国,九州,朝鮮,中国,台湾。内海,内湾,潮間帯~20m。砂泥底。

Mactra (Mactra) veneriformis Reeve シオフキガイ 本州 (房総半島以南),四国, 九州, 奄美, 沖縄。内湾, 潮間帯。砂泥底。

Hiatula diphos (Linké) ムラサキガイ 本州 (房総以南),四国,九州,奄美,沖縄,台湾。潮間帯~20m。泥底。

Macoma (Macoma) incongrua (V. Martens) ヒメシラトリガイ 千島,北海道,本州,四国,九州,朝鮮,中国。潮間帯~50m。細砂泥底。

Merisca (Pistris) caspisoides (Lamarck) イチョウシラトリガイ 本州 (房総以南), 四国,九州,朝鮮,熱帯太平洋。潮間帯~30m。砂泥底。

Salen (Solen) strictus Gould マテガイ 北海道 (南西部),本州,四国,九州,朝鮮, 北中国。内湾,内湾奥。潮間帯。細砂泥底。

Mya (Arenomya) arenaria oonogai Makiyama オオノガイ 北海道,本州,四国,九州,朝鮮,中国。内海,潮間帯。砂泥底。

Corbicula japonica Prime ヤマトシジミガイ 全国の河口、潟湖。

Aegista~sp. マイマイ 本属は北海道を除き全国に知られるが地域毎に種に分化しているので、種レベルの同定は無理である。陸産貝。

以上,本田氏に鑑定していただいた貝の他に,整理中に記録されている貝としてマツバガイ, ヘナタリ,ウバガイ,ヒダリマキマイマイがある。これらの貝は,鑑定のため標本を選び出す段になって,見つけだすことができなかったものである。今後は分類整理中に鑑定にまわす貝はとり出しておくようにしたい。貝の種類は上述の如く非常に豊富で、48種に及ぶ。

出土した貝の水平分布をみると、亜熱帯区に含まれるものがある。

紀伊半島以南に分布する貝 タガソデガイモドキ

房総半島以南に分布する貝 カヤノミカニミリ,カズラガイ,ハイガイ,イタボガキ,チョウセンハマグリ,シオフキガイ,ムラサキガイ,イチョウシラトリガイ

しかし、シオフキガイが 5 gh層で14%出土しているのを除けば、いずれも出土数は少く各層出土の貝の総数の 5 %に満たない。なお、イモガイやタカラガイ類など熱帯海域に分布の中心があるような種群の出土は見られない。亜熱帯区にすむ貝は 5 、6 層でやや多くなる。表は、各層出土の亜熱帯区の貝の数の合計をその層の総計で割ったパーセントで示してある。

垂直分布をみると、漸深帯(最低潮線以下~陸棚)の貝はカズラガイ及びエゾタマキガイで、 いずれも1点出土したにすぎない。他の貝はすべて潮間帯にみられる貝である。

ほとんどの貝が内湾に生息するが、チョウセンハマグリは外洋の浅海の砂底にすむ。ヤマトシジミガイは河口や潟などの汽水域にすむ。陸貝としてはマイマイ、ヒダリマキマイマイが出土している。

出土した貝を底質によって区分すると次のようである。

岩礁地帯にすむ貝 クロアワビ、カモガイ、ベッコウザラ、ユキノカサガイ、イシダタミガイ、コシダカガンガラ、クボガイ、スガイ、タマキビガイ、オオヘビガイ、イボニシ、レイシ、カリガネエガイ、イガイ、アカザラガイ、

イタボガキ,マガキ,トマヤガイ,タガソデモドキ

岩礫地帯にすむ貝 カヤノミカニモリガイ,

砂礫地帯にすむ貝 ホタテガイ

砂泥地帯にすむ貝 キサゴ, ウミニナ, ホソウミニナ, ツメタガイ, カズラガイ, アカニシ, サルボウガイ, ハイガイ, エゾタマキガイ, キサガイモドキ, ハマグリ, チョウセンハマグリ, オキシジミガイ, アサリ, カガミガイ, シオフキガイ, ムラサキガイ, ヒメシラトリガイ, イチョウシラトリガイ, マテガイ, オオノガイ,

各層の貝の出土数は表で示した。二枚貝は左右に分け、そのうち多い方の数で示した。マテガイはこわれやすく、左右さらに前後に分け、そのうち最も多い数で示してある。破片の場合には、殻頂のあるもので同定のできるもののみ数えた。 (八巻正文)

表 6 暖かい地方の貝の出土数

層序	亜熱帯地区 の 貝 の 数	総 数	%	層 序	亜熱帯地方 の 貝 の 数	総数	%
1				b L 8 d	9	1,534	1
2				a L 9 a	8	1,374	1
4 a b		749		b L 9 a	5	394	1
4 🏻		2		9 b		230	
4 h	2	84	2	a L 9 b'	4	583	1
5 b	1	101	1	b L 9 b'	8	848	1
5 с	2	57	4	9 =	1	165	1
5 d	+	44		9 d 11	4	120	3
5 e	28	835	3	10 a	4	635	1
5 f i	18	588	3	10 b	11	2,850	
5 g h	17	107	16	10ホ	6	1,346	
5 ј	12	1,041	1	11上		333	
a L 5 k 1	1	337		11下	2	438	
b L 5 k 1	1	31	3	a L 13 b	4	898	
6 a	31	3, 397	1	b L 13 b 上		261	
6 b	6	373	2	b L 13b下	58	3, 320	2
7	1	230		13 c	2	626	
8 a	16	1, 791	1	14 a	7	1, 196	1
8 b		24		14 b	2	397	1
a L 8 d上	29	3, 623	1	14 c	57	6, 917	1
a L 8 d 中	21	2, 103	1	14 d	14	2, 350	1
a L 8.d下	8	822	1				

表 7 CS77地区出土の貝の数

			10	7 CS	//地区口	上い月	/ / 女人					
		L 1	L 2	L4ab	L 4 p	L4h	L 5 b	L 5 c	L 5 d	L5e	L 5 f	i
1	クロアワビ											
2	カモガイ											
3	ベッコウザラ											
4	ユキノカサガイ											
5	マツバガイ											
6	イシダタミガイ		17 +	3		3	1		2	14 +	5 -	+
7	コシダカガンガラ			62 8			5	3	1	38 5	11	+
8	クボガイ			43 6		1	1	2	3	51 6	10	+
9	キサゴ											
10	スガイ			624 83		50	78	16	26	433 52	276	47
11	タマキビガイ										***************************************	
12	オオヘビガイ											
13	ウミニナ									2 +		
14	ホソウミニナ											
	ヘナタリ									-		
										-		
-	カヤノミカニモリガイ								-	11 1	1.0	
-	ツメタガイ							1	1	11 +	17	+
	カズラガイ					-						
19	イボニシ		1			4				35 +	13	+
20	レイシガイ									12 +	4	+
21	アカニシ					+					+	
22	カリガネエガイ					11	2	3	2	33 +	12	+
23	サルボウガイ							1		1 +		
24	ハイガイ					1	1	2	+	10 +	4	+
25												
26	イガイ					+	1	12		1 +	3	+
27	キサガイモドキ	ļ <u>.</u>										
-												
	アカザラガイ											
-	ホタテガイ										-	
30	イタボガキ									1 +		
31	マガキ	+			2	2	6	4	3	6 +	7	+
32	トマヤガイ											
33	タガソデガイモドキ									1 +		
34	ハマグリ					6	5	4	1	33 +	125	21
35	チョウセンハマグリ										1	+
36	オキシジミガイ					2	1	4	3	113 +	38	6
37	カガミガイ								1			
	アサリ			1 +		3		5	1	19 +	46	8
-	シオフキ			<u> </u>		1				16 +		
40			-			-				1.0 '	10	•
	ムラサキガイ		-			-		-	-			
41		-					-					
42				-				-				
43							-					
44	マテガイ										<u> </u>	
45	オオノガイ									5 +	3	+
46	ヤマトシジミガイ			1 +								
47	マイマイ											
48	ヒダリマキマイマイ											
	2+		1	749 100	2	84	101	57	44	835 100	588 1	100
-			ıli.	点 %	λί	ik	#.i.	ik	J.la	点 %	j.t.	
		•			***************************************	•			•	•		

		L5gh	L5j	a L 5 k l	bL5kl	L 6 a	L6b	L 7	L 8 a
1	クロアワビ								
2	カモガイ								
3	ベッコウザラ								
4	ユキノカサガイ								
5	マツバガイ								
6	イシダタミガイ	1	23 +	1 +		30 +	7 +	4	4 +
7	コシダカガンガラ	2	9 +	25 7	3	176 5	14 +	27	28 +
8	クボガイ	2	13 +	11 +	1	38 +	3 +	6	4 +
9	キサゴ				-	00 1	1 +		* '
10	スガイ	49	292 28	217 65	6	1,642 48	171 46	154	1, 349 75
11	タマキビガイ	40	1 +	217 03	0	1,042 48	171 40	134	1, 349 73
12	オオヘビガイ	**************************************	1 T			1 T			
	ウミニナ		7 1	0 1	ļ	0 1	0 1	1	1 1
.13			7 +	2 +		9 +	2 +	1	1 +
14	ホソウミニナ			1 +	-				
15	ヘナタリ					1 +			
-	カヤノミカニモリガイ		1 +			1 +			
17	ツメタガイ		6 +		2	31 +	3 +		3 +
18	カズラガイ								
19	イボニシ	9	64 6	28 8		27 +	17 5		5 +
20	レイシガイ						1 +		
21	アカニシ				2			+	3 +
22	ガリガネエガイ		159 15			36 +	17 5	1	5 +
23	サルボウガイ		1 +			1 +		1	
24	ハイガイ	2	4 +		1	2 +	1 +	1	1 +
25	エゾタマキガイ								
26	イガイ	+	6 +			39 +			+
27	キサガイモドキ					1 +			
28	アカザラガイ								
29	ホタテガイ								
30	イタボガキ		1 +			1 +			
31	マガキ		25 +	9 +	1	69 +	10 +	4	4 +
32	トマヤガイ								
33	タガソデガイモドキ								
34	ハマグリ	8	284 27	3 +	10	22 +	55 15	16	278 16
35	チョウセンハマグリ		1 +			22 +	4 +	***************************************	3 +
36	オキシジミガイ	18	41 +	9 +	1	141 +	22 6	2	19 +
37	カガミガイ								
38	アサリ	1	94 9	27 8	4	1,004 +	44 12	13	70 +
39	シオフキガイ	15	5 +	1 +		5 +	1 +		12 +
40	ウバガイ								
41	ムラサキガイ								
	ヒメシラトリガイ								
-	イチョウシラトリガイ								
-	マテガイ		3 +	1 +		96 +			1 +
-	オオノガイ		1 +	2 +		2 +	+		
	ヤマトシジミガイ					3 '	'		1 +
	マイマイ								1 +
-	ヒダリマキマイ								1 7
40	計	107	1 641 100	227 100	21	2 207 100	979 100	920	1 701 100
	ā I	点	点 %	337 100	31	点 %	373 100 点 %	点	1,791 100

		L 8 b	a L 8 d上	a L 8 d ⊨	a L 8 d下	b L 8 d	a L 9 a	b L 9 a	L 9 b
1	クロアワビ		4 2 4 4 22						
-	カモガイ								
	ベッコウザラ					1 +			
-						1 1	i		
_	ユキノカサガイ								
-	マツバガイ		OF I	42	18 +	13 +	29 +		8
	イシダタミガイ		85 +	43 +			-	13 +	1
\vdash	コシダカガンガラ	2	161 +	70 +	15 + 35 +	52 +	16 + 76 6	6 +	9
	クボガイ		193 5	126 6	35 +	188 12	70 0	- 0 T	3
	キサゴ		0.107.00	1 410 00	COT 7.4	1 114 70	1 000 70	202 77	172
	スガイ	19	2, 487 69	1,419 68	607 74	1,114 73	1,068 78	302 77	174
\vdash	タマキビガイ			1 +		4 +		-	
-	オオヘビガイ				1 +			1 1	
-	ウミニナ		4 +	2 +	3 +			1 +	
14	ホソウミニナ								
-	ヘナタリ	Anne							
16	カヤノミカニモリガイ		1 +	1 +					
17	ツメタガイ		4 +	2 +	2 +	3 +	1 +	2 +	
18	カズラガイ								
19	イボニシ		125 +	42 +	5 +	14 +	31 +	3 +	2
20	レイシガイ	-140-140-200-200-200-200-200-200-200-200-200-2	7 +	3 +			4 +		
21	アカニシ		1 +	2 +		1 +			
22	カリガネエガイ		93 +	95 5	53 6	21 +	51 +	11 +	19
23	サルボウガイ		1 +	+					
24	ハイガイ		24 +	16 +	4 +	8 +	2 +	5 +	
25	エゾタマキガイ			1 +					
26	イガイ		17 +	8 +	2 +	1 +	6 +	2 +	
27	キサガイモドキ								
28	アカザラガイ								
29	ホタテガイ								
30	イタボガキ								
31	マガキ		65 +	30 +	17 +	47 +	11 +	8 +	2
32	トマヤガイ		-	1 +					1
33	タガソデガイモドキ								
34	ハマグリ	1	130 +	61 +	8 +	36 +	6 +	15 +	1
35			1 +		3 +				
36			119 +	74 +	30 +	19. +	37 +	19 5	10
37			1 +	1 +					
38		2	27 +	6 +	2 +	6 +	5 +	3 +	
39			3 +	2 +	1 +	1 +	6 +		
-	ウバガイ		0 1		1 +	1 1.			
40				1 +	1 1	-			
41	ムラサキガイ			1 1		-	-		
42			-	1 +		-			
43			32 +		1.4 -	1	15 +	1 +	3
44				22 +	14 +		13 5	1	J
45			3 +	2 +	1 .	+	10	2 1	2
46			38 +	70 +	1 +	4 +	10 +	3 +	
47							-	-	
48				1 +			4.00:	001.105	000
	計	24	3, 623 100	2, 103 100	822 100	1,534 100	1, 374 100	394 100	230
		点	点 %	点 %	点 %	点 %	点 %	点 %	点

		a L 9 b'	b L 9 b'	L 9 =	L 9 d 11	L10 a	L10b	L10本	L11上
1	クロアワビ			_ •					
	カモガイ								
	ベッコウガラ						1 +		
-							± 1		
	ユキノカサガイ								
5	マツバガイ	10	4.C E	4		14 +	52 +	29 +	10 +
6	イシダタミガイ	10 +	46 5	4					
7	コシダカガンガラ	12 +	22 +	2		6 +	75 +	42 +	13 +
8	クボガイ	26 +	57 7	6	3	14 +	246 9	91 7	27 8
9	キサゴ				5		2 22 22		001 00
-	スガイ	394 68	625 74	129	50	402 63	2, 235 78	1,038 77	221 66
11	タマキビガイ						1 +	1 +	
12	オオヘビガイ								
13	ウミニナ						1 +		
14	ホソウミニナ								
15	ヘナタリ								
16	カヤノミカニモリガイ						1 +		
17	ツメタガイ		3 +	1			7 +	2 +	2 +
18	カズラガイ								
19	イボニシ	10 +	4 +	2		28 +	15 +	10 +	5 +
20	レイシガイ	2 +	2 +			4			
21	アカニシ		1 +	1			4 +		
22	カリガネエガイ	82 14	13 +	6		88 41	51 +	42 +	18 5
23	サルボウガイ								
24	ハイガイ	2 +	1 +	1	1		2 +	1 +	
25	エゾタマキガイ								
26	イガイ	1 +	4 +	1		6 +	31 +	21 +	
27	キサガイモドキ								
28	アカザラガイ								
29	ホタテガイ								
30	イタボガキ								
31	マガイ	2 +	10 +	3	2	4 +	15 +	3 +	8 +
32	トマヤガイ								
33	タガソデガイモドキ								
34	ハマグリ	3 +	29 +	3	5	3 +	51 2	22 +	17 5
-	チョウセンハマグリ	<u> </u>	6 +		+	1 +	6 +	1 +	
36	オキシジミガイ	17 +	17 +	4	53	24 +	21 +	13 +	3 +
37	カガミガイ	11	., .	*		2 +	'		
	アサリ	4 +	2 +	1	1	3 +	9 +	10 +	
-				1	2	3 +	2 +	4 +	
39		1 +	1 +		-	3 1	2 1	- T	
-	ウバガイ								
41			-	1					
42					 		-		
43		1 +		-	1	24 =	15	0 1	A 1
44		12 +	2 +	1		34 5	15 +	9 +	4 +
45						1 +	2 +	4 +	1 +
46		4 +	3 +		2	2 +	7 +	1 +	4 +
47	マイマイ								
48	ヒダリマキマイマイ							+	
	計	583 100	848 100	165	120	635	2,850 100	1, 346 100	333 100
		点 %	点 %	点	点	点	点 %	点 %	点 %

		L11	F	a L13	b	bL13b上	b L13	b下	L13	С	L14	a	L14	b	L14	С	L14	d
1	クロアワビ																	
2	カモガイ														1	+		
3	ベッコウザラ										1	+			5	+		
4	ユキノカサガイ														1	+		
5	マツバガイ									-					1	+		
6	イシダタミガイ	15	+	18	+	5	41	+	15	+	9	+	+		54	+	16	+
7	コシダカガンガラ	9	+	26	+	4	72	+	25	+	32	+		+	318	5	131	6
8	クボガイ	21	5	20	+	13	194	6	39	6	95	8	20	5	676	10	140	6
9	キサゴ																	
10	スガイ	275	63	667	74	164	2, 236	67	496	79	720	60	129	32	4, 778	69	1,766	75
11	タマキビガイ						1	+									.,	
12	オオヘビガイ																	
13	ウミニナ			1	+		1	+	1	+							4	+
14	ホソウミニナ				•					<u> </u>							-	
15	ヘナタリ																	
16	カヤノミカニモリガイ														1	+		
17	ツメタガイ	2	+	4	+	1	19	_	1	+	9	+			11	+	5	+
18	カズラガイ		-	4		1	13	'	1						- 11		J	
19	イボニシ	19		4	+	6	96	+	4	+	44		211	E 2	178	+	45	+
\vdash	レイシガイ	19	+		+	0	1	+	4		8	++	211	55	+	+	43	
21		1	_	1	+		1				0	т			11		2	+
	アカニシ		+			1.0		+	10		100	1.0			+	+		
22	ガリガネエガイ	47	11	37	+	18	440	13	13	+	190	10	· · · ·	+	391	6	84	+
23	サルボウガイ	,							1	+					4	+	+	
24	ハイガイ	1	+	2	+		8	+	1	+	4	+	1	+	26	+	3	+
25	エゾタマキガイ					10	_						-		10			
26	イガイ	3	+	19	+	18	5	+	2	+	+		2	+	19	+	7	+
-	キサガイモドキ															_		
28																	1	+
29	ホタテガイ																	
30	イタボガキ																	
31	マガキ	8	+	31	+	3	33	+	1	+	24	+	7	+	38	+	5	+
32	トマヤガイ																	
33	タガソデガイモドキ																	
34	ハマグリ	8	+	17	+	9	33	+	6	+	25	+	6	+	128	+	36	+
\vdash	チョウセンハマグリ	1	+	1	+		48	+			3	+	1	+	26	+	8	+
-	オキシジミガイ	18	+	28	+	2	42	+	6	+	9	+	4	+	166	+	72	+
37	カガミガイ														1	+		
38	アサリ	6	+		+	7		+		+	19	+			35	+		
39	シオフキガイ			-	+		2	+	1	+					4	+		+
40	ウバガイ			1	+												3	+
41	ムラサキガイ																	
42	ヒメシラトリガイ																	
43	イチョウシラトリガイ																	
44	マテガイ	3	+	5	+	8	7	+	3	+	7	+	2	+	33	+	7	+
45	オオノガイ			2	+	1	4	+	2	+	4	+	2		4	+	1	+
46	ヤマトシジミガイ	1	+	3	+		5	+	1	+					5	+	5	+
47	マイマイ																	
48	ヒダリマキマイマイ					2												
	計	483	100	898	100	261	3, 320	100	626	100	1, 196	100	397	100	6, 917	100	2, 350	100
		点	%	点	%	点	点	%	点	%	点	%	点	%	点	%	点	%

D. 魚 (図版XXXVIII, XXXIX)

発掘では土を捨てずに採取し、篩を通し小さな魚骨もたくさん得ているけれども、篩を通した小さな遺物を選別するにはかなりの労力を必要とするため、小さな魚骨については、篩を通す段階まで終えるだけで精一杯で、種の査定は行っていない。比較的大きな魚骨の方は保存が悪く、種の査定及び個体数をかぞえるのに良い資料ではなかった。

出土した魚は次の通りであるが、種のわからない魚骨も図版には載せた。

サバ類 (図版XXXVIII-2,3)

尾部脊椎骨(図版XXXVIII-2)は、メバチ、クロマグロの標本と照合の結果どちらともよく似ていた。尾部扇状骨(図版XXXVIII-3)は大きさからいってカツオの標本と照合してみたが、形がちがっており、 $K_{ISHINOUYE}$ $K_{AMAKICHI}$ 1923のPL. XXIV-41 Cybium niphoniumの尾部扇状骨に最もよく似ていた。

スズキ類似(図版XXXVIII-4,5)

標本と照合した結果である。

コショウダイ類似 (図版XXXVIII-6a, 6b)

コショウダイ類は南日本の魚で、沖縄では10種類もいる(白井祥平、佐野芳康 1977)。これらのコショウダイ類のうち、クロコショウダイ、コロダイ、ムスジコショウダイの標本と比較することができた。コショウダイ類の標本は、琉球大学の吉野哲夫先生、及び沖縄県水産試験場の伊野波盛仁氏に御協力いただいた。図版XXXVIII-66の前上顎骨柄状突起の前縁と前上顎骨下縁の角度は約108°である。コロダイでは約100°、クロコショウダイでは約114°、ムスジコショウダイでは105°である。コショウダイの現生標本と比較することはできなかったが、出土した骨は非常に大きく、図版XXXVIII-6bの柄状突起の長さは42mmもあり、コショウダイ類のうち、大きさから言ってコショウダイに最も似ている。

クロダイ(図版**XXXVIII** - 7 ~10)

クロダイ属・ヘダイ属では,前上顎骨が後方へ著しく強大となり,その後縁がほぼ垂直で,しかも下方にある小突起が顕著であり(赤崎正人 1962 p.27),犬歯は上下顎ともに3対で,その基部断面はだ円形を呈し(赤崎正人 1962 pp.9-10),3列以上のよく発達した臼歯がある(赤崎正人 1962 p.12)。ヘダイの両顎後方には3本のだ円形のきわめて大きい臼歯があり(赤崎正人 1962 pp.9-10),前上顎骨の柄状突起と前上顎骨下縁のなす角はクロダイ属では75°内外(赤崎正人 1962 p.27),ヘダイは80°くらいである(赤崎正人 1962 p.25)。

マダイ 図版XXXVIII-11~14

マダイについては宮崎大学の赤崎正人博士に御教示いただいた。出土したマダイの骨は現生の日本産のマダイ Pagrus major Teminck & Schlegel の骨格と比較していくつかの点に差

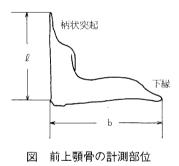
異がみられ、ゴウシュウマダイ Pagrus auratus (Schneider) に似ている点があったり、タイワンダイ Argyrops bleekeri Oshima に似ている点があったりする。しかしこれらの骨格が 1個体のものではないので、1匹の魚がゴウシュウマダイとタイワンダイの特徴を両方持っていたのか、或は、ゴウシュウマダイの特徴を持った魚とタイワンダイの特徴を持った魚とは別であったのか不明である。したがって、発掘中骨格のかなりそろったものが出土した時はバラバラにならないようにしてとりあげておかねばならない。また鑑定には歯が重要なので、洗う時に歯を落さないように注意せねばならない。

出土したマダイの各骨格について現生の日本産のマダイと比較すると次のような差異がみられる。

Premaxilla (前上顎骨) 図版XXXVIII-11

前上顎骨柄状突起の前縁と前上顎骨下縁の相対的な長さからすれば、現生の日本産のマダイでは両者の長さがほぼ等しい(赤崎正人 1962 p.25)。ところが大木囲貝塚出土のマダイの場合、柄状突起の長さが前上顎骨下縁の長さより短い。ただし、出土した前上顎骨は破損しているものが多く、両者の長さをはかることのできたものは以下の6点にすぎない。

	層序	柄状突起前縁の長さℓ	前上顎骨下縁の長さb
1.	C S 77 L 5 e	4 6.1 mm	56.9mm
2.	L 5 е	22.7	2 8 . 1
3.	L5fi ·	3 6.0	4 6 . 2
4.	L 5 j	3 5 . 4	4 4 . 9
5.	a L 10 b	3 1 . 5	3 9 . 6
6.	L13b下	3 9 . 6	47.1
7.	現生キダイ	1 6. 5 5	2 5 . 4



魚市場,魚屋等から手に入れた現生マダイについても測定を行ったが,日本のマダイのみならず世界各地のマダイが売られているせいであろう両者の長さは様々で,4例のうち柄状突起前縁の長さの方が長いもの1点,前上顎骨下縁の長さがわずかに長いが両者の長さがほぼ等しいもの2点,前上顎骨下縁の長さの方が長いもの1点であった。

前上顎骨の後縁下方に、斜後下方に向う小突起が大木囲貝塚出土のマダイにはみられるが、 この突起は現生のマダイ、キダイ、タイワンダイなどではあまり明らかでない(赤崎正人 19 62 pp. 25~26)。

Vertebrae. Tail 図版XXXVIII-12, 13

オーストラリア産のマダイ $Pagrus\ auratus$ (Schneider) には必ず瘤がみられる(赤崎正人 1962 p.164)。日本産のマダイにもあるが,まれである。大木囲貝塚出土のマダイについてはこの瘤がすべてにみられるのか,あるいはどのくらいの割合でみられるのか確かめていな

いが、かなり目につく。とにかく、この瘤があれば Pagrus に属することは確かである。

なお、大木囲貝塚出土のマダイの骨格と日本産のマダイの骨格をくらべると、さらにいくつかの差異が見い出されるけれども、今回の資料は個々だらばらのもので1個体のものでないので、以上の説明にとどめておく。

赤崎正人 1962 pp.73-76によれば、マダイ亜科の魚がインド洋を通り一部は日本へ、他方はオーストラリア、ニュージーランドへ向かって、大昔分散したと考えられる。大木囲貝塚出土のマダイの骨格が台湾やオーストラリアのマダイに例でいることは、マダイ亜科の魚の分散、移動、進化を考える上で興味ある資料である。タイ科魚類は温・熱帯性沿岸魚で、低温への抵抗性が弱く、その上、生息深度が赤色のタイ類では100m前後までであるが、いつころどのような環境の変化により今日の日本産のマダイへと変異したのであろうか。

カサゴ類(図版XXXVIII-16~19)

図版XXXVIII-17, 18は,キツネメバルの標本と比較すると上部の溝がやや小さい。Matsubara Kiyomatsu 1943 の図の中では,32ページのFig,10-2 Sebastes oblongusに最も似ている。 アイナメ類似 (図版XXXVIII-20~22)

標本と照合した結果である。参考文献 富永盛治郎 1969 「五百種魚体解剖図説(二)」 p. 13, p. 138

マゴチ (図版XXXVIII-23)

標本と照合した結果である。参考文献 Matsubara Kiyomatsu and Ochiai Akira 1955 p.32, Fig. 19

ヒラメ、カレイ類(図版XXXVIII-24)

ヒラメ,カレイ類の標本がないので照合できないが、参考文献として疋田豊次 1934 がある。

カワハギ類(図版XXXVIII-25, 26)

ウマズラハギの標本と照合した結果,骨の質,形が類似していた。しかしほかのカワハギ類の標本がないので,これ以上はわからない。参考文献 堀田秀之 1961 pl. XLV

フグ類 (図版XXXIX-27, 28)

ショウサイフグの標本とくらべてみたが、何フグなのかよくわからない。参考文献 高橋善弥 1962 pls.89-92 (八巻正文)

E. 鳥

CS77地区5e層から鳥骨がまとまってたくさん(約300点)出土した。これらの骨を各部位に分け、さらに左右に分けると表のようになり、少くともこの層には14羽の鳥が投げ捨てられたことが知られる。

鳥の骨の整理にあたっては、各層の骨をまず部位別に分類した。部位の名称は、広島大学生物学会編 池田嘉平、稲葉秋彦監修 1971 (昭和46年)「日本動物解剖図説」 pl. 12 森北出版株式会社 東京による。

種の同定は、国立科学博物館の長谷川善和先生に鑑定していただいた骨や、その後作った現 生の鳥の標本、キジ、ビロウドキンクロ、クロガモ等を参考にして行った。

橈骨 (図版XL)

遺物番号1の骨の末端は平べったく,基端の突出部は嘴状で,骨全体の形はS字状に曲っており細い(最大径3.5mm)。

手根中手骨(図版XL)

遺物番号8,9,11はアホウドリ。他の種の手根中手骨とくらべ表面がつるつるしておらず、 脈状の細い条が縦に走っていて粗い感じがする。

カモ類の手根中手骨は、長さで分けると6cm、5cm、4cm大の3つに分けられる。

尺骨 (図版XL)

カモ類は長さで分けると11cm, 12cm大のもの,8cm前後のもの,5.5cm大のものの3つに分けられる。

大腿骨(図版XLI)

カモ類は長さで分けると、5cm前後のものと、4cm前後のものに2分される。

脛骨 (図版XLI)

カモ類は長さで分けると、7 cm大のもの、 $8.3 \sim 8.4 \text{ cm}$ 大のもの、 $8.7 \sim 9.1 \text{ cm}$ 大のもの、 $9.4 \sim 9.5 \text{ cm}$ 大のものに4分される。

足根中足骨(図版XLII)

カモ類は長さで分けると、4.7~4.9cm大のもの、4.4~4.5cm大のもの、3.4~3.7cm大のものに3分される。

上腕骨 (図版XLII)

カモ類は長さで分けると、11.8cmのもの、9.0~9.2cm大のもの、6.5~6.6cm大のものに3分 される。遺物番号100はヒメウにくらべ大きく、ヒメウより大きいカワウ或はウミウと考えられる。遺物番号103はカモにくらべ全体がほっそりしていて、基端末端とも小さい。遺物番号 107の上腕骨では小突起の凸部は平べったい。

烏口骨 (図版XLIII)

カモ類は長さで分けると3.7~3.8cmのもの,4.1~4.6cmのもの,4.8~5.1cmのものに3分される。 (八巻正文)

表 8 CS77地区出土の主な鳥骨

遺物番号	層 位	新 位	左右	長さ (cm)	種
1	L 5 d	棟 骨	右	12.1	
2	L5fi	"	右	6. 7	カモ
3	L 5 e	"	左	7.8	カモ
4	"	"	左	8. 0	カモ
5	"	"	左	5. 2	カモ
6	"	"	右	5. 3	カモ
7	L 7	第一指骨	左	2. 2	780.77
8	b L 4 c	手根中手骨	左	10. 3	アホウドリ
9	"	"	右	9. 0	アホウドリ
10	L 5 d	"	左	6. 0	カモ
11	b L 5 k <i>l</i>	"	左	10. 3	アホウドリ
12	L 5 c	"	右	5. 2	カモ
13	L 5 d	"	右	5. 1	カモ
14	"	"	右	5.0	カモ
15	L5e	"	左	5. 4	カモ
16	"	"	左	5. 2	カモ
17	"	"	右	5. 3	カモ
18	"	"	右	5. 3	カモ
19	"	"	右	5. 3	カモ
20	"	"	右	5. 1	カモ
21	"	"	右	4. 1	カモ
22	"	"	右	4. 1	カモ
23	b L 4 c	第二指骨	右	5. 8	アホウドリ?
24	L 5 d	尺骨	左	8. 3	カモ
25	b L 4 c	"	左	12. 4	カモ
26	L 5 d	"	左	13. 3	ヒメウ
27	L5fi	"	左	12. 4	ヒメウ
28	L 4 h	"	右	11.5	カモ
29	L 5 e	"	左	7.7	カモ
30	"	"	た	8. 1	カモ
31	"	"	左.	8. 2	カモ
32	"	"	右	8. 2	カモ
33	"	"	右	8. 3	カモ
34	"	"	右	7. 8	カモ
35	"	"	右	8. 3	カモ
36	"	"	右	7. 9	カ・モ
37	"	"	右	8. 2	カモ
38	"	"	右	8. 3	カモ
39	"	"	右	7. 9	カモ
40	"	尺骨	右	12.5	ヒメウ
41	"	"	左	5. 5	カモ
42	"	"	左:	5. 6	カモ
43	"	"	右	5.5	カモ

遺物番号	層 位	部 位	左 右	長さ (cm)	種
45	L 5 e	尺骨	右	5. 5	カモ
46	"	"	右	5. 5	カモ
47	"	"	右	5. 6	カモ
48	L 5 d	大腿骨	左	5. 2	カモ
49	"	"	左	5. 3	カモ
50	b L 4 c	"	左	5.0	カモ
51	L 5 d	"	左	4. 1	カモ
52	"	"	右	7. 0	ウ
53	L 4 🗁	"	右	4. 9	カモ
54	L 5 e	"	左	5. 4	ヒメウ
55	"	"	右	5. 1	ヒメウ
56	"	"	右	5. 4	ヒメウ
57	"	"	右	5. 5	ヒメウ
58		"	た	5. 0	カモ
59	"	"	左	5. 1	カモ
60	"	"	左	5. 0	カモ
61	"	"	左	4. 1	カモ
62	"	"	左	3. 9	カモ
63	"	"	右	5. 0	カモ
64	"	"	右	5. 2	カモ
65	"	"	右	4.8	カモ
66	"	"	右	4. 9	カモ
67	"	"	右	5. 2	カモ
68	"	"	右	4. 2	カモ
69	"	"	右	4. 2	カモ
70	"	"	右	4. 3	カモ
71	L 5 d	III. 骨	左	8. 9	カモ
72	L14 c	"	左	9. 5	カモ
73	L 5 d	"	右	9. 1	カモ
74	"	"	右	8. 7	カモ
75	L 5 е	"	左	10. 1	ヒメウ
76	"	"	左	9. 9	ヒメウ
77	"	"	右	9. 5	ヒメウ
78	"	"	右	9. 0	カモ
79	"	"	左	8. 7	カモ
80	"	脛 骨	左	8. 3	カモ
81	"	"	左	7. 2	カモ
82	"	"	左	7. 3	カモ
83	"	"	右	8.8	カモ
84	"	"	右	8. 4	カモ
85	"	//	右	9. 4	カモ
86	"	"	右	8. 7	カモ
87	"	"	右	8. 8	カモ
88	"	足根中足骨	左	4. 4	カ モ

遺物番号	層位	部 位	左 右	長さ (cm)	種
89	L 5 e	足根中足骨	左	4. 9	カモ
90	"	"	左	4. 9	カモ
91	"	"	左	4. 7	カモ
92	"	"	左.	4. 5	カモ
93	"	"	左	4. 4	カモ
94	//	"	左	4. 4	カモ
96	"	"	右	4.5	カモ
97	"	"	右	4.5	カモ
98	"	"	左	3. 7	カモ
99	"	"	左	3. 4	カモ
100	L 5 d	上腕骨	左	15.9	ウミウ?
101	"	"	左	11.8	カモ
102	L 8 a	"	左	30.0	
103	b L 4 c	"	右	7.7	
104	L 5 e	"	左	13. 3	ヒメウ
105	"	"	左	12.5	ヒメウ
106	"	"	左	7. 0	カモ
107	a L 8 d上	"	左	2. 6	
108	L 5 e	"	右	6. 6	カモ
109	"	"	右	6. 5	カモ
110	"	"	右	9. 2	カモ
111	"	"	右	9. 0	カモ
112	"	"	右	12.0	ヒメウ
113	L 5 d	爲口骨	右	4. 1	カモ
114	"	"	右	4. 5	カモ
115	"	"	右	5. 1	カモ
116	L 5 ハ	"	右	6. 1	ウ
118	L 5 e	"	左	5. 6	ウ
119	"	"	左	5. 0	カモ
120	"	"	左	4. 4	カモ
121	"	"	左	4. 3	カモ
122	"	"	左	3. 8	カモ
123	"	"	左	4. 2	カモ
124	"	"	左	3. 7	カモ
125	"	"	右	5. 7	ウ
126	"	"	右	4. 6	カモ
127	"	"	右	4. 8	カモ
128	"	"	右	4. 2	カモ
129	"	"	右	4.4	カモ
130	"	"	右	4.1	カモ
131	"	"	右	4. 2	カモ
132	"	"	右	3. 8	カモ
133	"	"	右	4. 4	カモ
134	"	"	右	4.5	カモ

表 9 CS77区各層出土の鳥骨数

		衣:	05112	各層出土(り馬官奴			
	b L 3 c	bL4c	4 1	4 p	4 h	5 с	5 c ~ e	5 d
	左 右	左右	左 右	左 右	左 右	左 右	左 右	左 右
1. 頭 骨								
カモ						1		
種不明				1		1		1
3. 軸 椎								
4.胸椎						1		
5. 槜 骨		2 3						3
8. 第一指骨				-				
9. 手根中手骨								
アホウドリ		1 1						
種不明								1 2
10. 第二指骨		1						
12. 尺 骨		-						
カモ		1			2			1
種不明		1		1				-
13. 肩甲骨				<u> </u>				
15. 腸 骨								
16. 尾 椎								
20. 大腿骨								
カモ		1				1 1		3
ヒメウ		1				- 1		3
								1
ў		1 1		1		1		1
種不明		1 1		1		1		
21. 脛 骨								2 2
カモ	-							1
ヒメウ		1				1		1
種不明		1		1		1		
22. 足根中足骨						1		
カモ						1		
種不明								1
24~27. 足指骨								
28. 腓 骨						1		1 1
29. 胸 骨		3				2		
31. 肋 骨								
33. 上腕骨								
カモ								1 1
ウ								1
種不明		1	1					4
34. 烏口骨								
カモ								3
種不明	1				-	-		
35. 鎖 骨	1							
						1	1	1
36. 頚 骨						1	1	
42. 方 骨								1
計	1	18	1	4	2	12	1	32

	5 e	5 f i	5 g h	5 ј	b L 5 k <i>l</i>	5ハ	6 a	6 b
	左右	左右	左右	左右	左右	左右	左右	左右
1.頭 骨	3	1					1	
3.軸椎	4							
4.胸椎	6							
5. 橈 骨	5 3	1 2						
8. 第一指骨	1							
9. 手根中手骨	14 6			to the terrorise	1			
10. 第二指骨		1						
12. 尺 骨								
カモ	5 14							
ヒメウ	1	1						
種不明		1						
13. 肩甲骨	4 12		0.000.000					
15. 腸 骨	10	1	77-77-78-78-78-78-78-78-78-78-78-78-78-7					
16. 尾 椎	4							
20. 大腿骨								
カモ	10 6							
ヒメウ	3 1							
種不明		1						
21. 脛 骨								
カモ	5 6							1
ヒメウ	3							
種不明		1					1	
22. 足骨中足骨								
ġ	1		1	2				
種不明	14 8							
24~27. 足指骨	11							
28. 腓 骨	2 6			1				
29. 胸 骨	4							
31. 肋 骨	3 1							
33. 上腕骨								
カモ	1 7							
ヒメウ	3 1					1		
種不明								
34. 烏口骨								
カモ	6 11							
ウ	2 2					1		
種不明								
35. 鎖 骨	1 3		1	1			1	1
36. 頚 骨	78						2	
42. 方 骨	1							
ât	292	10	2	4	1	2	5	2

	8 a	8 b	aL8d上	a L 8 d 下	b L 8 d	10 b	b L13b上	14 c
	左 右	左 右	左 右	左 右	左 右	左 右	左右	左 右
1.頭 骨								
3. 軸 椎								
4.胸椎								
5. 橈 骨				1				
8. 第一指骨			100000000000000000000000000000000000000					
9. 手根中手骨								
10. 第二指骨								
12. 尺 骨								
13. 肩甲骨		1						
15. 腸 骨								
16. 尾 椎								
20. 大腿骨								
21. 脛 骨					1	1		1
22. 足根中足骨								
24~27. 足指骨								
28. 腓 骨								
29. 胸 骨								
31. 肋 骨								1
33. 上腕骨	1		1					
34. 鳥口骨								
35. 鎖 骨								
36. 怪頚骨	1				1	3	2	
42. 方 骨								
計	2	. 1	1	1	2	4	2	2

F. 糞石 図版XXXIX

総数46点。いづれも魚骨等の骨を多く含む。

出土した糞石の大きさはグラフの如くである。1点だけ非常に大きいが、大きさの点以外は 他の糞石と違いがないように見える。

糞石が人間のものか、他の動物のものか、ERIC O. CALLEN (1967) によって識別する方法が開発され、最近盛んに研究されている。しかしこの方法では有機質が石化してしまったものは分析できないので、これら大木囲貝塚出土の糞石に応用することができない。畑井小虎 (1970) は大木囲貝塚などから出土する糞石は、イヌの糞ではないだろうかと述べている。現在のイヌの糞と比べると大きさ、形、骨が多いことなど類似する。

糞石の研究による多大の成果については、V.M. ブライアントJr/G. ウィリアムズ=ディーン(1975)によって述べられている。糞の参考文献としては、OLAUS J. MURIE(1954)がある。

国立科学博物館の吉行瑞子先生の御教示によれば、外国では糞学として研究されているが日本では余り研究されていないので自分で資料を集め研究する必要があり、出土する糞石をくずしてみて内容をしらべるとともに、何の糞かを見るには、形、振れが重要なので糞石をくずす前によく形、振れを観察するようにとのことであった。犬の糞であれば、人間のそばにいるし、人間の食べるものを分け与えられているので、人間の生活を知る上で重要な資料である。

謝 辞

本調査は昭和52年度環境整備事業の一部をなすものであり、国庫補助、県補助をうけた。

東北大学理学部地理学教室からは多大の便宜、指導、協力をいただいた。

貝層保存実験については、東北大学工学部山口 格教授の御協力をいただいた。

覆屋建設については、尾崎 博博士に御教示いただいた。

興野義一氏は大木式上器について御教示くださるとともに, 貴重な資料を見せて下さった。

C-14年代測定, 花粉分析については, 東北大学理学部西村嘉助教授, 小元久仁夫先生, 中田 高先生の指導・協力をいただいた。特にC-14年代測定は30数点に及んだ。

カニについては、国立科学博物館の武田正倫博士、沖縄県水産試験場の伊野波盛仁氏に指導協力をいただいた。

ウニについては,国立科学博物館の武田正倫博士に御教示いただいた。

貝は東北大学理学部本田 裕氏に鑑定していただいた。

魚については次のかたがたに指導協力をいただいた。

宮崎大学 赤崎正人博士

沖縄県水産試験場 伊野波盛仁氏

琉球大学 吉野哲夫先生

糞石については,国立科学博物館の吉行瑞子先生に御教示いただいた。

図版の作成には宮澤真弓嬢を煩わした。

引用文献

アルファベット順

赤崎 正人 1962 (昭和37年) タイ型魚類の研究―形態・系統・分類および生態― 京都大学みさ き臨海研究所特別報告 1

C_{ALLEN} E_{RIC} O. 1967 (昭和42年) Analysis of the Tehuacan Coprolites, The Prehistory of the Tehuacan Valley I. Environment and Subsistence. edited by Douglas S. Bycrs. University of Texas Press. pp.261-289

HATAI KOTORA 1970 (昭和45年) A Corralite of Jomon Age from Miyato Jima, Matsushima Bay Miyagi Prefecture, Japan Saito Ho-on Kai Museum Research Bulletin 39 Sendai 近日 豊次 1934 (昭和9年) 北日本産鰈類 水産研究彙報 4

堀田 秀之 1961 (昭和36年) 日本産硬骨魚類の中軸骨骼の比較研究 東北区水産研究所 農林水 産技術会議事務局 東京

井尻 正二,新堀 友行 1972 (昭和47年) 地学入門 更訂第13版 築地書館 東京 伊東 信雄 1973 (昭和48年) 古代東北発掘 学生社 東京

Kishinouve Kamakichi 1923 (大正12年) Contributions to the Comparative Study of the So-called Scambraid Fishes 東京帝國大學農學部紀要8 (3)東京帝國大學 東京

興野 義一 1968a(昭和43年 3 月)大木式土器理解のために(III)考古学ジャーナル18 ニュー・サイエンス社 東京

Matsubara Kiyomatsu 1943 (昭和18年) Studies on the Scorpaenoid Fishes of Japan (1) The Transactions of the Sigenkagaku Kenkyusho No. 1 Sigenkagaku Kenkyusyo Tokyo

Matsubara Kiyomatsu and Ochiai Akira 1955 (昭和30年) A Revision of the Japanese Fishes of the Family Platycephalidae (The Flatheads) Memoirs of the College of Agriculture, Kyoto University No. 68

O_{LAUS} J. M_{URIE} 1954 (昭和29年) A Field Guide to Animal Tracks Houghton Mifflin Com. Boston

芹沢 長介,杉原 荘介 1957 (昭和32年) 神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚 明治大学 東京

白井 祥平, 佐野 芳康 1977 (昭和52年) 沖縄の自然 新星図書 那覇

高橋 善弥 1962 (昭和37年) 瀬戸内海とその隣接海域産硬骨魚類の脊梁構造による種の査定のための研究 水産庁内海区水産研究所研究報告16 業績番号96 内海区水産研究所 広島

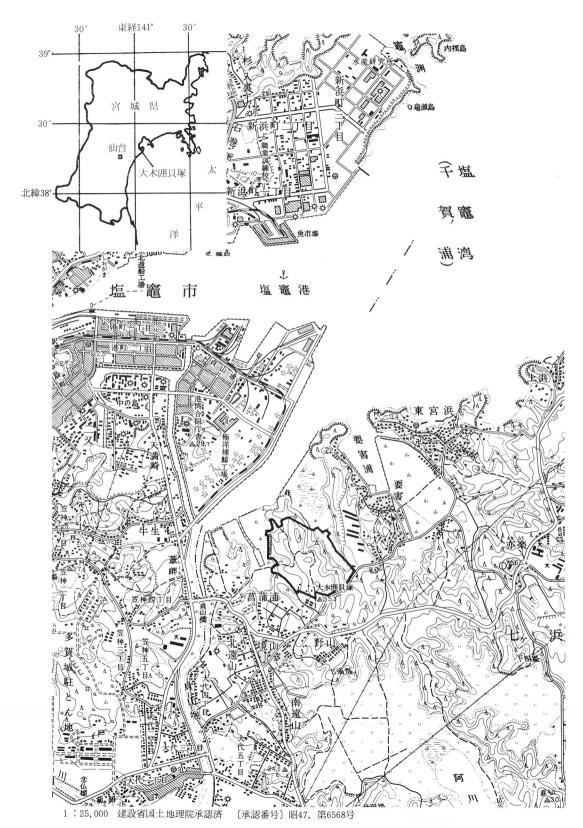
富永盛治郎 1969(昭和44年)五百種魚体解剖図説 日本常民文化研究所 東京

V. M. ブライアントJr and G ウィリアムズ=ディーン 香原志勢 平井百樹訳 1975 (昭和50年) 糞石が示す先史人類の生活 サイエンス5 (3) pp. 86-97 日本経済新聞社 東京

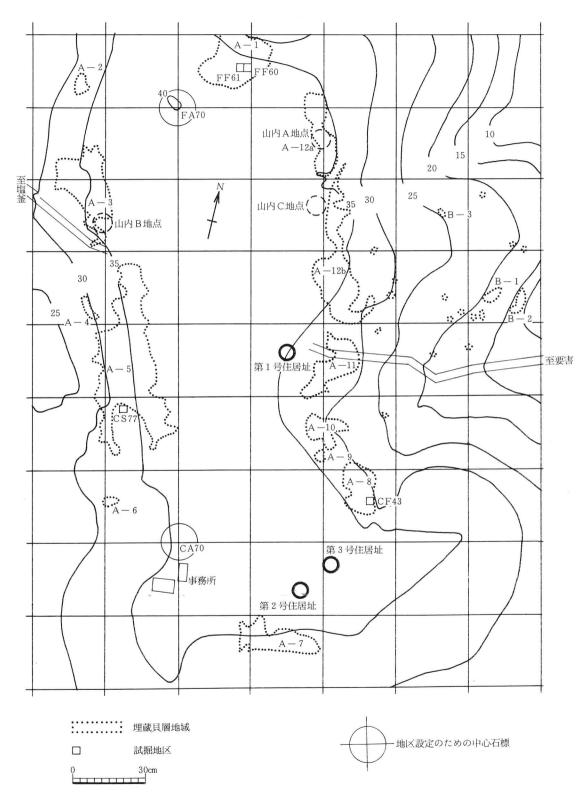
八巻正文 1978 (昭和53) 大木囲貝塚 七ヶ浜町文化財調査報告書 3 七ヶ浜町教育委員会 山内 清男 1929a (昭和4年5月) 関東北に於ける繊維土器 史前学雑誌1 (2) pp.117-146 史前學會。1967 (昭和42年) 先史考古学論文集2所収

山内 清男 1929b(昭和4年7月)繊維土器について 追加第一 史前学雑誌1(3) pp. $271\sim$ 272 史前學會。1967(昭和42年)先史考古学論文集2 所収

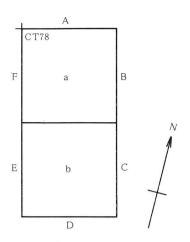
山内 清男 1936 (昭和11年) 日本考古学の秩序 ミネルヴァ1 (4) 付表。1967 (昭和42年) 先史考古学論文集 3 所収



図版 I 大木囲貝塚の位置 2万5千分の1地形図 黒線内が史跡指定区域



図版 II 昭和52年度調査地区図及び山内清男博士発掘地点(破線の円の所)



 $+_{CT77}$

1. CS77地区の発掘範囲 (1×2 m) a, bに2分し発掘した 断面の名称はA, B, C, D, E, Fとした



2. 断面Bの写真 下層になるにつれて良い貝層が表れた







3. 仮の貝層保存小屋

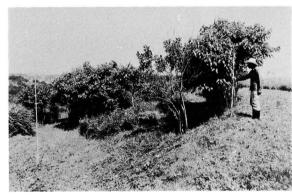
図版 III CS77地区



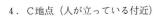
1. 山内清男博士の最初の発掘地点解説板 解説文は伊東信雄博士による

2. A地点(人が立っている段)及び出土した 人骨を供養した小祠とクロマツ





*3. B地点 (人が立っている所) 写真左に昔塩釜に通じた道がみえる





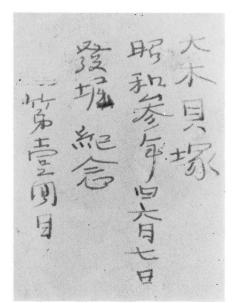
図版 Ⅳ 山内清男博士の発掘地点



1. 大木囲貝塚から塩竈湾を臨む A地点付近から撮影している。 入江をはさんで手前の畑は「おひなた」と呼ばれ ている。 人江のむこうの丘は左道。

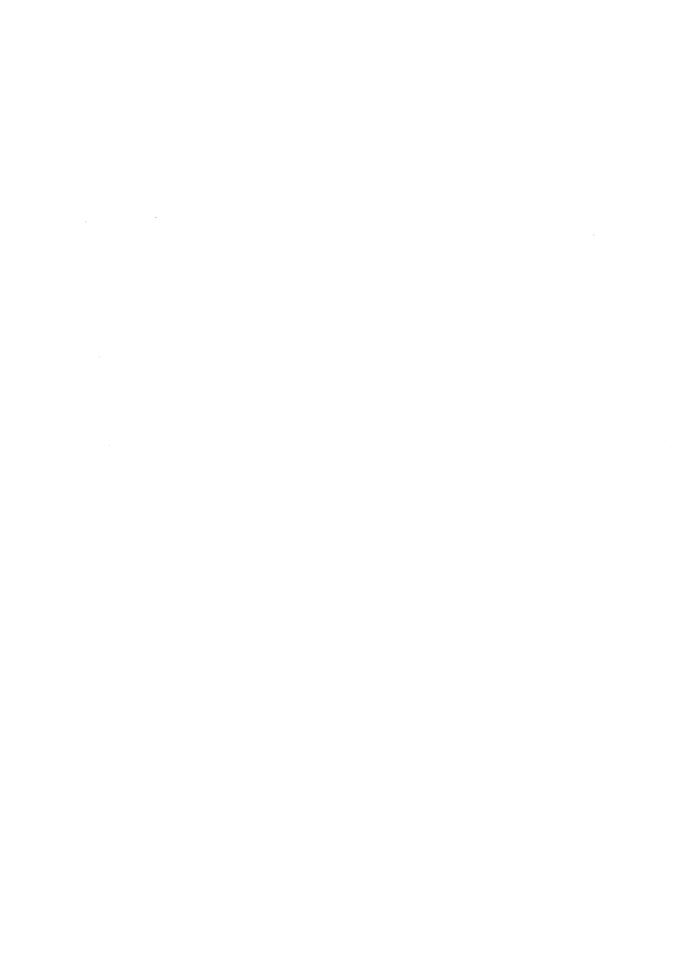


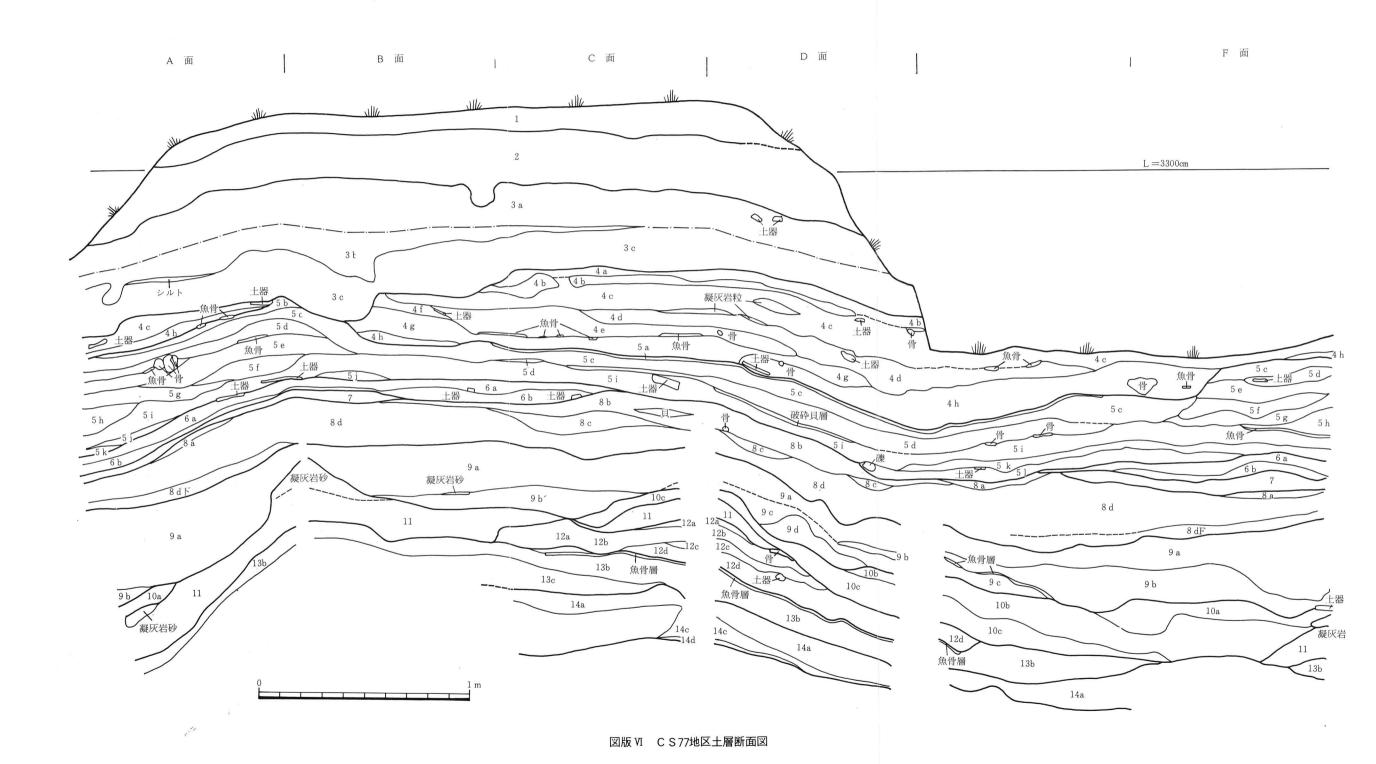
2. 発掘記念



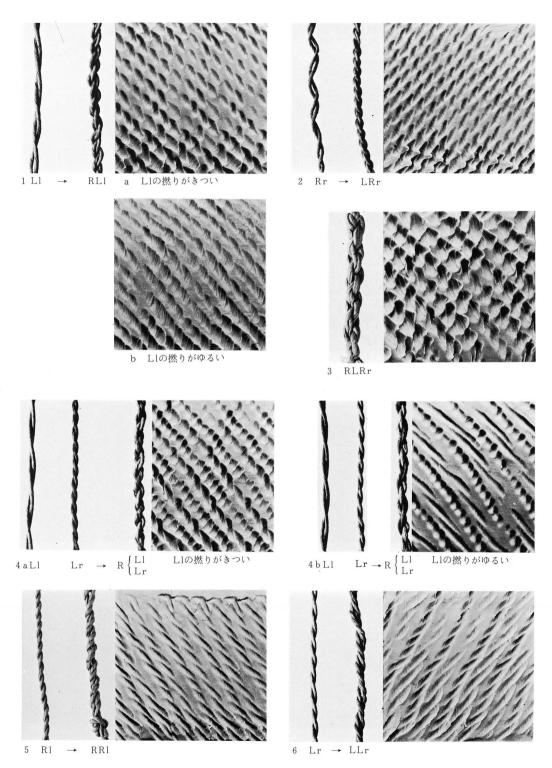
3. 上の写真の裏

図版 V 昭和3年の大木囲貝塚 撮影 山内清男博士





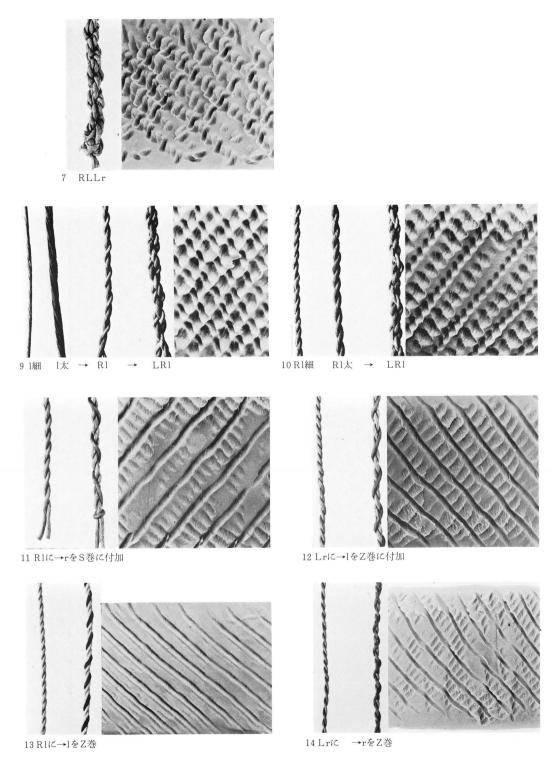
 $71 \cdot 72$



図版 Ⅶ 縄文原体とその回転圧痕

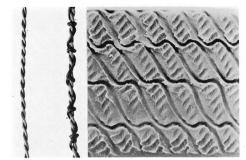
 $1 \cdot 2 \cdot 3 - 0 \cdot I$ 段の撚りが同じ $5 \cdot 6 \cdot 7 - I \cdot II$ 段の撚りが同じ

4-I段の縄のうち片方だけが、 $0\cdot I$ 段の撚りが同じ



図版Ⅷ 縄文原体とその回転圧痕

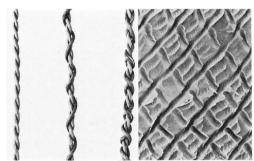
9・10—縄い縄と太い縄を撚る 11・12・13・14—I段の縄を軸とし,0段の縄を巻きつける



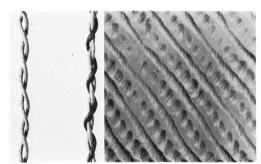
15 Lrに → rをZ巻 巻方を途中で軸に直交させる



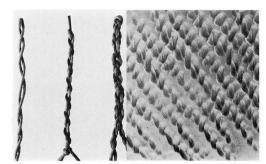
16 Lrに→lをZ巻→次にrをS巻



17 Lrに→ rをZ巻 →次にS巻



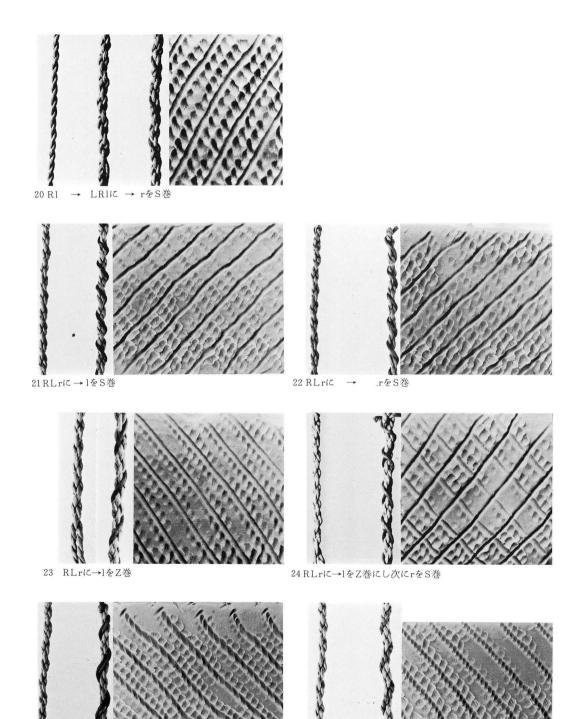
18 Llに → lをZ巻



19 Rrに→rをS巻し→次にRに撚る

図版 IX 縄文原体とその回転圧痕

15・16・17・18— I 段の縄を軸とし, 0 段の縄を巻きつける 16・17—網目状 18・19—0・ I 段の撚りが同じ 19—0 段の縄が付加されている I 段の縄を,II 段にしたもの



図版 X 縄文原体とその回転圧痕

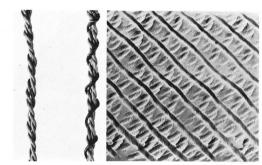
26 RLrに → LrをZ巻

20・21・22・23・24—II段の縄を軸とし、0段の縄を巻きつける 24—網目状 25・26—II段の縄を軸とし、I 段の縄を巻きつける

25 RLrに→LlをZ巻



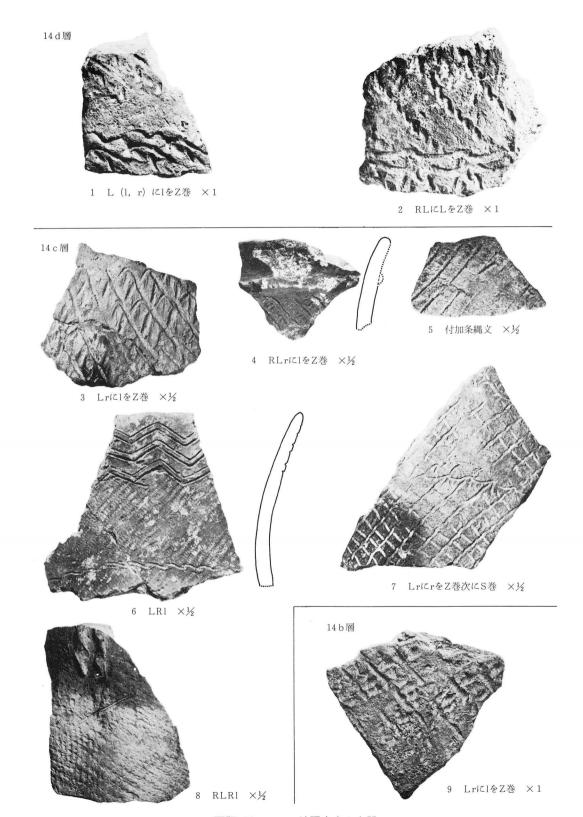
27 LRr/C → RrをS巻



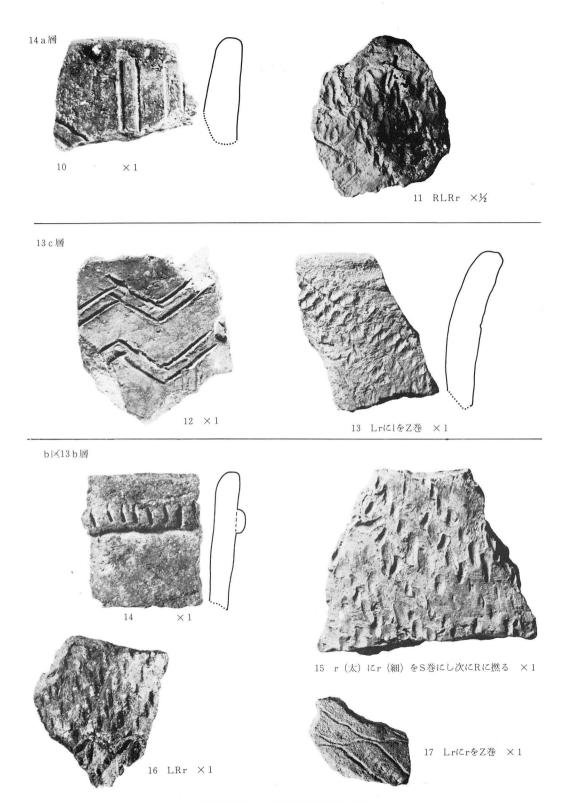
28 LLrに → 1をZ巻

図版 XI 縄文原体とその回転圧痕

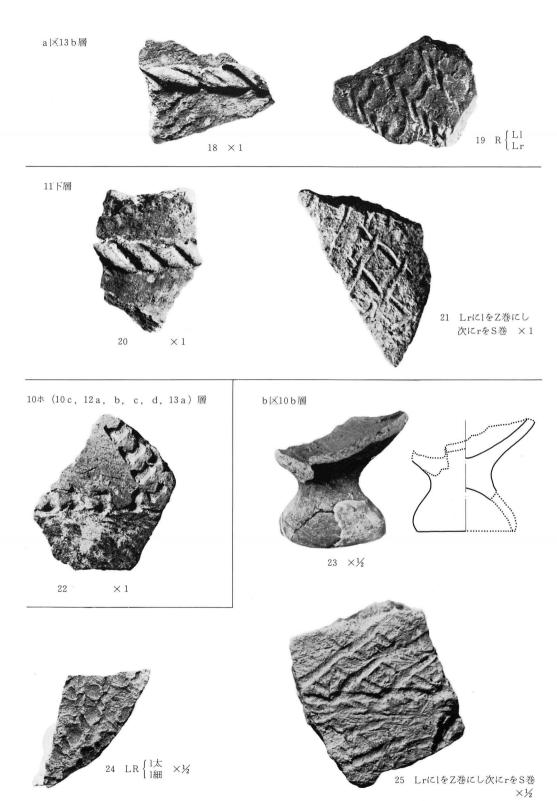
27 II段の縄を軸とし、I段の縄を巻く。軸とした縄の0・I段の撚りが同じ。
 28 II段の縄を軸とし、0段の縄を巻く。軸とした縄のI・II段の撚りが同じ。



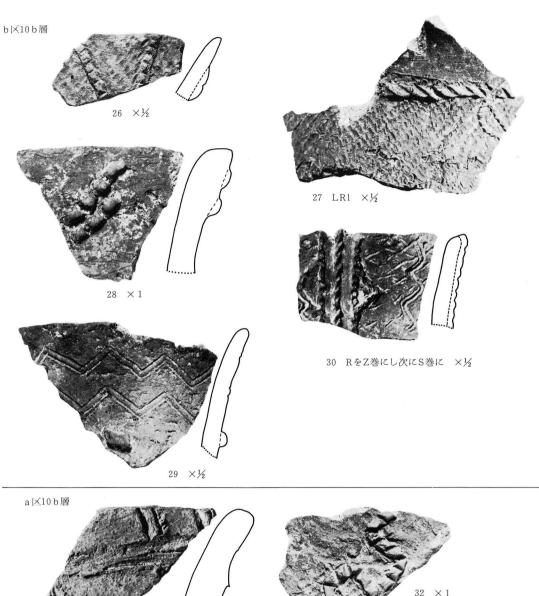
図版 XII CS77地区出土の土器

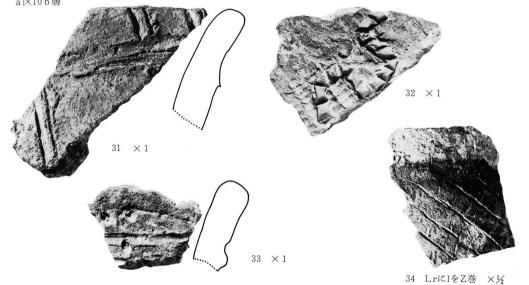


図版XIII CS77地区出土の土器

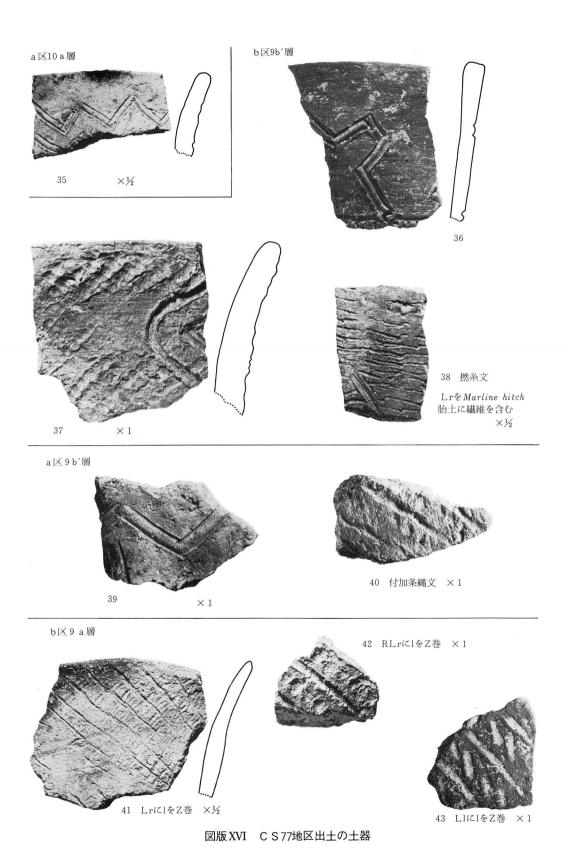


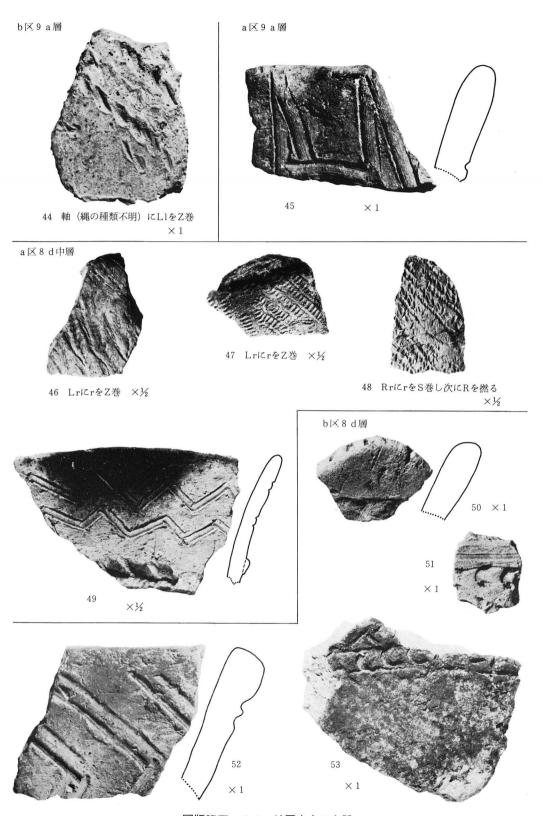
図版XIV CS77地区出土の土器



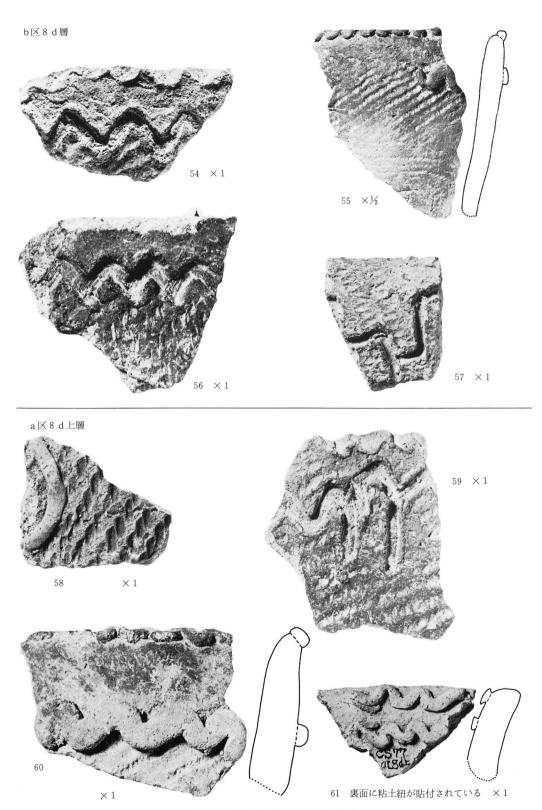


図版XV CS77地区出土の土器

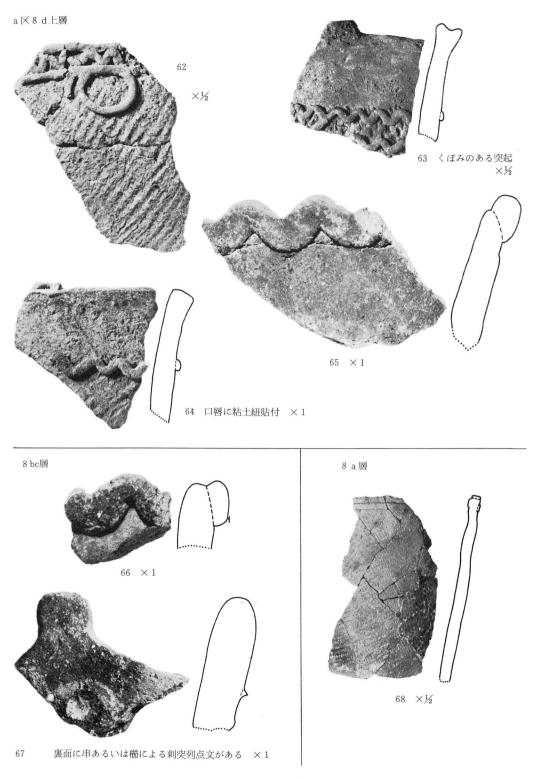




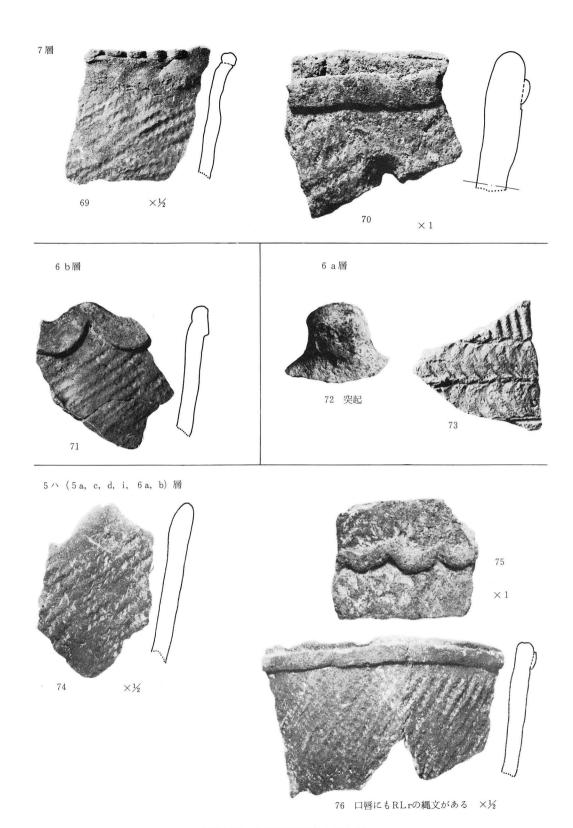
図版XVII CS77地区出土の土器



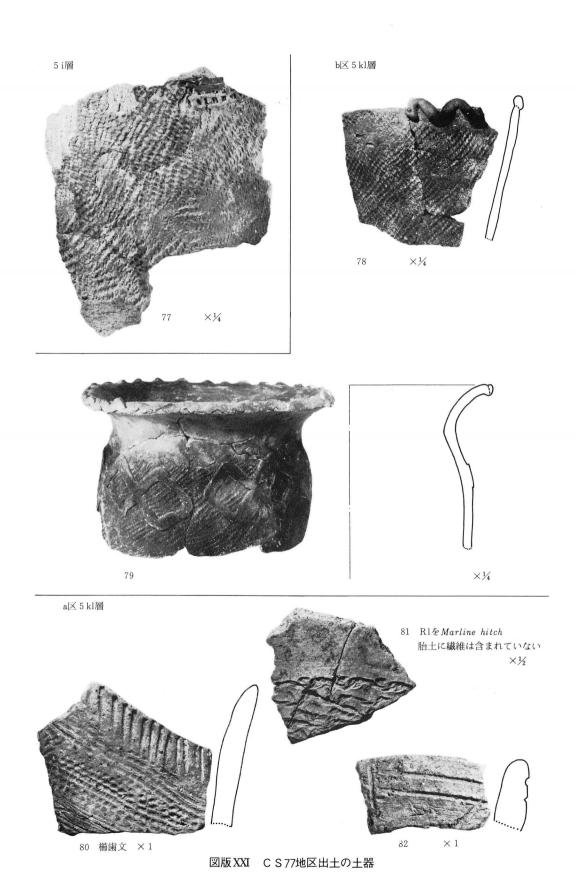
図版XVIII CS77地区出土の土器

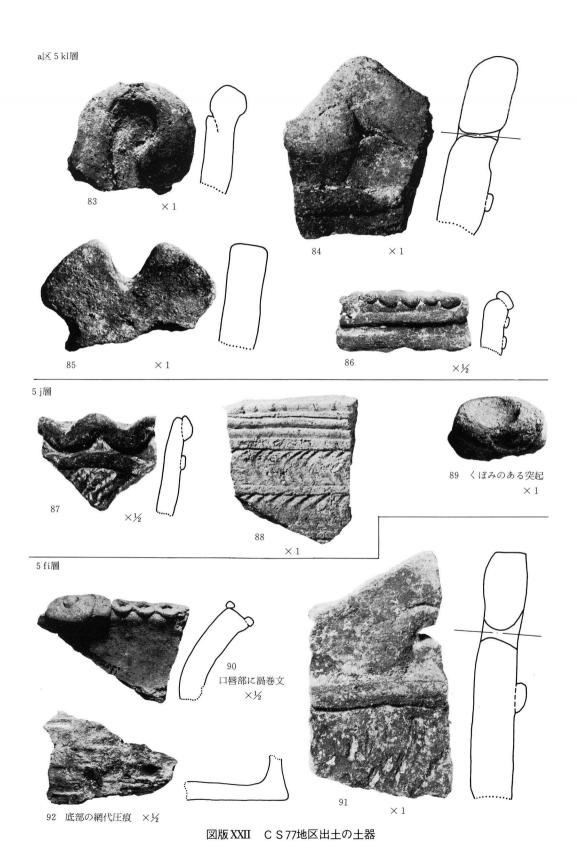


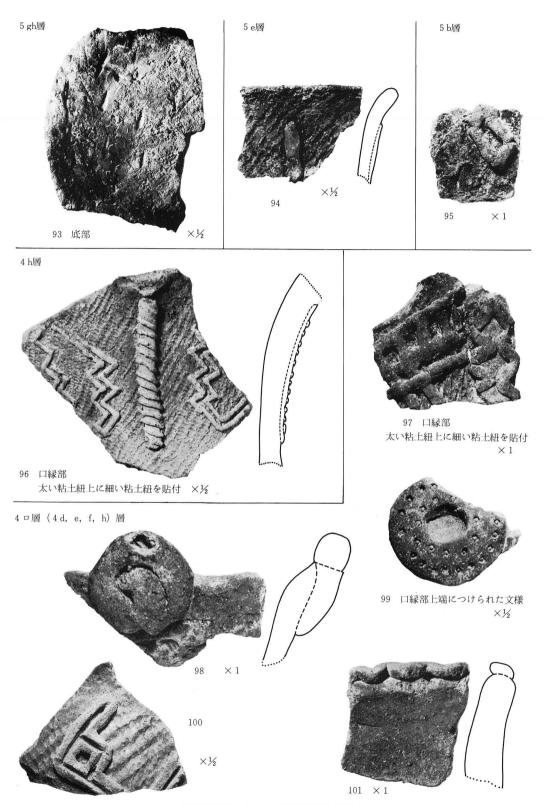
図版XIX CS77地区出土の土器



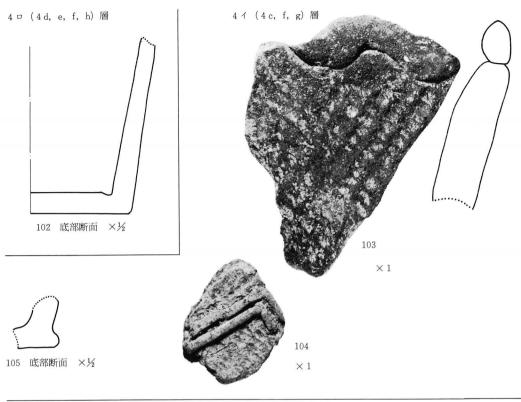
図版XX CS77地区出土の土器

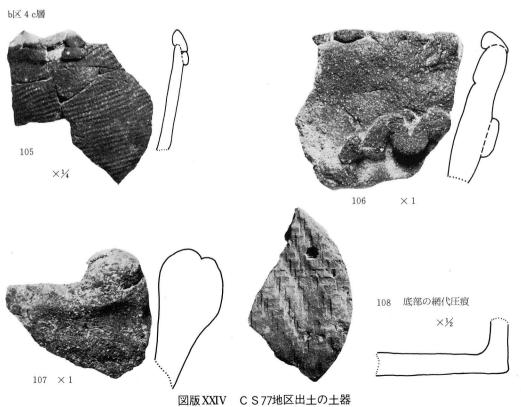


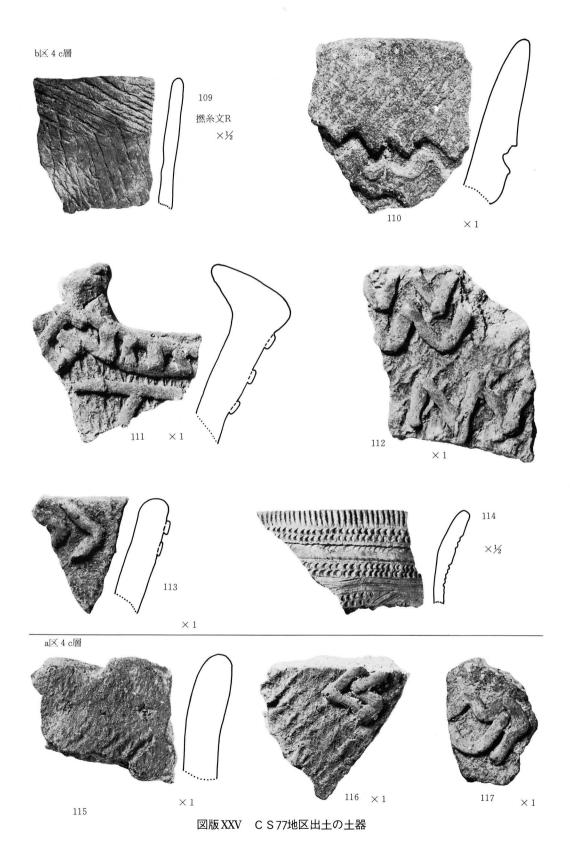


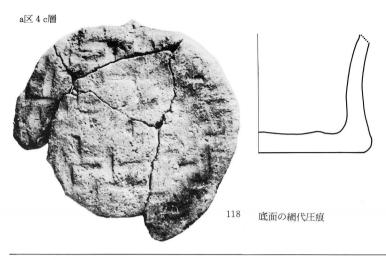


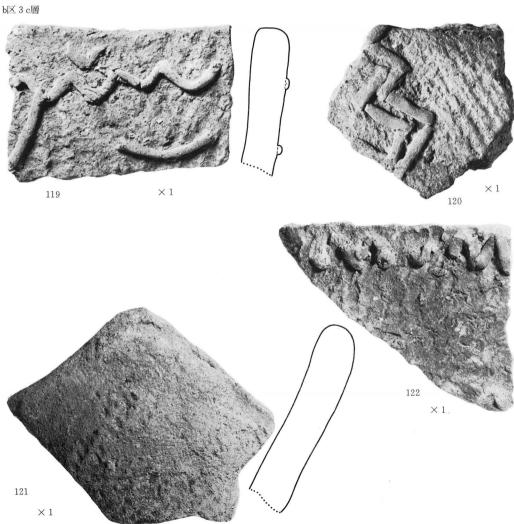
図版XXIII CS77地区出土の土器



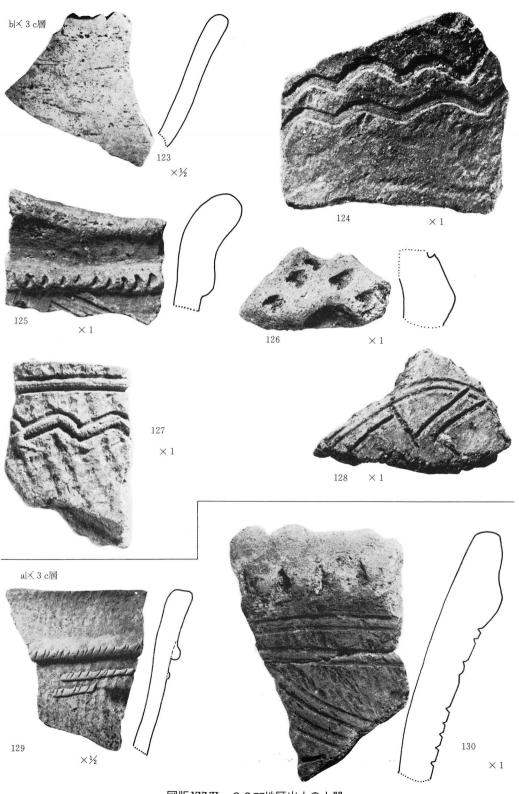




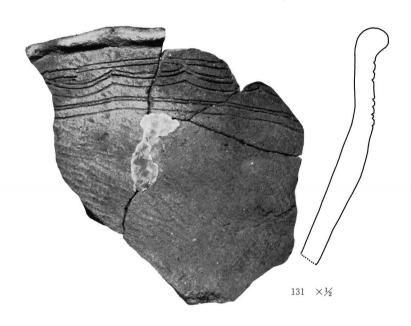


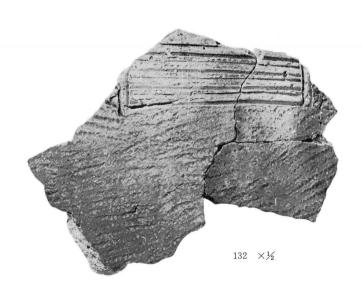


図版XXVI CS77地区出土の土器

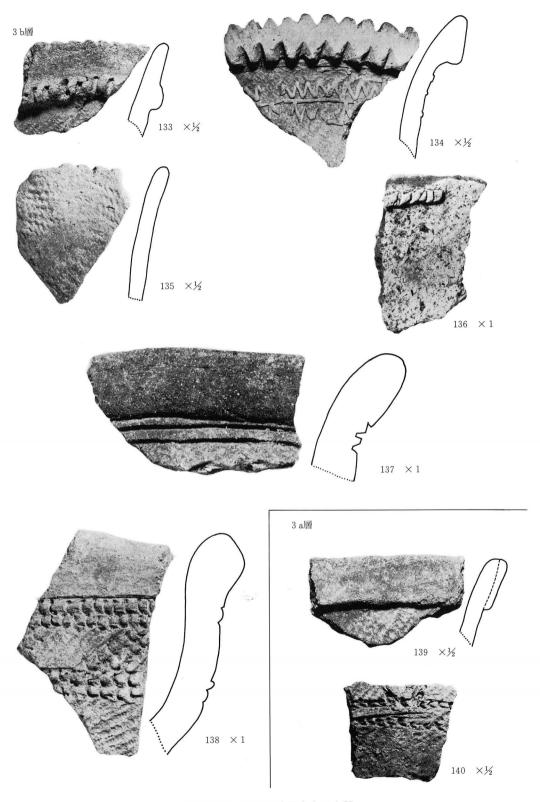


図版XXVII CS77地区出土の土器

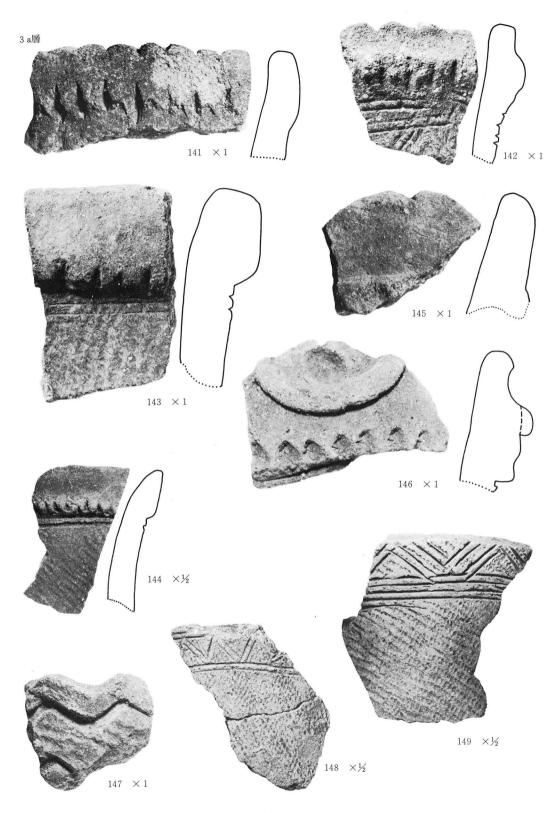




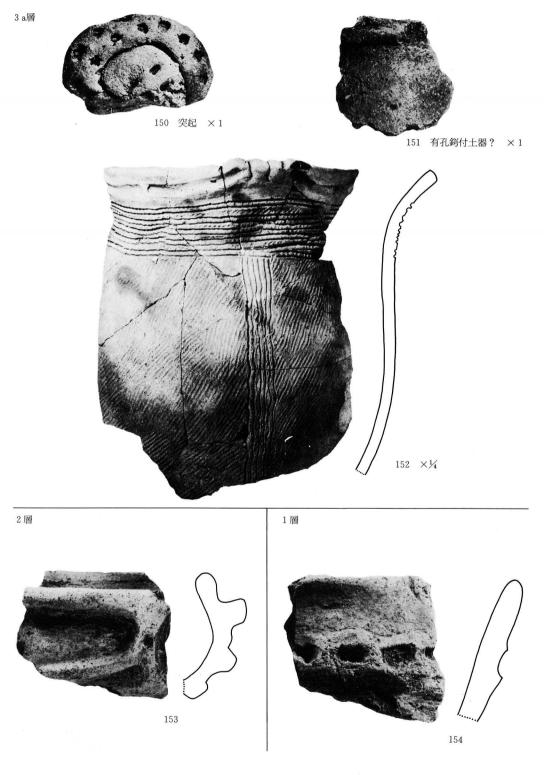
図版XXVIII CS77地区出土の土器



図版XXIX CS77地区出土の土器



図版XXX CS77地区出土の土器



図版XXXI CS77地区出土の土器

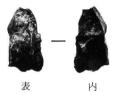
クルミ



1 大木囲貝塚に現生するオニグルミ (種の鑑定は中条幸先生)

a, bとも大木囲貝塚に現生する1本のオニグルミの核果

2 CS77aL 8 d上出土 クルミ核果破片

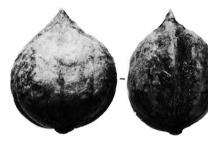




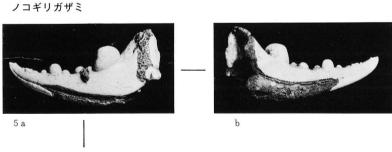
3 a. 表面の皺襞が深い

b. 表面の皺襞が浅い

 $\times 1$



ヒメグルミの核果 (現生, 仙台市) $\times 1$



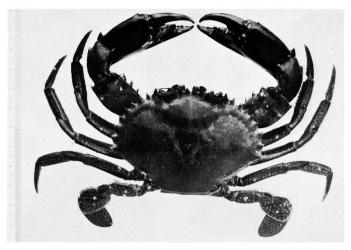


CS77aL8d上出土 ノコギリガザミ右の可動指 ×1



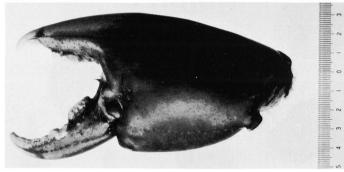
6 CS77aL8d上出土 ノコギリガザミの右の不動指 ×2

図版 XXXII CS77地区出土のクルミ及びノコギリガザミ



ノコギリガザミ 3 現在 甲長10.6cm 甲幅16cm 那覇 ×¼

ノコギリガザミ \$ 現在 甲長11.4cm 甲幅17cm はさみ右 那覇 ×½





a. はさみ左

b. はさみ右

ノコギリガサミ早現生 甲長 9.7cm 甲幅14.8cm 那覇 ×½



ノコギリガザミ♀現生 甲長 6.2cm 甲幅 9.5cm はさみ 右 那覇 ×½



ノコギリガザミ & 現生 甲長 5.9cm 甲幅 9 cm はさみ 左 那覇 ×½

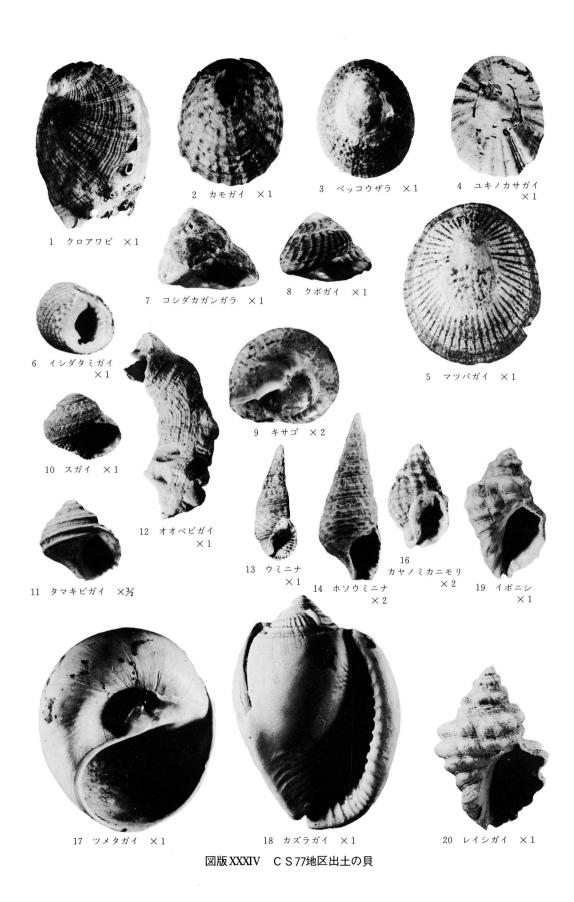


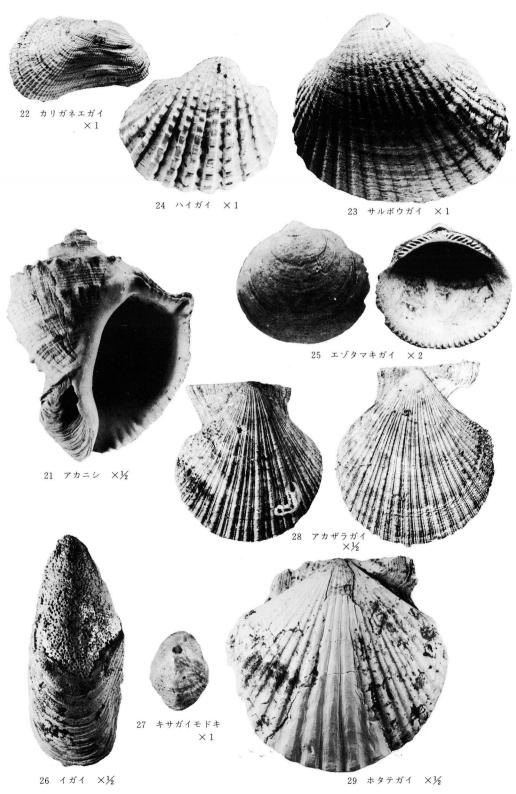
ガザミ阜現生 甲長 8 cm 甲幅 16.4cm はさみ 右 七ケ浜 ×½



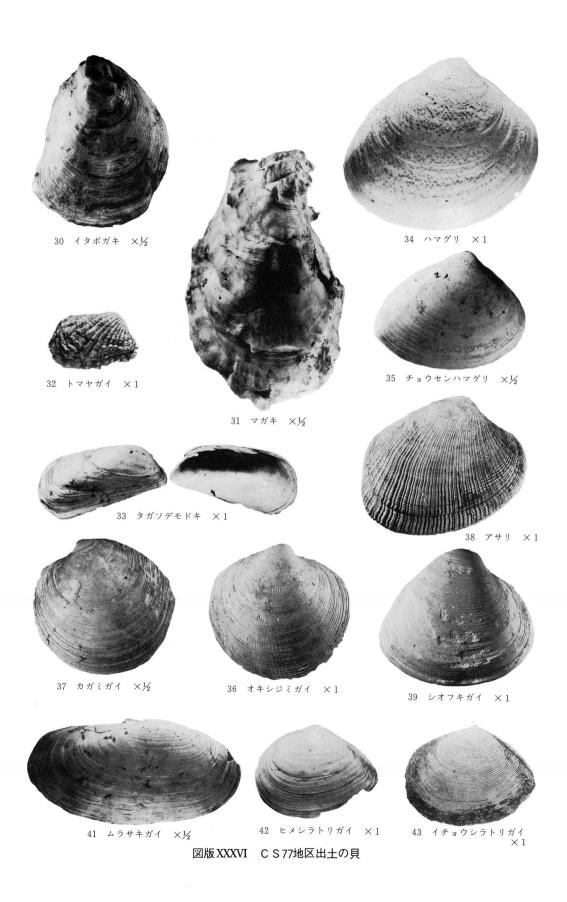
タイワンガザミ**♀**現生 甲長 7.5cm 甲幅 16.5cm はさみ 右 那覇 ×½

図版 XXXIII ノコギリガザミ,ガザミ,タイワンガザミの標本





図版XXXV CS77地区出土の貝







47 マイマイ × 2



45 オオノガイ ×½



46 ヤマトシジミガイ $\times 1$



48 オオアカフジツボ ×1

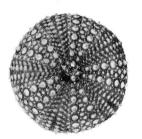
ウニ



a L 10 b 出土 L 14 c 出土



49 ムラサキウニの棘 ムラサキウニの殻破片 $\times 1$ 50 ムラサキウニ (現生) $\times ½$

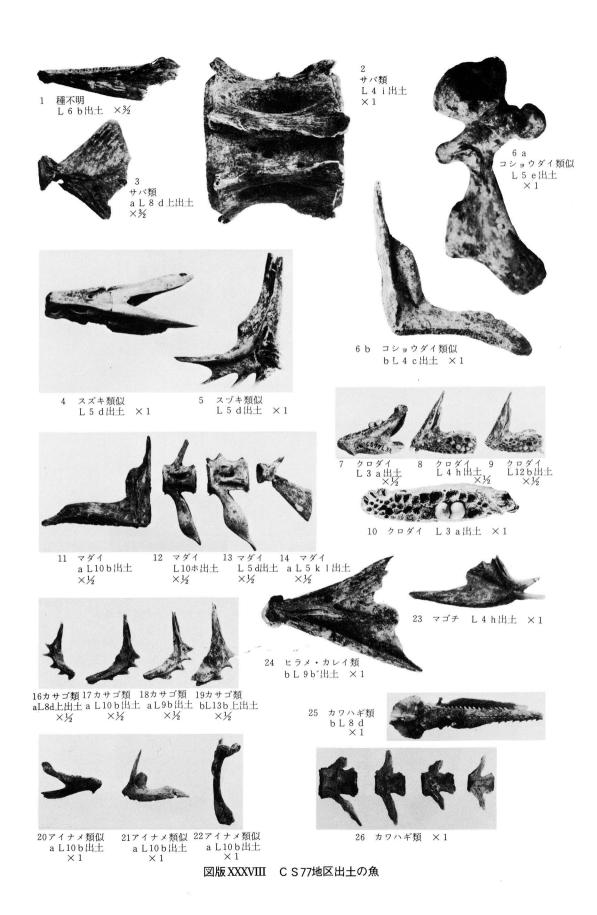




51 バフンウニの殻 ×1 52 バフンウニ (現生) ×½ L 5 gh出土



図版 XXXVII CS77地区出土の貝, フジツボ, ウニ



魚骨



28 フグ類 ×½



27 フグ類 ×½

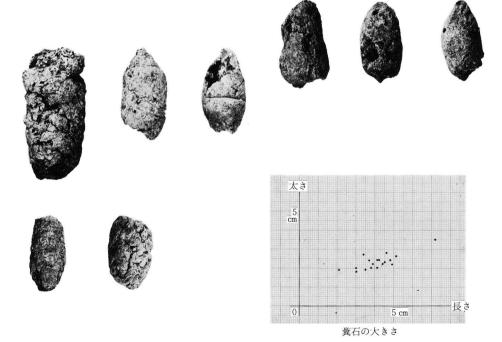


- 29 種不明 L 5 c 出土 × 1
- 30 種不明 L5c出土 ×1
- 31 種不明 L 5 c 出土 × 1



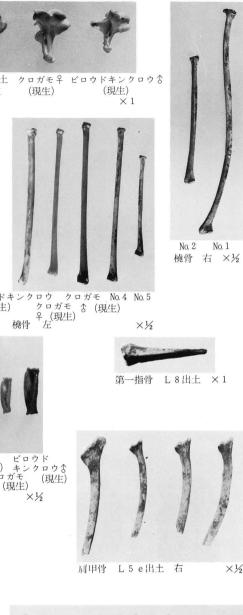
32 種不明 L 5 c 出土 × 1

糞石

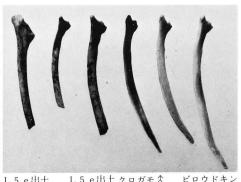


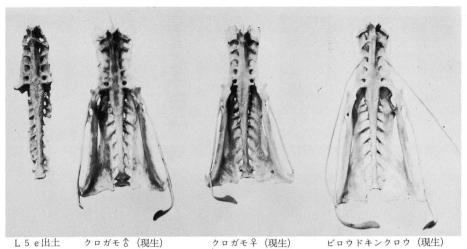
図版 XXXIX CS77地区出土の魚及び糞石



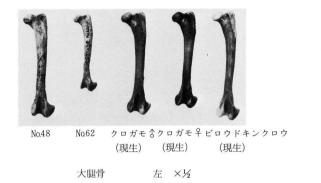


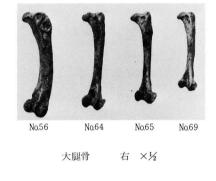


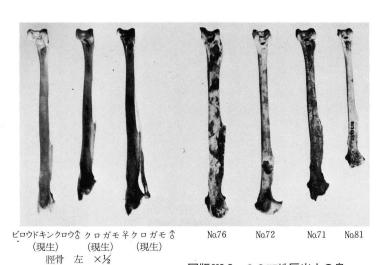




版骨 ×½

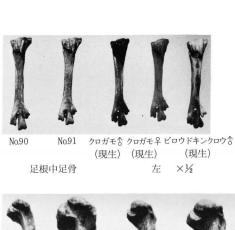






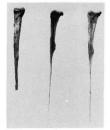


図版XLI CS77地区出土の鳥





No.88 足根中足骨 右 ×½



L5e出土 クロガモ♀ ビロウドキンクロウ含
 腓骨
 (現生)

 右
 ×½



No. 103 上腕骨 右 ×½

No. 108 No. 111

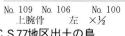
クロガモ♪ (現生)

クロガモ♀ ビロウドキンクロウ♂ (現生) (現生)



L 5 e 出土 × 1 胸骨







No. 102 上腕骨 左 ×¼



肋骨 L 5 e 出土 × 1



鳥口骨 No. 116

No. 115

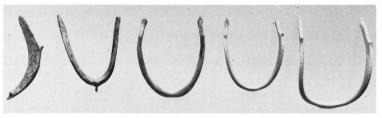
No. 133

No. 130 No. 114 右 ×½



鳥口骨

No. 118 No. 119 クロガモ↑ クロガモ♀ ビロウドキンクロウ♪ (現生) (現生) 左 ×½ (現生)



鎖骨

L 5 e 出土 L 5 gh出土

クロガモ♪ (現生)

(現生)

クロガモ♀ ビロウドキンクロウ☆ (現生)

 $\times \frac{1}{2}$



L 5 e 出土

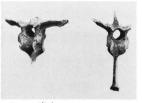
軸椎

 $\times 1$



L 5 e 出土 頚骨 ×½

図版XLIII CS77地区出土の鳥



L 5 e 出土 胸椎

 $\times 1$

G. 哺 乳 類

I. ニホンジカ Cervus nippon Temminck (第1・2・3表)

CS77区より出土したシカの遺存骨の破片数は33片であり、哺乳動物のうちでは最も多い。体肢骨のうち同定できたものはすべて骨端部の小破片であり、骨幹部はほとんど含まれていない。骨幹部に相当する破片も認められるが、細かく割られたような状態であり、同定することはできない。これに対して顎骨および歯牙は比較的保存が良好であるといえる。乳臼歯を残した若い個体の下顎骨が1点出土している。

下顎骨のうち、下顎枝が欠損していないものは1点のみである。この下顎枝の外面の咬筋の着く所のやや上に水平に走る数条の切り傷が残されている。L8d出土の下顎枝はちょうどこの切り傷のある場所で折れている。頭蓋から下顎をはずす場合、咬筋を切断し、さらに下顎孔付近の比較的骨の弱い所で折り取られることもあったのだろう。

- 2. イノシシ Sus scrofa leucomystax Temminic et Shlegel (第4・5・6表) 破片数は,シカに次いで多く,シカとともに哺乳類の遺存骨の主体をなす。顎骨の全体に占める比率はシカよりも高い。長骨の骨幹部の残存状態が良くないのもシカと同様である。顎骨の観察によれば,乳臼歯と M_1 の萌出している例が4例あり,若い個体の比率はシカの場合よりもかなり高くなる。
- 3. タヌキ Nyctereutus procyoyonoides viverinus Temminic et Schlegel (第7表) タヌキの遺存骨は11片出土しているが,肩甲骨1例を除くとすべて頭骨である。体肢骨がほとんど含まれていないという事実に注意をしておかなければならない。発掘面積が小さく資料が不十分であることによるかたよりなのか,今後の検討を要する。
 - 4. イタチ Mustela sibirica itatsi Temminck

L14d. 左下顎骨 1 個, 下顎骨長29.4

- 5. ノウサギ Lepus brachyurus Temminck
- L7 左前上顎骨1個

L8dc 右下顎骨1個

L8bc 左下顎骨1個

L8bの下顎骨は、切歯を欠くがほぼ完形である。

- 6. クジラ類 Cetacea
- L3a 椎骨1個

L4イ 椎骨1個 椎体長33.5

狩猟活動の対象はシカとイノシシが中心であった。長骨の保存が悪いのは、骨角器の材料として利用されたからであろう。貝鳥貝塚出土のイノシシの下顎骨の頭蓋から下顎をとりはずすためにつけられた切り傷について、金子浩昌は、脳髄を摘出するための作業の結果であると述べている(金子1971)。今回の資料は、シカであったが、やはり同様の作業を想定させるものである。タヌキは、シカ・イノシシに次いで多く出土している。タヌキは、集落の近くにすみ、人間の目にふれる機会も多かったと考えられる。その肉よりもむしろ毛皮を手に入れるために捕獲されたのであろう。

(参考文献)

金 子 浩 昌 1971「動物遺存体」貝鳥貝塚 166~197

(小林 和彦)

表し シカ上顎・歯牙

表 2 シカ下顎骨・歯牙

							L]	R					
		Мз	M ₂	Мı	P.	P ₃	Pa	С	Is	I2	Ιι	Iı	I2	Iз	С	P_2	Рз	P٠	Мı	M2	Мз	
L 3 a																P ₂	Pı	P4	Мı			
L40	_	Мз	M ₂	М1.	P4	Pa	Pı		()	()	()											下顎歯列長:
L 5 e					P4	P ₃	Pa															10:50M/JLX •
L 7																P ₂						
aL8d中																						
L8d												İ										
bL13b下			l																	1		
L 14 a		Мз																				
L 14 c																mı	mı	m³				

L:左 R:右

():歯牙欠落, ——:顎骨 m:乳臼歯 未:未萌出

101.1

表 3 シカ遺存骨

	頭	骨	環椎	軸椎	肩目	甲骨	上膨	帽	橈	骨	尺	骨	中	手骨	大脑	闄	脛	骨	腓	骨	踵	骨	中	已骨	備	考
	l	r			l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	τ	l	r	l	r	l	r	l	r	1/19	45
L 4 ad				1																					軸椎幅 59.	0
L 4 c	鹿角基	も 部 1										1													尺骨上端幅	41.7
L 4 c					1															:					肩甲骨関節層	高長 39.5
L 4 1											1															
L 5 上									1																橈骨下端幅	35.5
L5fi									1																"	37. 3
L5j					1						1														尺骨上端幅	29.7
L-5kl																	1	1							脛骨下端径	35. 4
L 5 ハ																		1							"	36.0
aL 8d上												1														
L8d	(頰乍	計) 1		2																						
L 14 a	1 (\$	頁骨)																								
L 14 c																	1									
b L 15																						1			踵骨長 101	. 0

表 4 イノシシ上顎骨・歯牙

						L												R				
	M	M²	M ¹	P ⁴	P 3	P²	P^1	С	I³	I²	I1	I1	I²	I ³	С	P1	P²	P 3	P'	M¹	M²	M³
L 3 a																			P ⁴	M1	()	
L4c												I¹								M¹	M²	M ³
L 4 c																				()	()	M³
L4h		M ²																				
L5kl		M²				P²	Pι	С														
L 5 ハ																	()	m²	m³	M¹		
L 8 d											I ¹											
bL13b下																	P²					
b L 15		ŀ																			()	()

表 5 イノシシ下顎骨・歯牙

							L												R					
		Мз	M2	Мı	Pı	Рз	P ₂	Рı	С	I3	[2	Ιι	Iı	I ₂	I3	C	Pт	P ₂	Рз	P	Мı	M2	Мз	
L3a			M²	M)	P٠																			
bL 4 с	_	Мз																						
L 5.k1			未	Мı																				
L 5 ハ				Мı	m ₃	m 2	m'ı														M:	未		
	_	Мэ																						
L8b																								
L14 c													I1] 2	()	()	()	()	P,	P4	M,	M²	\$	

表 6 イノシシ遺存骨

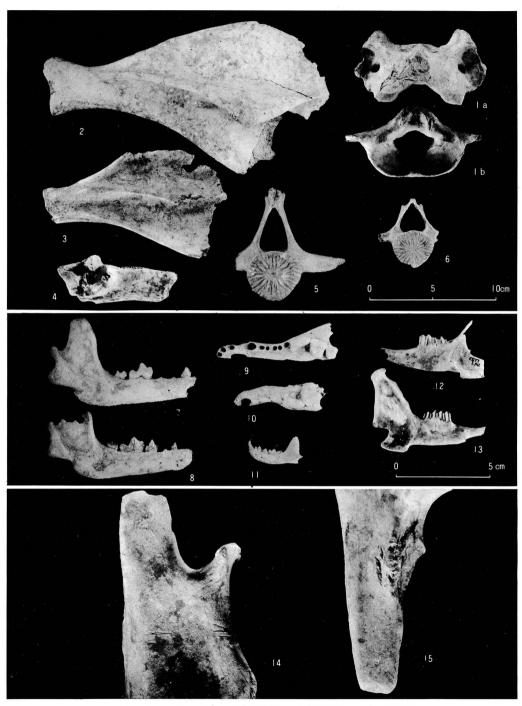
	頭 骨	環椎	軸椎	肩甲骨	上腕骨	槙	骨	尺	骨	中手骨	大腿骨	脛	骨	腓	骨	踵	骨	中足骨	備	7	考
L4h				1																	
L41				1																	
bL 5kl		1							1												
L 5 /\	(側頭骨)1																				
L8a				1															肩甲骨膊	目節 窩長	45.5
aL8d E						1		1											棚上端	11.7,尺骨上端	編32.0
L 8 c												1									
L10 b		. 1																	環椎幅	96.0	
b L 15																	1		踵骨長	92.0	

表 7 タヌキ遺存骨

				下顎骨体高	体厚(M2歯槽後縁位置)	Mı歯冠長	歯冠幅
L 3 c	下顎骨	L	(P2P3P4M1M2)	17.0	6. 5	12.8	6.0
L 4 0	上顎骨	L	$(I^3 \cdots P^4M^4M^2)$				
L 5 k l	下顎骨	R	$(P_2P_3\cdots M_1M_2)$	17.4	6. 0	13.0	5.5
	肩甲骨	L					
L 5 /\	下顎骨	R	(P2 ····· M1 M2)	16.0	5.8	12.5	5.4
L 7	側頭骨	R					
L8d上	下顎骨	L	(M1)			12.0	5.5
	下顎骨	L	(P ₄ M ₁)			12.5	5.5
L 8 b	下顎骨	L	(M ₁)	16.0	6.0	12.6	5.5
	上顎骨	R	$(P^{1}P^{2}P^{3}P^{4}M^{1})$				
L 12 b	下顎骨	R	(P3P4M1)			12.5	5.2



図版 XL IV 大木囲貝塚出土の動物遺存体



 1~4
 イノシシ(1
 環椎 2
 肩甲骨L 3
 肩甲骨L 4
 踵骨R)

 5・6
 クジラ類椎骨

 7~10
 タヌキ(7
 下顎骨R 8
 下顎骨R 9
 上顎骨L 10
 上顎骨R)

 11
 イタチ下顎骨L 12・13
 ノウサギ(12
 下顎骨L 13
 下顎骨R)

 14
 切り傷のあるシカ下顎骨
 15
 遠位端に磨痕のあるシカ尺骨

図版 XL V 大木囲貝塚出土の動物遺存体

Ⅷ. 貝器

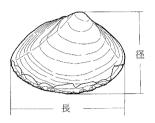
総数63点出土。内訳は、貝刃41点、貝輪18点、有孔貝器4点である。

イ. 貝 刃

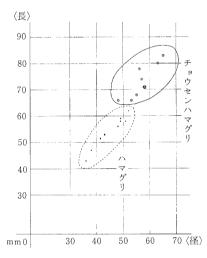
二枚貝の腹縁部に押圧剝離による調整が加えられたものを貝 刃とした。総数41点のうち完形品は22点で,他は破片ないし切 片である。素材は,ハマグリ21点,チョウセンハマグリ20点と 同数に近く,他の貝は全くない。殻種は20:20とLR全く同数 である。大きさは最小のもので,長さ43mm,径36mm,最大のも

ので、長さ83mm、径65mmで必ずしも大きさは一定していない。(図ロ) で見るとおり、大形のものはチョウセンハマグリを主体としている。径/長比はハマグリの方が高い。

刃部の位置,製作技法,刃部の幅などから次のように 分類することができる。先ず第1に,刃部の位置は(A)腹 縁全般に及ぶもの18点,(B)腹縁の4分の3ほどを占める もの6点,(C)腹縁の2分の1が刃部であるもの1点,不 明16点となっている。製作および調整技法としては,(4) 腹縁の内外両面に調整が施されたもの19点,(口)外面にの み施されたもの20点である。また,外面の刃部の状態に ついては,(a)最初に荒く剝離したあと細かい調整を加え



図イ 貝刃の計測部位名称



図ロ 貝刃の長径比グラフ

た二段階調整のもの(37点)と(b)単一の剝離調整で終っているもの(2点)とがある。さらには、刃部の幅を0~2mm程度のもの(13点)と2mm以上のもの(26点)に分けることができる。これらを整理すると(表1)のようになる。これに時期と素材の問題を加味しても特に一定の傾向を指摘することは、資料的にきわめて限定されているため困難である。しかし、今回の調査分の概括的な特徴として指摘するならば、(1) 刃部の位置は腹縁全般にわたるものが全体の7割を占める。(2) 調整方法は二段階のものが8割以上である。一段のものは、ハマグリを素材とする。(3) 両面調整と片面調整は同数だが、両面調整はチョウセンハマグリの方に多く見られ、時期的には大木3式期に多い。(4) 細分類すると、腹縁全般に刃部をもち、両面調整で、外面は二段階調整、刃幅2mm以上のものが全体の3分の1を占め最も多い。

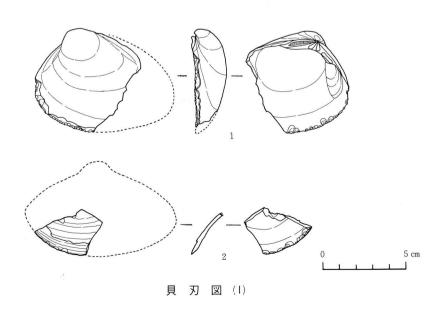
擦痕および使用痕などについては明確に確認できるものがほとんどなかった。

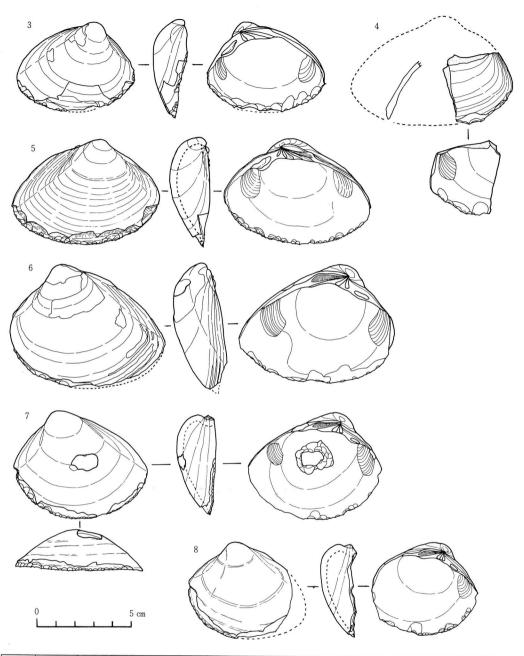
	3	1 人小世	サスタ し	,5/1地	只山工只	为为叛 获			
刀如 o 片 胃	an 事	工物の計算	71 Ha	*6 =	素	材	時		期
刃部の位置	調整	刃部の状態	刃 幅	数量	ハマグリ	チョウセンハマグリ	大木 3	大木 4	不 明
1	両面 (11)	2段 {	2 mm以上	8	3	5	5	2	1
A. 腹縁全般 (18)	[H] [H] (LI)	2段)	″ 以下	3	2	1	3	0	0
A. 版隊主版 (10)	片面 (7)	2段	〃 以上	5	3	2	3	2	0
l	ДЩО	2 FX	″ 以下	2	1	1	1	1	0 .
ſ	両面 (2)	2段 {	〃 以上	1	0	1	1	0	0
B. 腹縁3/4(6)	H H (2)	2 FX]	″ 以下	1	0	1	1	0	0
D. 版隊3/4(0/)		2段 {	〃 以上	1	0	1	0	1	0
l	片面 (4)	2 (2)	″ 以下	2	2	0	1	1	0
	l	1段	″ 以下	1	1.	0	1	0	0
C. 腹縁1/2(1)	片面 (1)	2 段	〃 以下	1	1	0	0	1	0
(両面 (6)	2段	〃 以上	6	1	5	3	3	0
D. 破 片 (14)	1	2段	〃 以上	5	3	2	1	4	0
切片"	片面 (8)	2 12	″ 以下	2	2	0	1	1	0
l		1段	″ 以下	1	1	0	1	0	0
E. 不 明				2	1	1	2	0	0
合 計				41	21	20	24	16	1

表 1 大木囲貝塚 CS77地点出土貝刃分類表

以上の分類に関し、堀野論文を参考とした。(「仙台湾」創刊号・1971)

なお、いずれも混貝土層、混土貝層からの出土物であり、破片のほとんどおよび完形品の一部は徹底的なサンプリングと分類作業の結果確認されたものであり、貝層の調査などの時には 徹底的なサンプリングが必要であることを再認識しなければならないことを付言したい。

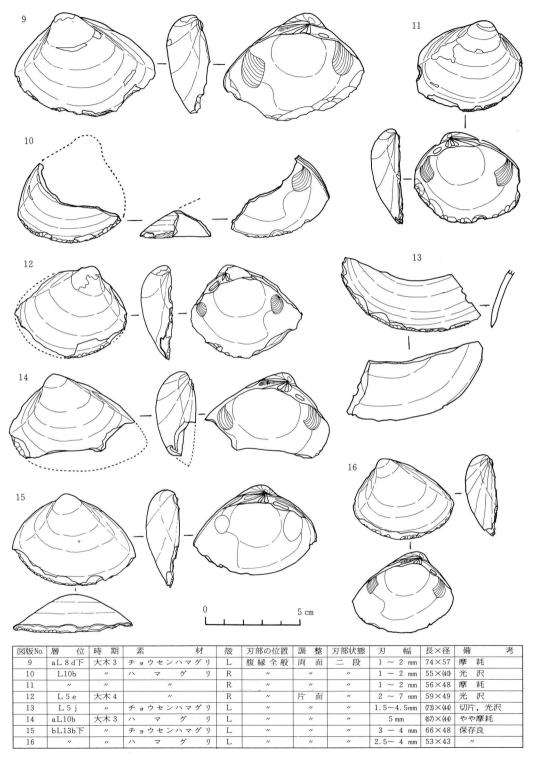




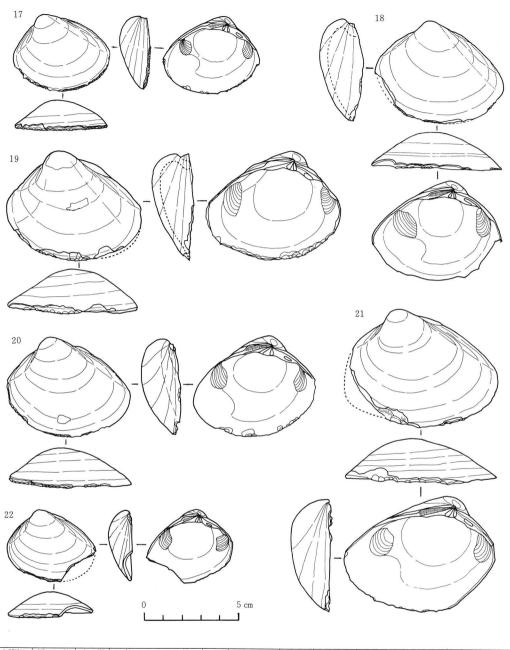
図版 No.	層 位	時期	素	材	殼	刃部の位置	調整	刃部状態	刃 幅	長×径	備 考
1	L 5 j	大木 4	チョウセンハ	マグリ	L	腹緣全般	両 面	二段	3 mm	(64)×67	光沢あり
2	L6b	"	ハマク	, 1	L?	"	"	"	6 ~ 8 mm	(35) × (28)	"
3	aL8d中	大木3	"		R	"	"	"	3 ~ 5 mm	62×52	やや摩耗
4	"	"	チョウセンハ	マグリ	R	"	"	"	2 ~ 5 mm	(37)×(39)	"
5	L10a	"	"		R	"	"	"	4 ~ 7 mm	78×56	光沢あり
6	L10ホ	"	"		L	"	"	"	2 ~ 3 mm	83×65	摩耗
7	L14c	"	"		L	"	"	"	2 ~ 5 mm	71×58	穿孔,光沢
8	?	?	ハマク	· ŋ	L	"	"	"	2.5~ 4 mm	(55)×51	光沢

貝 刃 図 (2)

※()は破損部の現長

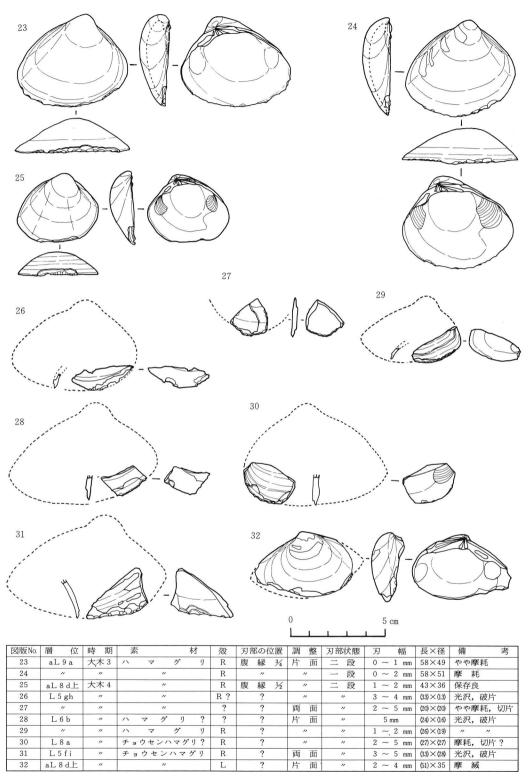


貝 刃 図 (3)

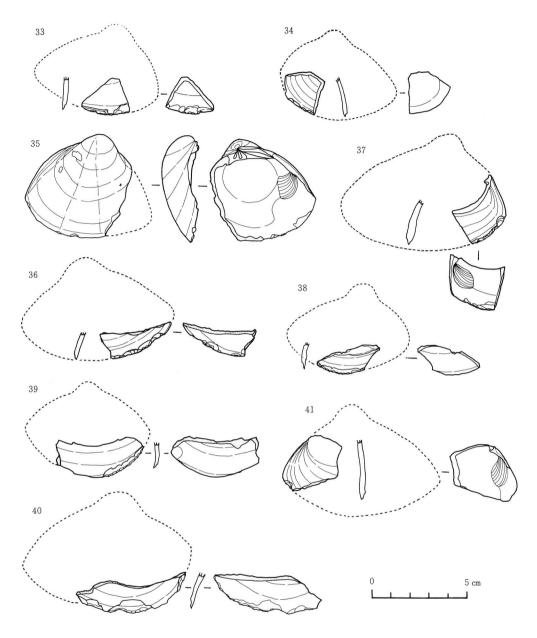


図版 No.	層位	時期	素 材	殻	刃部の位置	調整	刃部状態	刃 幅	長×径	備考
17	aL8d上	大木4	ハマグリ	L	腹縁全般	片面	二段	1 mm	51×41	保存良
18	L14c	大木3	チョウセンハマグリ	L	"	"	"	0 ~ 1 mm	68×55	"
19	"	"	"	L	腹縁 ¾	ldj thi	"	1.5~ 4 mm	71×58	やや摩耗
20	aL8d下	"	"	L	"	"	"	0 ~ 1 mm	66×53	"
21	L 8 a	大木4	"	L	"	片 面	"	2 ~ 6 mm	80×63	摩耗
22	aL8d上	"	ハマグリ	L	"	"	"	0 ~ 1 mm	47×38	"

貝 刃 図 (4)

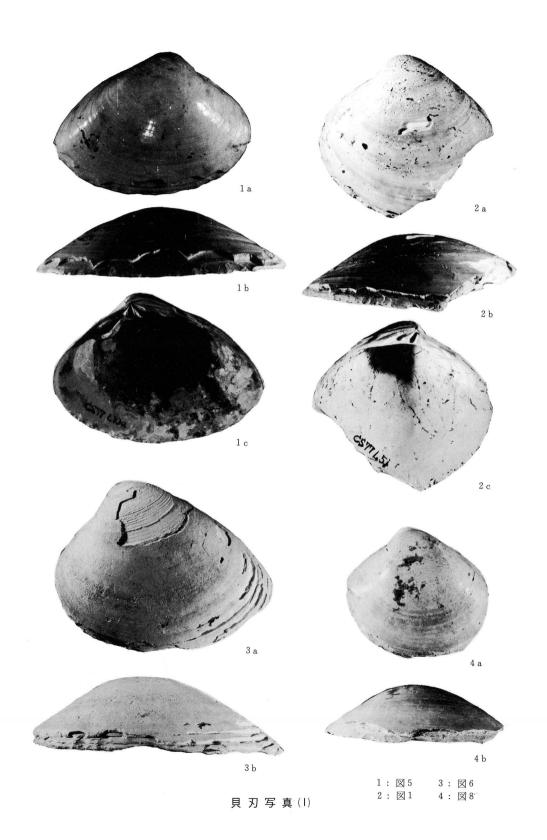


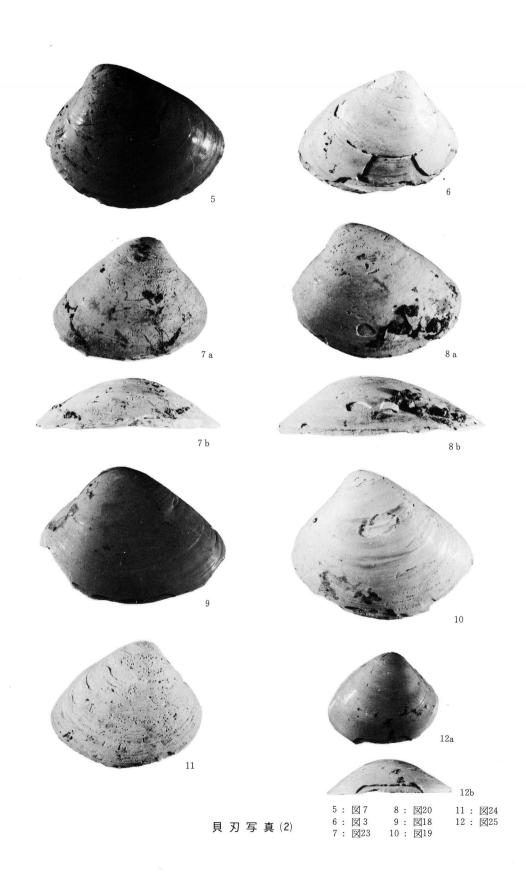
貝 刃 図 (5)



図版No.	層位	時期	素材	殻	刃部の位置	調整	刃部状態	刃 幅	長×径	備考
33	aL8d上	大木 4	チョウセンハマグリ?	?	?	両 面	二段	2 ~ 5 mm	(25) × (19)	摩滅,破片
34	aL8d中	大木 3	ハマグリ	L?	?	片面	一段	1 mm	(21) × (23)	やや摩耗,破片
35	bL8d	"	"	R	?	?	?	?	(56)×55	一部にリタッチ
36	aL9a	"	チョウセンハマグリ	R ?	?	両 面	二段	2 ~ 3 mm	(38) × (20)	光沢,破片
37	aL10b	"	"	R	?	"	"	2 ~ 3 mm	(29) × (37)	" "
38	"	"	ハマグリ	R ?	?	片面	"	2 mm	(33) × (15)	" "
39	bL13b下	"	"	R	?	"	"	3 ~ 4 mm	(46) × (21)	" "
40	"	"	チョウセンハマグリ	R ?	?	両 面	"	3 ~ 7 mm	(59) × (18)	〃 切片?
41	"	"	"	L	?	?	?	2 mm	(33) × (29)	″ 破片

貝 刃 図 (6)





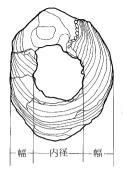
口. 貝 輪(図1~18,写真1~12)

貝輪は計18点出土した。

形態的には、(A)素材の中央部を切りとった輪状のものと、(B)半円 周形の帯状のものとに分けられる。素材は、イタボガキ7点、マガキ6点、ハイガイ、アカガイ各2点、ベッコウガサガイ1点で、イタボガキ、マガキが圧倒的に多い。

(A)輪状のもの…計 6 点あり、内径が輪の幅より大きいもの 4 点、逆に小さいものが 2 点である。イタボガキ 3 点、アカガイ、ベッ

コウガサガイ,ハイガイが各1点ある。いずれも貝の中央部を粗



図ハ 貝輪計測名称図

雑に打ち欠いたり、殻頂部を切りとっただけで、細かい調整や研磨などが施された形跡はほとんど認められない。内径も $12\sim32$ mmと小さい。

(B)帯状のもの…計12点で、ほとんどが破片であり、基本的には(A)に含まれるものが多いと見られる。加工調整法から次の4つに分けられる。

- ①帯状に切りとって縁辺および全体を研磨したもの(7,8)
- ②帯状に切りとって縁辺と殻表の一部を研磨したもの(9,10,11)
- ③帯状に切りとって縁辺のみを研磨したもの(12, 13, 14, 15, 16)
- ④素材の中央部を打ち欠いただけのもの(17,18)

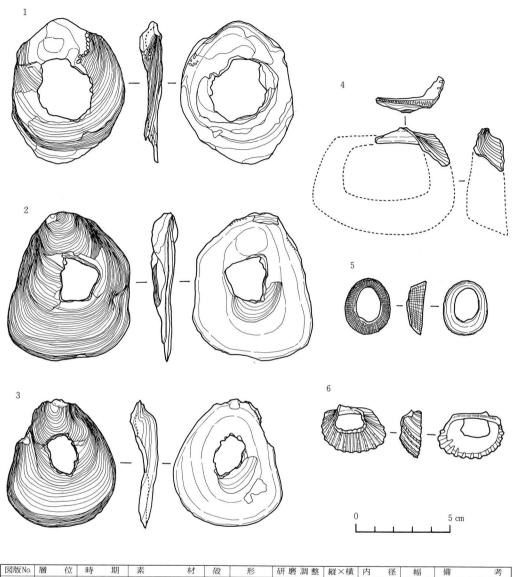
素材としては、マガキ 6 点、イタボガキ 4 点、アカガイ、ハイガイ各 1 点である。全般に調整は①以外は粗雑なものが多い。輪の幅は $8\sim19$ mm、内径は $30\sim40$ mm程度のものが多いようである。

ハ. 有孔貝器 (図19~22, 写真13~16)

計4点出土した。素材はハマグリ2点,カリガネエガイ,イボニシが各1点である。このうち(21)のハマグリ製のものは、腹縁を帯状に切りとり、両端部に両面からの穿孔を施し、研磨を加えたもので装飾品と考えられる。他のものは、素材の一部に一方からの穿孔を施したのみで他の調整は全く見られない。いずれも大木3式期のものである。

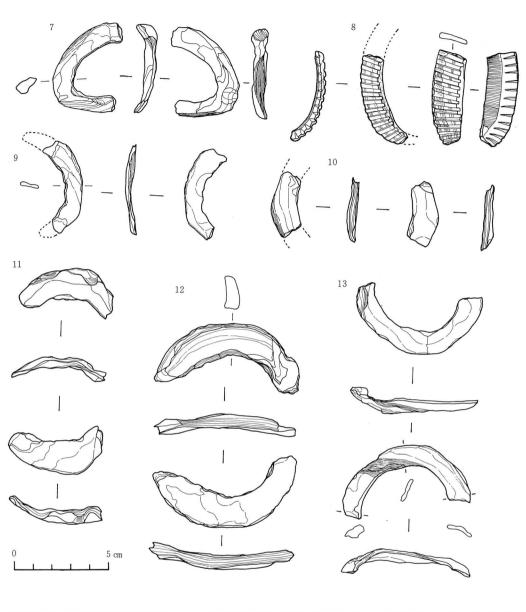
貝の同定は、波部忠重「貝」(標準原色図鑑全集③・保育社刊・1966) に拠った。

(岩渕 康治)



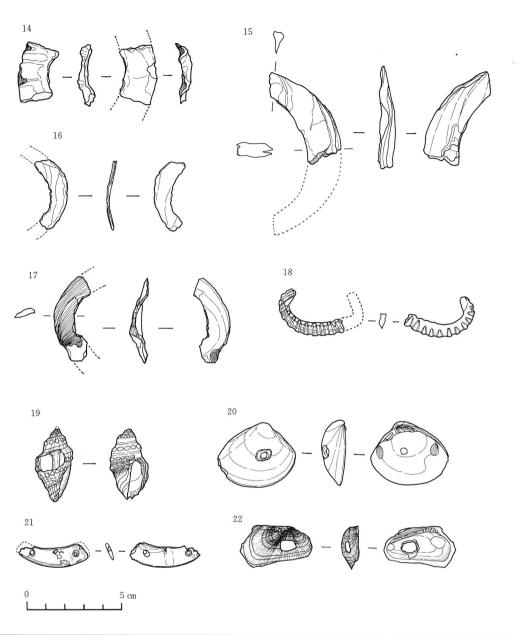
図版No.	層 位	時		期	素			材	殼	形	研磨調整	縦×横	内 径	幅	備	考
1	L 5 e	大	木	4	1	タ	ボーガ	+	L ?	輪状	外 縁	77×60	32×29	13~24	完 形	
2	L14d	大	木	3			"		L	"	無	79×65	23×20	17~31	"	
3	L8b	大	木	4			"		L	"	"	68×58	20×14	16~27	"	
4	aL10b	大	木	3	ア	カ	ガ	イ	?	" ?	"	(40) × (20)	?	8~11	破片	
. 5	aL8d上	大	木	4	~.	ッコウ	ガサ	ガイ		"	"	30×24	18×13	5 ~ 6	完 形	
6	"		"		/\	イ	ガ	イ	L	"	"	24×34	12×15	5~12	"	

貝 輪 図 (I)



図版 No.	層 位	時 非	胡	素	材	殻	形	研磨調整	縦×横	内 径	幅	備考
7	L6a	大 木	4	イタボ	ガキ	L	帯 状	全 体	47×(38)	28	9~11	半欠,本来輪状?
8	aL8d中	大 木	3	アカ	ガイ	R ?	"	"	(46) × (29)	?	11~15	破片
9	aL8d上	大 木	4	イタボ	ガキ?	?	"	両縁辺殼表	(48) × (24)	?	8 ~11	"
10	aL8d中	大 木	3	マガ	+ ?	?	"	縁辺殻表	(30) × (17)	?	11~14	"
11	aL10b	"		"	?	?	"	縁辺殻表	(50) × (25)	?	8 ~11	"
12	L5 /\	大木 4 01	r 3	"		?	"	縁 辺	(77) × (36)	?	16~19	"
13	L 5 j	大 木	4	イタボ	ガキ	R	"	"	(67) × (40)	45	8 ~12	半欠,本来輪状?

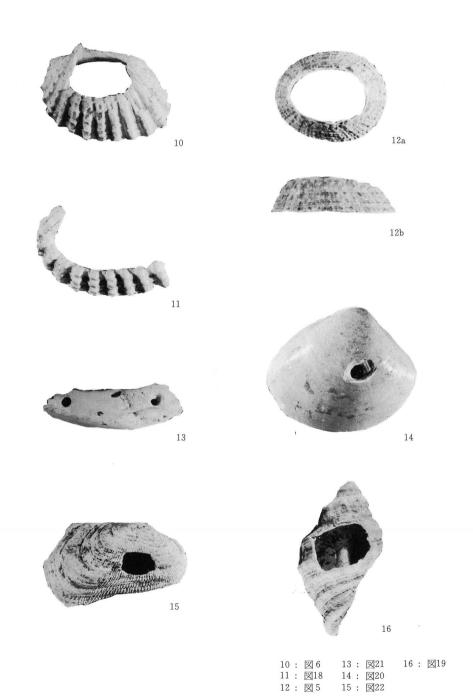
貝 輪 図 (2)



図版 No.	層 位	時 期	素	材	殼	形	研磨調整	縦×横	内 径	幅	備考
. 14	L6a	大 木 4	マガ	+ ?	?	帯 状	縁 辺	(32) × (21)	?	16~17	破片
15	bL8d	大木 4 or 3	"		?	"	内 縁	(48) × (40)	?	12~18	"
16	"	"	イタホ	ボ ガ キ	?	"	縁 辺	(32)×(19)	?	8 ~ 9	" "
17	L4h	大 木 5	"	•	R	"	無	(45) × (20)	?	10~11	"
18	bL8d	大木 4 or 3	ハイ	ガイ	L?	"	"	(35) × (25)	?	5 ~ 7	"
					く有	孔 貝	器 >				
19	?	?	イ ボ	ニシ	,		中央部穿孔	39×19	15× 9		
20	L9b	大 木 3	ハマ	グリ	R		"	41×34	9 × 6		
21	aL10b	"	"	,	?	帯 状	両端穿孔	(37)×(12)	3. 5, 2. 5		両端破損
22	bL13b下	"	カリガラ	ネエガイ	R		中央部穿孔	38×22	6 × 8		

貝 輪 図 (3)





貝輪, 有孔貝器写真(2)

Ⅸ. 骨 角 器

計15点出土。内訳は、刺器 8 点、装飾品 4 点、釣針 1 点、未成品 2 点などとなっている。素材は、ほとんど鹿角ないし獣骨であり、鳥骨が若干ある。

イ. 刺 器 (図1~8, 写真1~7)

計8点出土したが、形態および製作技法などから次の3つに分けられる。

- ①鳥獣の長管骨を縦割りし、一端を尖らせ、研磨したもの。他端にはほとんど加工、調整は加えられない。長さ11cm以上の細長いものである。(1, 2, 3)
- ②獣骨の一端を尖らし、全体にていねいな研磨を施したもの。一端に穿孔されている可能性あり。長さ $7\sim10$ cm程度。(4,5)
- ③主として鹿角を小さく削り、先端を尖らせ、ていねいに研磨したもの。長さ $4 \sim 6 \text{ cm}$ 。断面やや扁平のものが多い。(6, 7, 8)

これらは、おおむね、先端部が摩耗もしくは横方向の擦痕の観察されるものが多い。

口. 装飾品(図9~12, 写真8, 9, 11)

(9,10) は暗赤褐色を呈した同種の素材で、獣骨の鎖骨などを利用したもので自然に弯曲している。(9)は、細長い素材の両端付近に各々2本の切りこみをつけ、側縁部を波形に加工し、研磨を加えたものである。先端部には、長軸に直角方向の擦痕が認められる。他端が破損して不明だが、櫛か笄のような装飾品かと思われる。(10)は、一端が破損していて全形は不明であるが、一端部に両面穿孔の孔を有し、全体に研磨を加えたもので刺器の可能性もある。(1)は、管骨を輪切りにし、全体的に研磨を加えたもので管玉様の垂飾的なものと考えられる。(2)は、魚椎骨の中央に小孔を穿ったものであるが、全体に磨耗が著しい。

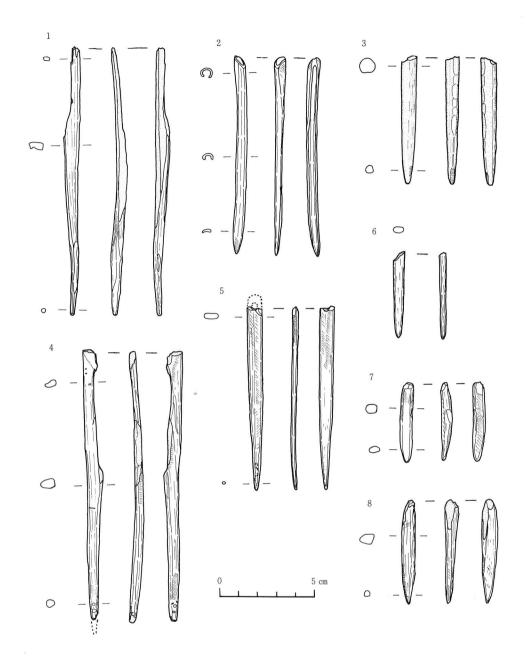
ハ. 釣 針 (図13, 写真10)

鉤部先端が破損している。素材は鹿角で、全体に加工時の凹凸が見られるが、研磨もよく及び、全体に均整がとれている。長さ61mm。鉤部付近には、擦切痕と研磨痕が見られる。大木6~10式に属する。

二. 鹿角未成品 (図14, 15, 写真12)

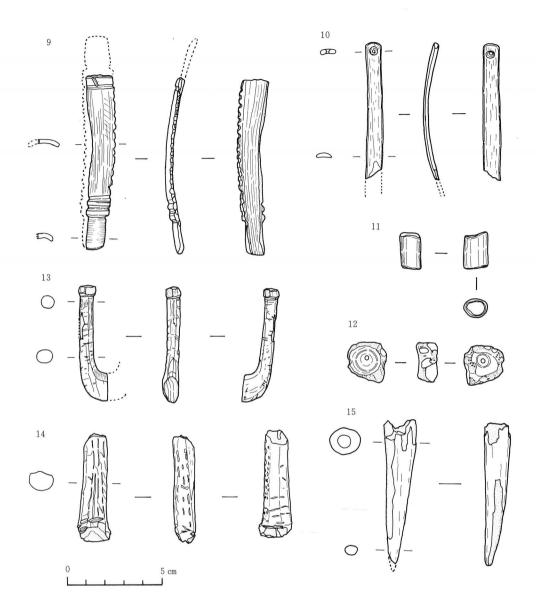
いずれも、鹿の幼獣の角らしく、太さは13~17mmと細い。(14)は基部に擦り切り痕がある。他に加工痕跡ナシ。(15)は鹿角の先端付近の部分だがほとんど加工の形跡は見られない。

(岩渕 康治)



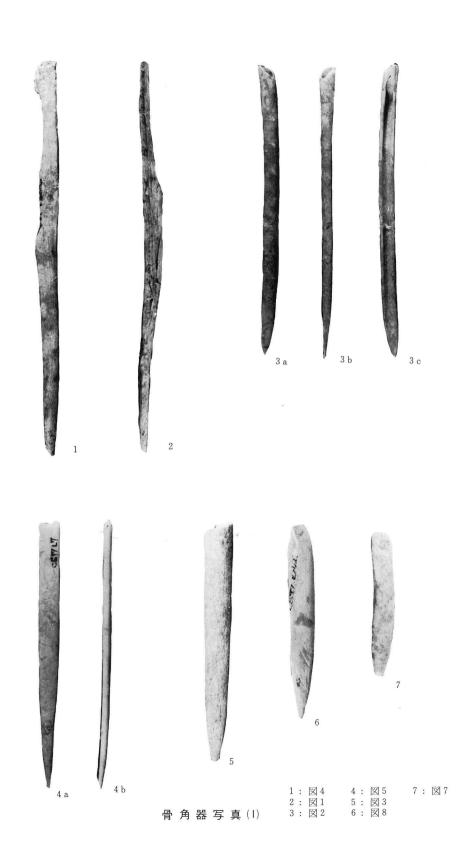
図版 No.	層 位	時		期	素	材	種	別	成 形	研		磨	長さ	太	さ	備考
1	L40	大	木	5	獣	骨	刺	器	半切荒割	-	片半	部	142	2	~ 8	完形, 先端擦痕
2	L 5 d	大	木	4	鳥	管 骨		"	"		"		115	4	~ 6	" "
3	L14c	大	木	3	獣	骨		"	"		"		(143)	4	~ 8	先端破損, 先端擦痕
4	L 5 ?	大	木	4		"		"	先端削る	先		婣	(68)	4	~ 8	上部破損, "
5	L 7		"			"		"	たて割	全		体	97	3	× 7	完形, 先端擦痕扁平
6	aL8d上		"			"		"	"		"		(46)	3	~ 5	基部破損, 先端擦痕
7	aL8d中	大	木	3	鹿	角		"	"		"		42	3	~ 6	完形,基部擦切,扁平
8	L14d		"		獣	骨		"	"		"		55	3	~7.5	″ , 擦痕

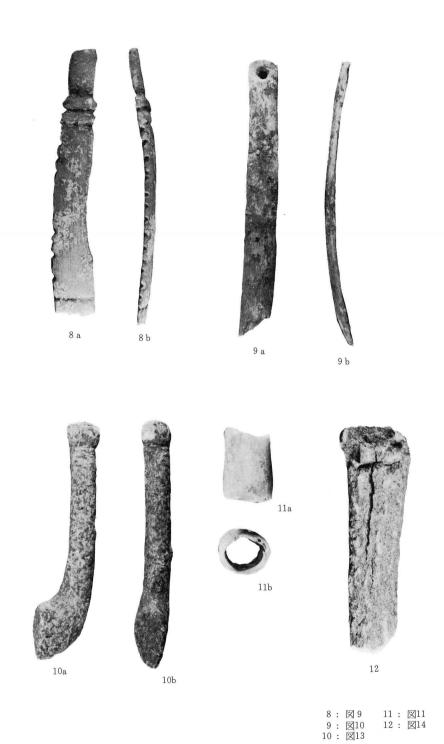
骨角器図(I)



図版No.	層 位	時 期	素材	種 別	成 形	研 磨	長さ	太さ	備	考
9	L 9 d11	大 木 3	獣骨(鎖骨)	装 飾 品	半切荒割	刻み,全体研磨	(93)	9 ~ 15	厚2,一端破損	
10	L10b	"	" (")	装飾品?	"	穿孔,全体研磨	(72)	巾8,厚2	先端破損	
11	aL10b	"	鳥 管 骨	″ (管玉)	輪切り	全 体	20	10 ~ 13	完形, 光沢	
12	L 3 a	大木 6~10	魚 椎 骨	装飾品?	中央穿孔	?	(径21)	(巾11)	磨耗	
13	"	"	鹿 角	釣 針	粗割加工	全 体	61	7 ~ 14	鉤部欠損	
14	"	"	"	鹿角未成品	両端擦切	無	57	13		
15	L14a	大 木 3	"	"	無	"	77	6 ~ 16		

骨角器図(2)





骨角器写真(2)

X. 土 製 品

計9点出土。内訳は、土製円板6点、土偶2点、有孔土製品1点である。

イ. 土製円板 (図1~6,写真1~5)

縄文土器片を円形もしくは楕円形に打ち欠き,周縁を研磨したものがほとんどだが,円板として最初から焼成したものも1点ある。土器片の研磨には,周縁全体にわたりていねいに研磨したものと,単に凹凸をなくす程度に簡単に研磨したものとある。使用土器片は体部破片が3点,底部破片が2点である。大きさは,直径37~45mm,厚さ13mm前後とほぼ一定している。ただし,(1)はやや大形である。(6)は楕円形で,表面に細い半截竹管による刺突文がある。全体に磨滅が激しく,その他の調整の有無などははっきりしない。大木4式期のものである。他の土製円板も,大木4~5式期に属する。

口. 土 偶 (図7,8,写真7,8)

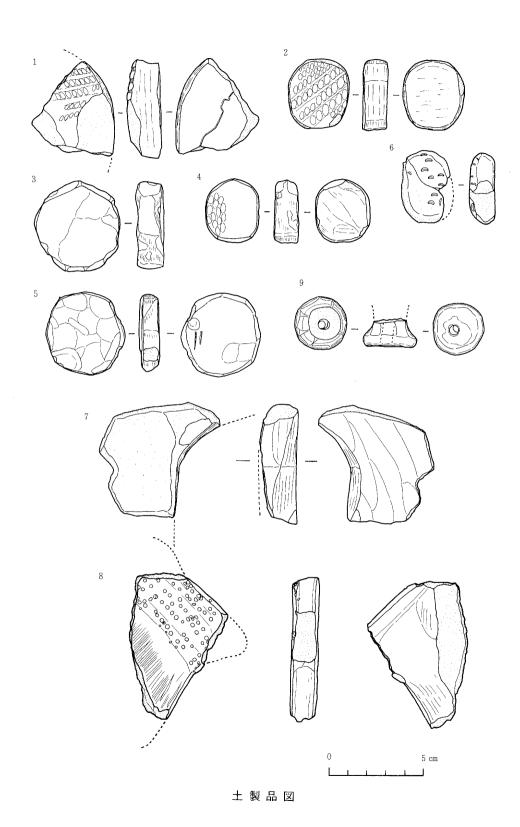
2点出土。(7)は,板状土偶の胴部から腕部にかけての部分と考えられる。片面がほとんど剝落しているので詳細は不明だが,文様などはほとんど見られない。比較的大形のもののようである。大木 $6\sim10$ 式期。(8)は,変形菱形の板状土偶の一部で,腕部,首などを欠いている。全体の 3分の 1 程度の破片であろう。肩部から腕部にかけて帯状の範囲に,細い竹ヒゴ様のもので刺突した文様がある。大木 4式に属する。

ハ. 有孔土製品 (図9, 写真6)

横断面円形の紡錘形の破片で用途不明。中央部に焼成前の円孔が穿たれている。立像土偶の 脚部のようにも見えるが不確定。大木3式。 (岩渕 康治)

図版 No.	層 位	時 期	素材	種別	調整	径 厚	備 考
1	aL4c	大 木 5	縄文土器体部片	土製円板	円形加工, 縁辺研磨	51×48 13~17	
2	L40	"	"	"	","	37 13	完 形
3	L4h	"	縄文上器底部片	"	","	45×48 14.5	"
4	L 6 a	大 木 4	縄文上器体部片	"	", "	34×28 12~13	″,摩耗
. 5	bL 8 d	大木 3 or 4	縄文土器底部片	"	" , "	44×42 10~11	"
6	L 7	大 木 4		"	表面竹管刺突	38×25 13.5	摩耗
7	L3a	大木 6 or 10		板状土偶	き ガ キ	63×61 20	片面剝落
8	bL4c	大 木 5		"	肩部に細かい刺突	67×67 13~14	
9	bL5kl	大 木 4		?	中央部円孔	28 (15)	孔径5.5,破片

大木囲貝塚 CS 77地点出土土製品一覧表





XI. 石 器

今回の発掘では細かく層位でとの発掘が行なわれており、土器型式にも違いがあるため細分 した層でとに打製・磨製をとわずまとめて記述した。石器の名称については概ね従来の呼び方 にしたがったが、いわゆる「スクレーパー」等と呼びならわされているものについては二次加 工ある剝片として記述した。

〈2層〉

石鏃($No.1 \sim 4$) 無茎で三角形を呈するもの(No.3),無茎で抉りのあるもの(No.1.2), 両面加工で左右非対称のもの(No.4)にわけられる。No.1は半両面加工で,No.2は先端と下部が一部欠損している。

二次加工ある剝片(No.5) 主要剝剝離面の下端縁辺と背面下端,右側辺に細かい二次加工がある。背面の加工から石鏃の未製品の疑いもあるが,そのまま使用された可能性が強い。

〈3 a層〉

二次加工ある剝片 (No.6.8) No.6 は剝片の打面から背面に二次加工が施されてステップフラクチャーを呈す。側辺にも細い二次加工が見られるが石鏃の未製品とも考えられる。

No.8は、背面左側辺の下端にかけて特に細かく調整が行われていて、全体の形状はなぎなた形になっている。右側辺にも軽い刃とぼれが見られ、縁辺の形も若干変化している。

両面加工石器 (No.7) 両画があらく加工されている。 a 面左側と b 面の対応する部分には 細かい二次加工が見られる。特に b 面右側辺下端はステップフラクチャーになって磨耗している。上半は折損している。

〈L3b層〉

独銛石状石製品 (No.10) 石材は凝灰質砂岩である。磨耗が激しく研磨の方向などでは不明である。

玦状耳飾(No.9) 石材は縁泥片岩である。上部には補修のためにあけようとした穴が未完成のまま残されている。a面は深くb面は浅い。

〈a L 3 c 層〉

石槍 (No.11) 画面加工の尖頭器である。尖端部は丸みを帯びている。所々に新しい剝離面がある他は青灰色のパテナに覆われている。

二次加工ある剝片 (No.12) 剝片の主要剝離面左側辺と背面の周辺に二次加工を加えて尖端部を作りだしている。石鏃の未成品とも考えられる。

〈b L 3 c 層〉

石錐(No.13) つまみのある石錐である。錐の部分の磨耗ははっきりしない。

二次加工ある剝片 (No.14) 剝片の上下を折断した後に両側から二次加工されている。両側の,折れは加工後と考えられる。

〈b L c 層〉

石刀 (No.15) 薄く研磨されている。両側辺の磨痕がいちじるしい。元の形状は不明である。 〈**L4口層**〉

磨製石斧(No.16) 緑泥片岩製の両刃の磨製石斧である。 b 面はかなり剝落しているが上部 の研磨痕から判断すると再利用を意図したことがうかがえる。 a 面を見ると刃部に深い擦痕が 直角に走っている。擦切手法の可能性もある。

二次加工ある剝片 (No.17) 縦長剝片の主要剝離面両側に不規則な二次加工が見られる他, 背面にも若干見られる。

〈L5fi層〉

石鏃 (No.18) 無茎で抉り込みを有する石鏃である。先端を少し欠く。No.22, 24に類似する。 < 6 a 層 >

石鏃(No.19) 無茎で抉り込みを有する石鏃である。先端部が若干欠損する。

刃こぼれを有する剝片(No.20) 縦長剝片の背面右側辺に二次加工とは思われない細かい刃 こぼれがある。

〈L8 a層〉

垂飾(No.21) 軟玉製でていねいに研磨されている。全容は不明であるが玦状耳飾の可能性がある。

〈a L 8 d上層〉

石槍 (No.25) 平行な平担剝離が両面を覆っている。両側辺はほぼ直線的であるが基部が若 干細くなっている。先端部に近づくに従って薄く整形されており、先端は磨滅し丸くなってい る。

石鏃 (No.22) 無茎で基部に抉り込みを有する石鏃である。形態的にNo.18,24に類似する。 先端と片脚が欠損している。

〈a L 8 b 下層〉

石鏃(No.24) 基部に抉り込みを有する無茎の石鏃である。

〈b L 8 d層〉

刃こぼれを有する剝片(No.23) 自然面を打面とする幅広で打面部の厚い剝片である。両側辺ともに軽い刃こぼれが見られる。

〈a L 9 c 層〉

石鏃(No.26) 無茎で抉りを有する石鏃で一部に第一次剝離面を残す。

〈b L 9 b 層〉

二次加工ある剝片(No.27) a 面下部からステップフラクチャーを呈する加工が入る。右側 辺にも若干刃こぼれ状の細かい剝離がある。上半は欠損しており、火を受けた損傷が a 面に見 られる。

· 〈b L 9 二層〉

二次加工ある剝片(No.28) 背面にb面の剝離痕を有する比較的厚手の剝片である。主要剝離面の末端が加工されており打面附近の磨耗が激しい。右側辺には細かい二次加工がある。背面下部にも剝片剝離後の加工が末端から施されている。

〈b L 10層〉

石鏃 (No.29) 無茎で抉り込みを有する石鏃である。両側辺が軽く内わんし,先端へと続く。 b面に第一次剝離面が残る。

〈b L 13 b 下層〉

石刀(No.30) 石刀の柄と思われるが詳細は不明である。

〈L14 c 層〉

剝片(No.32) 末端がヒンジフラクチャーを呈する縦長の剝片でほとんど二次加工はない。 両側辺の剝離は新しいものであるが、打面はとりさられている。

石鏃(No.33) 剝片の縁辺に加工を施し抉り込みを入れた石鏃である。両側辺は軽く外わんする。先端を一部欠く。

〈L14d層〉

石鏃(No.31) 加工から石鏃と考えられる。両側辺の加工はちょうど錯向剝離のようになっており先端部は背面側につくり出している。加工はいずれも急角度で、剝片の上下を折りとり加工したと考えられる。

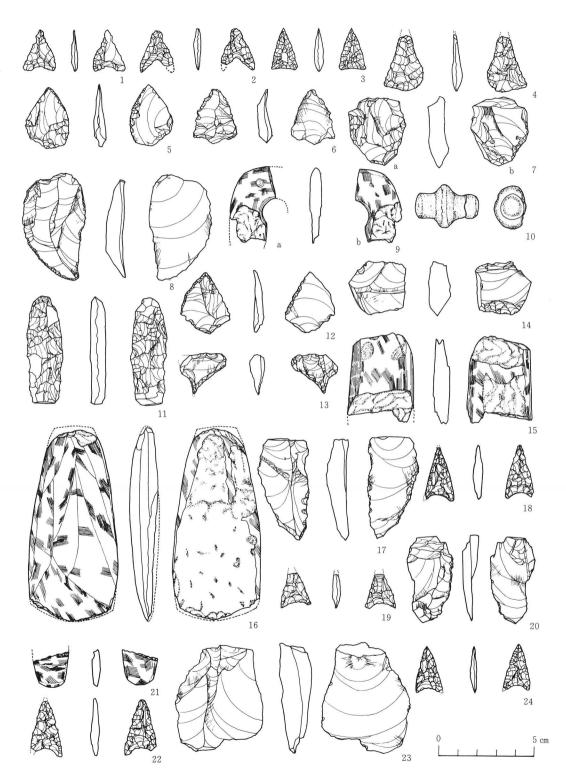
篦状石器(No.34) a 面はほぼ全面加工されている。b 面は両側辺と上部にのみ加工がある。 〈**層不明**〉

凹み石(No.35) 上下と両側面にかなり深く連続した凹みが見られる。

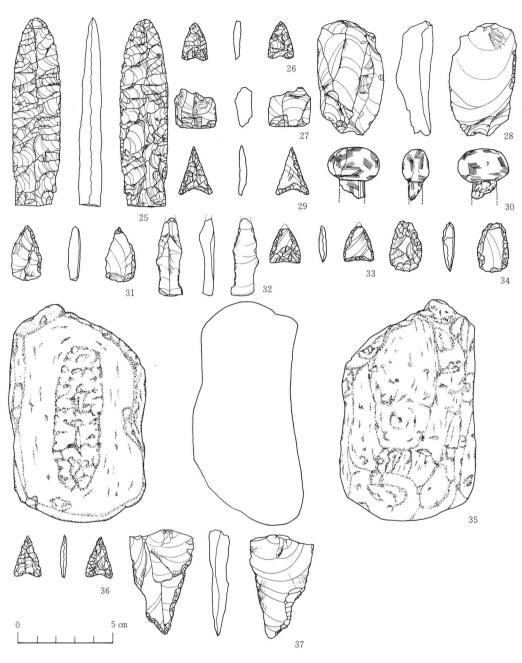
石鏃(No.36) 無茎で抉り込みを有する剝片である。側辺が一部鋸歯状を呈する。

二次加工ある剝片 (No.37) 縦長剝片の側面から下部にかけて細かな加工を施して先端部を作り出しているため石槍の一種とも考えられる。

(梶原 洋)



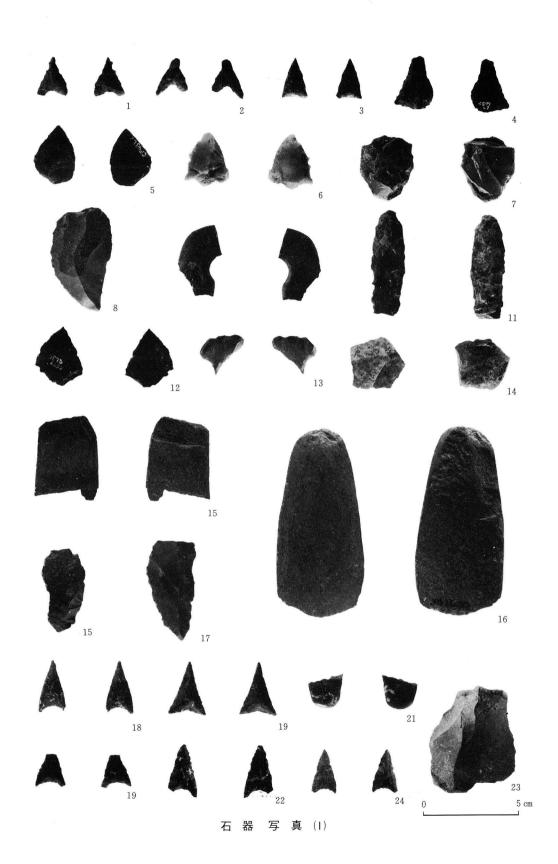
石 器 図 (I)

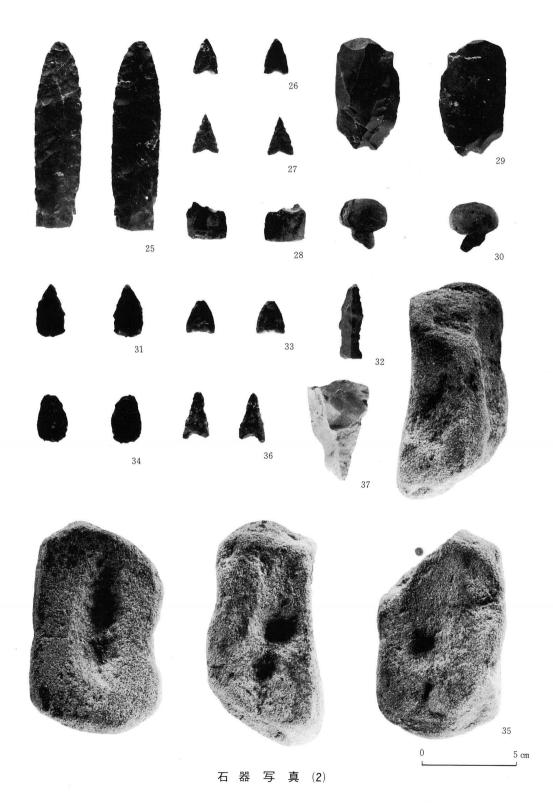


石 器 図 (2)

石 器 表

No.	層 位	名称	大きさ (長×幅×厚)	石 質	備考
1	2 層	石 鏃	$2.2 \times 1.7 \times 0.3$	頁 岩	
2	"	"	$2.2 \times 1.7 \times 0.3$	"	片脚欠損
3	"	"	$22.21 \times 1.4 \times 0.48$	"	
4	"	"	$2.8 \times 2.1 \times 0.4$. "	左右非対称
5	"	二次加工ある剝片	$3.2 \times 2.3 \times 0.5$	"	
6	3 a 層	"	$2.8 \times 2.3 \times 0.6$		石鏃未製品か?
7	"	"	$3.52 \times 2.97 \times 0.85$	頁 岩	
8	"	"	$5.4 \times 3.4 \times 0.7$	11	
9	3 b 層	玦 状 耳 飾	幅 1.8 × 厚 0.3	軟 玉	補修孔?(未通)あり
10	"	独鈷石状石製品	$3.2 \times 2.0 \times 1.3$	砂岩	
11	a 3 c 層	石 鏃	$5.5 \times 1.8 \times 0.6$	頁 岩	一部偶然による剝離あり
12	"	二次加工ある剝片	$3.0 \times 2.5 \times 0.4$	頁 岩	
13	b 3 c 層	石 錐	$2.1 \times 2.4 \times 0.7$	頁 岩	
14	"	二次加工ある剝片	$2.77 \times 2.95 \times 0.97$	"	両側欠損
15	b 4 c 層	石 刀	$4.5 \times 3.3 \times 0.7$	粘板岩	
16	b 4 c 層	磨製石斧	$10.0 \times 4.5 \times 1.3$	緑沢片岩	擦切?
17	b 4 層	二次加工ある剝片	$5.3 \times 2.3 \times 0.8$	頁 岩	上部欠損
18	5 f i 層	石 鏃	$2.8 \times 1.5 \times 0.15$	不 明	
19	6 a 層	"	$1.8 \times 1.6 \times 0.5$	チャート	先端欠損
20	"	刃とぼれある剝片	$4.5 \times 2.4 \times 0.45$	頁 岩	
21	8 a 層	玦状耳飾?	$1.65 \times 1.9 \times 0.4$	軟 玉	
22	a 8 d上層	石 鏃	$2.9 \times 1.6 \times 0.4$	頁 岩	一部欠損
23	b 8 d 層	刃とぼれある剝片	$5.7 \times 4.6 \times 1.4$	"	
24	a 8 d下層	石 鏃	$2.4 \times 1.4 \times 0.3$	"	
25	a 8 d上層	石 槍	$9.9 \times 2.4 \times 1.0$	"	一部欠損
26	а 9 с 層	石 鏃	$2.0 \times 1.38 \times 1.32$	"	"
27	b 9 b 層	二次加工ある剃片	$2.0 \times 2.2 \times 0.6$	"	
28	9 z 層	〃 剝片	$5.9 \times 3.5 \times 1.6$	"	
29	b 10 層	石 鏃	$2.5 \times 2.2 \times 0.35$	"	
30	b13b下層	石 刃	$2.7 \times 2.7 \times 1.4$		欠 損
31	14 d 層	石 鏃	$2.85 \times 1.6 \times 0.6$	頁 岩	
32	14 c	剝 片	$5.7 \times 6.6 \times 1.4$	"	
33	"	石 鏃	$1.85 \times 1.6 \times 0.3$	"	先端欠損
34	14 d	篦 状 石 器	$2.7 \times 1.7 \times 0.35$	"	
35	層不明	凹 み 石	$12 \times 6.7 \times 5.4$	砂岩	
36	"	石 鏃	$2.1 \times 1.4 \times 0.2$	頁 岩	
37	"	二次加工ある剝片	$5.5 \times 3.3 \times 0.8$	"	主要剝離面に偶然による剝離あり





七ヶ浜町文化財調査報告書第4集

大 木 囲 貝 塚

一昭和52年度環境整備調査報告一

昭和54年3月20日印刷 昭和54年3月31日発行

発行 七ヶ浜町教育委員会

宮城県宮城郡七ヶ浜町東宮浜字丑谷部5-1

印刷 株式会社 東北プリント 仙台市立町24-24 電話 (63) 1166

